

歌あ「〇一本な」り。

住吉の濱のみるめも忘れねば假初人にまた訪はれけり  
是れ又蛙の正しく詠みし歌なり。

曾我物語 卷第六

十郎大磯へ行き立聞の事

然ても十郎祐成は三浦より曾我へ歸りけるが、定め無き浮世の習ひ、つくづくと案するに、明日富士野に打出でて、歸らんことは不定なり、此二三年情を掛けて淺からぬ虎に暇をばんとて、宿河原、松井田と申す所より、大磯にこそ行きにけれ。折節鎌倉殿石に従ひ、近國の大名小名打連れ打連れ通りけり。十郎、虎が宿所に立寄りて在りけるが、心を替へて思ひけるは、國國の侍多く通る折節なれば、流を立つる遊者、また我れならぬ人に情もやと、心もとなく思はれて、暫く駒を控へて内の體をぞ聞き居たる。折節虎が住家には、友の遊君あまた並居て物語しける中に、虎が聲と覺しくて、「只今上る人人は何處の國の誰人ぞ、聞き給はずや。」先陣は横山の藤馬丞」とぞ申しける。虎聞きて、「まことや孔子の言に、耳の樂む時には慎むべし、心の驕る時には恣にすべからざれとは申せども、哀れ、げに、此殿ばらの馬、鞍、鎧、腹巻をわらはにくれよかし。」女房達聞きて、「合はぬ願ひ物、何の御用にや」と云ふ。「祐成に參らせ、思ふ事を」とばかり云ひて涙を浮べけり。友の遊君聞きて、不思議やな、思ふことは何なるらんと怪みながら、問ふべきにあらず、敵討ちて後にこそ此事よとは知られけり。然れば此人もかねてより知りけるよとは申し合ひ

けり。祐成物越しに聞きて、如何でか程情深きものに、立聞したりと思はれては、後の怨も残るべし。後暗くも思ひなば來ぬこそと思ひつつ、知らざる體にもてなし、駒の口を暫し控へ、何と無く廣縁に下り、鞭にて簾を打揚げ内に入りぬ。虎もやがて出で、何時より睦まじく語り寄り、飽かぬ世の中の夢か現かと思ひ居たりける處に、思の外なる事こそ出で來たれ。

和田の義盛が酒宴の事

然る程に和田の義盛一門百八十騎打連れて、下野へ通りけるが、子共に向ひ云ひけるは、「都の事は限あり、田舎にては黄瀬川の龜鶴、手越に少將、大磯の虎とて海道一の遊君ぞかし、一獻進めて通らばや。」然るべく候」とて、彼の長の方へ使を立てて、「斯くぞ」とは云はせけるに、長斜ならず喜びて、遠侍の塵取らせ、義盛これへと請じけり。虎に劣らぬ女房ども三十餘人出で立たせ、座敷へこそは出だしけれ。朝比奈の三郎義秀、古郡左衛門胤氏を先として、八十餘人居流れ「〇一本てアリ」、すでに酒宴ぞ始まりける。然れども虎は座敷へ出でざりけり。義盛心得ず思ひて、「此君達も然る事なれども、虎御前の見參の爲めなり、何とや見え給はぬ、義盛悪しくや参りて候か」と云ひければ、母聞きて、「此程煩はしくて」と云ひながら、座敷を立ち虎が方へ行き、「何とや遅く出で給ふぞ、疾く疾く」と云ひ置きて、母は座敷へ出で、「只今虎は参り候」と云ひければ、義盛杯控へ、今や待てども見えざりけり。なかなか始より心

地例ならでと云ひなば好かるべきもの「〇二本ものナシ」を、只今と云ふに由り、義盛色を損じ、「御心に背く事あらば、罷り立ちて重ねて参るべし」と云ふ。母聞きて惡様にやと思ひ、又座敷を立ち、「何とて出で給はぬぞや、時世に従ふ習ひ、思はぬ人に馴るるも然のみこそ候へ、怨めしの御振舞や」とて佇む。虎は又、十郎が心かねて衣引き被き打臥しぬ。母は此心を見かねて、「如何にや昔のふん女が事をば知り給はずや、然様の事だに有るぞかし。猶も出でまじくは、六字の名號も御照管候へ、生生世世不孝する」と云ひ捨てて、座敷へこそは出でにけれ。

ふん女が事

そもそもふん女と申す由來を委しく尋ぬるに、昔大國流沙の水上に、ふん女と云へる女あり、天下に聞ゆる長者なり。金銀珠玉のみならず、七珍萬寶四方の藏に餘りけり。然れども如何なる罪の報にや、一人の子無し。悲みて祈れども協はず。或時思はざるに懷妊す。悦びの思ひを成すに、苦めること云ふばかり無し。然れども子の出で來ぬべき事の嬉しきに、物の數とも思はざりけり。日數積る程に産の紐を解く。見れば人には有らで、卵を五百生みたり。「是れは如何に、一つなりとも不思議なるぞかし、五百まで生ること只事にあらず、縁無き子を強ひて祈るに因つて、天の憎みを被ぶると覺えたり。解りなば如何なるものにて親をも損じ、人をも害すべきやらん。其上胎卵濕化の中、卵生罪深しと説かれたり、置くべか

らず」とて箱に入れて、流沙の浪に流し捨てけり。不思議なる例なり。遙かの川の末にれりかんと云ふ所に、きよはくと云ふ貧道無縁の老人あり。且暮此河の魚族を漁り身命を助りけるが、折節釣りする所へ此箱流れ寄りたり。取り上げ開き見れば卵なり。何者の子やらんと思ひ、家に取りて歸り妻に斯くと語る。女これを見て、「恐ろしや如何なるものにか孵りなん、主も様ありてこそ捨てつらん、急ぎ元の川に入れよ」と云ふ。男の云はく、「ただ置き候へ、斯様なるものには不思議もこそ有れ。たとひ僻事ありとも、我等は船幾程も有るべきならねば、彼が様を見よ」とて、物に包み暖にして置きたりければ、程も無く美しき男子に孵りぬ。我れ古より子の無き事を歎き思ふに、然るべき瑞相天の憐みにやと喜びて、また見れば、孵り孵りて五百人にぞ孵り揃ひける。一つを捨てて一つを養はんこと怨めしく黙し難くて、取り集め養ひけるに、一つも恙無く成長しけるぞ不思議なる。まことに夫婦二人の時だにも、渡世協ひ難く乏しかりけり。まして此者共を育てける程に、朝夕の生路に佗びければ、此處や彼處に徘徊し、命を助からんとする程に、心ならず猛悪に成り、思はずも欲心に住す、瞋恚を旨として驕慢に餘りければ、外道にも近づきけり。或時彼等云ひけるは、「我等一人ならず饑ゑに及びべり。然ればとて徒らに身を捨つべきにあらず。此川上にふん女とて長者あり、財寶藏に置き餘る。いざや行きて打破り、寶を取りぬべし」と云ひければ、一人が進み出で云ふやう、「然る事なれども、其れ程いみじき果報者を、我等卑しき貧力にて、寶を奪はんこと思ひも寄らず、却つて身の仇と成りぬべし、案じ給へ」と云ふ。今一人進みて云ふやう、「然らば外道と

もを語らひ、彼等が神通の力を借りて破つて見ん、然るべし」とて、飛天外道と云ふ者の許へ云ひ遣りたりければ、もとより鬪諍修羅を好むものなれば、同類を催し打つ立ちける。装束には流轉生死の鍔直垂に、惡業煩惱の籠手をさし、貪欲の脇立に、因果撥無の脛當に、愚癡暗蔽の頬貫履き、極大邪見の膝申に、誹謗三寶の裾金物をぞ打つたりける。三界無安の白星の兜に、六趣輪廻の頬當、瞋恚忿怒の刀をさし、放逸無慙の太刀を佩き、殺生偷盜の大弓に、破戒無明の弦を掛け、苦患極重の箆には、諸法愛著の矢數をさし、四天王の馬の太く逞しきに、四苦八苦の鞍置きてぞ乗つたりける。異類異形のしも「〇一本した」外道ども、思ひ思ひの装束に、色色の旗ささせ、數を知らずぞ集りける。城中には静まりかへりて音もせず。然れども用心厳しくて、たやすく入るべきやうは無し。時を移して鬪踏へたり。彼のふん女と申すは、同じ福者と云ひながら、三寶を崇め仁義を亂さぬ賢人なり、如何でか諸天も捨て給ふべきならねば、ふん女を渴仰し給ひけり。斯くては如何があるべきとて、死生知らざる外道ども喚き叫んで亂れ入る。其時惡魔を降伏の四天、十二天影向なりて、四角四方を守り給ふ。四天は本より甲冑を鍔ひ、弓箭を離さぬ勇士なれば、面も振らず支へ給ふ。火天猛火を放し、風天風を吹かせ、おのおの城を守り給ふ。中にも水天は弓矢を守らんと誓ひ給ふなれば、數の眷屬を引き連れ、妙觀みつち「〇さつち(察智)ノ訛」の旗ささせ、殊に進みて見え給ふ。其日の御裝束には、九品正覺の直垂に、相好莊嚴の籠手をさし、上求菩提の小具足に、下化衆生の脛當、しくりやう「〇しむりやう(四無量)ノ訛」觀の頬貫履き、大悲大衆の頬當し、無數方便の赤糸のけ「毛カ」

を引かせ、紫磨黄金の裾金物をこそ打つたりけれ。萬徳圓滿の月眞甲に打ち、畢竟空しく「〇しん(心)ノ訛」の四方白の兜の猪首に著、五劫思惟の贖物造の太刀を帯き、首楞嚴定の刀をさし、火舎三昧の機弓、實相般若の弦を掛け、智徳無量の矢數をさし、隨類化現を羽に交へ、管高に負ひなし給ふ。元より手馴れし大蛇後ろより匍ひ掛かり、左右の肩に手を置き、兜の上に頭を持たせ、兩眼の光明かにして、時時電四方に散り、紫の舌の色鮮かにして、折折火焰を吹き出だす勢天に餘る。今の世に兜の龍頭を打つこと此時よりぞ始まりける「〇一本り」。おのおの床几に腰を掛けのたまひけるは、「大修羅王が戰の強きも佛力には協はず、ましてや云はん、彼等が勇、物の數にて數ならず、蟻のたけとも覺えたりとて「〇一本とてナシ」、城申静まれ」とぞ下知しけれ「〇一本たまふ」。ここに城の中より武者一人進み出で申しけるは、「只今寄せ來る兵は、何處の國の如何なる者ぞ、又如何なる宿意あるぞ、委しく名乗れ」と云ひければ、五百餘人の兵聞きて、「彼等には親も無し、氏系圖も無し、生るる所を知らねば「〇一本知らざれば」、なんで誰と名乗るべし。朝夕思ふ事とは、寶の欲しきばかりなり。急ぎ藏を開き財寶を與へ給へ。我等思ふ程取りて歸らん」と云ふ。「心得ぬ言葉かな、人に由り分に隨ひ氏も名字も有るものを、猛惡の身不思議なり、委しく申せ」と云ひければ、「問うては何にし給ふべき。然りながら此川上より流れ來る五百人の卵の流人なり、謂れ無ければ人知らず、急ぎ寶を施して歸すべし」と「〇一本ぞアリ」申しけり「〇一本る」。流れ來る兵と云ふを、ふん女つくづくと聞きて怪しく思ひ、槽の下に歩み出でて、「五百人の殿ばら近く寄り給へ、尋ぬべき事あり」と云ひければ、一人堀の際に寄りたり。「そもそも流れ來ると仰せられつる言葉に就いて申すぞとよ。姿は何にて流れけるぞ。「寶をば出ださで、むつかし」とは云ひながら、「我等が昔は如何なる者か生みたりけん、五百の卵にて水上より流れけるを、取り上げて育てけるが斯くなりぬ」と云ふ。然ればこそと思ひ、「其卵は何に入れけるぞ。「玉の宝箱に入れ、上には銘を書きしなり。「銘をば何と書きたるぞ。「はうしやうろうの箱と書けり。「然ては疑ふ所無し、是れは其方の支證なり。此方の證據には、若し此卵恙無く成長あらば訪ね來よ、ふん女と書きて判を押し、箱の底に入れたりしが、刹那も肌を離さじと、頸に懸け持ちたり」とて、懷よりも取り出だす。「然ては疑ふ所無し、汝等は自らが子共なり」とて、門戸を開き出てでければ、尾花の如く支へたる銚劍をも捨てにけり。母も子共の懷しさに、劍の刃も忘れつつ、彼等が中へ走り入りて見廻せば、兵も兜を脱ぎ弓矢を横たへ、おのおの大地に跪づく。いつしか母は懷かしく、思ひの涙に袖しぼる。竝み居たる兵も同じ心に成りにけり。彼も是れも其かと云ふ情の袖も香ばしく、憐れみ憐れむ装は、見るに涙も進みけり。げにや恩愛の中ほど悲しき事あらじ。まことや夜叉羅刹を従へて、猛く勇める武士も、母一人の言葉に皆皆離くぞ哀れなる。斯くて城中に誘ひ入れ、親子の睦み離るなり。

辨才天の事

彼のふん女と申しし人、後には大辨才天と現れ給ふとかや。五百人の人人は五百童子と成り、其一は印鑑

預り給ふ神と現れ、はうしやうろうの箱をも其中に持たせ給ふ。一切衆生の願を悉く見て、安樂世界に迎へんと誓ひ給ふ。斯様に猛き弓取も、母には従ふ習ひぞかし。

## 朝比奈虎が局へ迎に行きし事

然ても母は虎を制しかね、「何とて母には従はざるや」とぞ云ひける。虎は猶も涙に咽び、「流れを立つる身ほど悲しき事は無し。夫の心を思ひ知れば母の命に背き、又母に従へば時の綺羅に愛づるに似たり。とも斯くにも我思ひ、亂れ初めける黒髪の、飽かぬ情の悲しさよ。如何なる罪の報にや、女の身とは生れけん。然ればにや五障三従と説き給ひけるぞや」とて、さめざめと泣き居たり。十郎此有様を見て、「何かは苦しかるべき。一旦こそ有れ、座敷に出で給へかし。母の命に背きなば、冥の照覽も恐ろし」と申しければ、虎は是れにも従はず、ただ泣くより外の事は無し。義盛これをば知らずして、「何とて虎は遅きやらん」とて、一座の興を失ひけり。母も待ちかねけるにや、「曾我十郎殿ましますが、然てや出でかね候らん。」和田は是れを聞きて、「心得ぬ十郎が振舞かな、我れこそ出でて對面せざらめ、流れの遊君を塞ぐべきか。まことに僻事なり。四郎左衛門朝比奈は無きか、御迎に參れ」と云ふ。四百餘人の殿ばらも、早事出で來ぬと色めきけり。祐成が在所近ければ、義盛が言葉手に取るやうにぞ聞えける。「不思議やな、思はぬ最期の出で來たるぞや。身に思ひの有れば、千金萬玉よりも惜しき命なり、然れども遅れぬ所は力無し。徒らなる死を

して、五郎に怨みられん事こそ、思ひ遣られて悲しけれ。然りながら斯様の所は神も佛も許し給へ」と云ふままに、烏帽子おし直し、直垂の露結んで肩に掛け、伊東重代の赤銅造の太刀を二三寸抜き掛け、片膝おし立て、一方の戸を開き、「ことごとしや、三浦の者共何十人も有れ、一番に入らん朝比奈が諸膝難き伏せ、續かん奴ばら物の數にや有るべき。伊東の手並を見せん、遅し」とこそは待ち掛けたり。虎も此有様を見て、げにや冥途より來るなる獄卒の追つ立つる途だにも、主君、師匠の命には代るぞかし。ましてや夫婦恩愛の契り淺からずとは、古へ今までも傳へ聞くなるものを、後の世までも離れじと思ひ切つて、守刀、衣の褌に取りくくみ、三浦の人人如何に勇み亂れ入るとも、何と無く立ち廻り、好き隙に義盛を一刀刺し、如何にも成らんと唯だ一筋に思ひ定め、祐成近く寄り、今やと待つぞ優しき。時移りにければ、和田いよいよ腹を立て、「如何に朝比奈は無きか、御迎に參れ、無骨の訴訟も苦しかるまじ」とぞ怒りける。義秀聞きかね、座敷を立ち、虎が迎に行きけるが、つくづく案ずるやう、十郎と云ふも伊東の嫡嫡たり、心も又立て切つたり、始より出ださで、斯様に成りては餘も出ださじ「〇一本出でじ」、我れ又荒く怒りて出ださんも耻辱なり、所詮難無きやうに打向ひて、賺かさばやと思ひければ、靜かに歩み入りけるが、此殿ばらの兄弟は、身こそ貧なりとも心は貧に有らばこそ、疎忽に入つて細頸打落され、悪しかりなと思ひ、扇、笏に取り直し、畏まつて、「これに曾我の十郎殿の御入の由、父にて候者承り、御迎の爲めに義秀を參らせられて候。何かは苦しく候べき。御出ありて親にて候者に御對面や候べき。それに又某一期の所望の候。御前の事ゆかし

きことに義盛思はれ候が、御座を存じて義秀申し止めて候。然るべくは諸共に御出ありて、父が所望をも協へ、義秀が面目施すやうに御計らひ候へ、一向頼み奉り候。然りながら御心に違ひ候はば、罷歸り候べし」と、障子越しに云ひければ、十郎聞きて、頼むと云ふに和きて、「左右にや及ぶ、朝比奈殿、如何でか異議に及ぶべき。立ち給へや御前、祐成も出でん」とて、烏帽子の筒押立て、直垂の衣紋引き繕ろひ、虎を先に立てて、おのおの三人出でたりけり。然てこそ、或居たりける人人も、生きたる心「〇一本心地」は爲たりけり。まことに義秀の振舞優なるものかな、座敷に事も起らず、虎も出でて、十郎も心を破らで事過ぎにけり。これやせうろんに、國の將にそぎする事は奸臣に有り、家の將に盛に貴うする事は忠臣に由つてなりと云へり。斯様の事をや申すべき。朝比奈無かりせば由無きこと出で來、十郎も討たれ、和田にも人多く亡びて失せなん。まことに深淵に臨んで薄氷を履むが如く、危かりし事どもなり。

## 虎が杯十郎に差しぬる事

義盛は虎を見給ひて、嬉しげにしてのたまひけるは、「然ても十郎殿の内にましましけるかや、餘所がまし、心を隔て給ふものかな。御入を知り候はば、始より申すべかりつるものを。これへ、これへ」と請ぜらる。十郎勿取り直し、然候、御目に掛かるべきを、異體の無骨に候へば、罷出でざる由色代して、弓手の疊に直りけり。虎も座敷に定まりけ「〇一本りけナシ」れば、杯前にぞ置きたりける。義盛、虎をつづく

見て、「聞きしは物の數ならず、斯かる者も有りけるよ。十郎が心をかかねて出でざるさへ優しく覺ゆるにや、其れ其れ」と云ふ。何と無く杯取り上げ、その杯和田飲みて祐成に差す。その杯、義秀が「〇一本がナシ」飲みて面に下し、思ひ差し思ひ取り、其後は亂舞に成る。ここにまた始めたる土杯、虎が前にぞ置きたりけり「〇一本る」。取り上げけるを今一度と強ひられて受けて持ちけるが、義盛これを見、「如何に御前、その杯何方へも思食さん方へ思ひ差しし給へ、これぞまことの心ならん」と有りければ、七分に受けたる杯に、千千に心を遣ひけり。和田に差したらんは時の賞玩異議無し、然れども祐成の心の内耻かし。流を立つる身なればとて、睦びし人を打置きながら座敷に出づるは本意ならず。ましてや此杯義盛に差しなば、さらに愛でたりと思ひ給はんも口惜し。祐成に差すならば、座敷に事起りなん。斯く有るべしと知るならば、初めより出でもせで、内にて如何にも成るべきを、再び思ふ悲しさよ。よし、是れも前世の事、思はざる事あらば、和田の前下に差し給ふ刀こそ、わらはがものよ。支ゆる體にもてなし奪ひ取り、一刀刺し、とにも斯くにもと思ひ定めて、義盛一目、祐成一目、心を遣ひ案じけり。和田は我れにならではと思ふ所に、然は無く、「許させ給へ、然りとは思ひの方を」と打笑ひ、十郎にこそ差されけれ。一座の人人目を見合せ、「これは如何に」と見る所に、祐成杯取り上げて、「某賜はらん事狼藉に似たり、これをば御前に」と云ふ。義盛聞いて、「心ざしの横取無骨なり。如何でか然るべき。早」と色代なり。然のみ辭すべきにあらず、十郎杯取り上げ三度酌む。義盛居才高に成り、「年ほど

物憂き事は無し、義盛が齡二十だにも若くは御前には背かれじ、たとひ一旦嫌はるるとも、斯様の思ひ差しをば「〇一本をばナシ」餘所へは渡さじものを「〇一本ものをナシ」、南無阿彌陀佛」と高聲なりければ、殊の外にぞ「〇一本にぞナシ」苦苦しくは「〇一本ぞ」見えにける。九十三騎の人人も、義秀の方を見遣りて、事や出で来なんと色めきたる體さし顯はれけり。十郎本より騒がぬ男にて、何程の事か有るべき、事出で来なば何十人も有れ、義盛と引つ組んで勝負をせんずるまでと思ひ切り、あざ笑ひてぞ居たりける。

## 五郎大磯へ行きし事

ここに五郎時致は曾我に居たりけるが、父の爲めに法華經讀みて、本尊に向ひ念誦しけるが、頻りに胸騒ぎしけり。心得ぬ今の胸騒ぎや、如何さま祐成の大磯へ越し給ひぬるが、東國の武士ども富士野へ打出づるをりふしなり、流の遊君ゆゑ事爲出だし給ふにやと、心許なく思ひければ、帳臺に走り入り、緋緘の腹巻取つて引つ懸け、伊東重代の四尺六寸の赤銅作りの太刀十文字に結び下げ、鞍置くべき暇無ければ、裸馬に打乗つて、二十餘町の其程を、ただ一馬場に駆け着け、門外を「〇一本門外をナシ」見渡せば、長者の門のほとりには、鞍置馬一二百疋引立てたり。遠侍には物具の音頻りにして、只今事出で来ぬとぞ見えたりける。入るべき所無くして門の外を廻り、日比祐成に行き連れて通りし細道を廻り、虎が居所にこそ著きにけれ。然て十郎殿は「如何に」と問へば、「和田殿と杯を論じて、只今事出で来ぬ」と申す。然ればこそと思ひ、透垣

を跳ね越え、兄の居たりける後ろの障子を隔て立ちたりけり。時致これに在りと知られん爲めに、箆にて障子越しに、袴の著際を刺しければ、十郎「誰ぞ」と問ふ。五郎は小聲に成りて、「時致これに在り」と云ふ。十郎聞きて、千萬騎の兵を後ろに持ちたるよりも頼もしくぞ思ひける。義盛の聲として、「上も無く振舞ふものかな」と聞えける。祐成の御事ぞと心得て、何事も有らば障子一重踏み破りて飛び出でて、一の太刀にて義盛、二の太刀にて朝比奈、其外の奴ば何十人も有れかし、物の數にて有らばこそと思ひ切り、四尺六寸の太刀杖に撞きて立ち、忍びかねたる有様は、たう八「〇たうばち」刀拔ノ訛」毘沙門の悪魔を降伏し給ふかとぞ覺えける。夕日脚の事なれば、太刀影の障子に透きて見えければ、朝比奈これを見て推量し、まことや彼等兄弟は、兄が座敷に在る時は弟が後ろに立ち添ひ、弟が座敷に在る時は兄が後ろに在るものを、如何さま五郎は後ろに在りと覺えたり。さしたる事も無きに、大事引き出だして何の益か有らん。又然りとは親しき仲ぞかし、何と無き體にもてなし、座敷を立たばやと思ひければ、紅に月出だしたる扇を披き、「何とやらん御座敷静まりたり、謠へや殿原、囃せや、舞はん」とて、既に座敷を立ちければ、面前にこそ囃しけれ。義秀拍子を打ち立てさせ、「君が代は千代に八千代をさざれ石の」と絞り上げて、「殿と成りて苔のむすまで」と、短く舞うて納めけり。

## 朝比奈と五郎力競の事

斯くて朝比奈の三郎、舞も過ぎぬれば、五郎が立ちたる前の障子を引き開け見れば、案に違はず、時致は四天王を作り損じたる様にて、踏みしかりてぞ立ちたりける。朝比奈過たず狂言に取りなして、「客人ましますぞや、此方へ入らせ給へ」とて、草摺三三間むずと取りて引きけれども、少しも働かず。磐石なりとも義秀が手を掛けなば、動かぬこと「〇一本やアリ」有るべきと思ひて「〇一本でナシ」、力に任せ、えいや、えいやと引きけれども、五郎は物とも思はねば、引くとも無く引かるるも無く、あざ笑ひてぞ立つたりける。大力に引かれて、横縄草摺堪へずして一度に切れて、朝比奈は後ろへどうど倒れけり。五郎は少しも働かで、二王立にぞ立つたりける。然てこそ五郎時致はみぎは優りの大力と、餘所の人まで知りにけり。まことや此者の父河津の三郎は、東八か國に聞ゆる股野の五郎に、片手を放ちて相撲三番勝ちこそ、大力の覚えは取りたりしぞかし。其子なるをや、力競べは協ふまじ、すかさんものと、打笑ひ、「これへ、これへ」と請ずれば、「餘の辭退は無禮なり、異體は御免候へ」と云ふより「〇一本いひいひ」座敷に出でけるが、持ちたる太刀と草摺にて、末座なる人人の頸のまはり、側顔を打ちなぐり、差越え差越え行き過ぎて、朝比奈が下なる疊に直りける。座敷に餘りて見えたりけり。朝比奈急ぎ座敷を立ちて、義盛の前に在りける杯を五郎が前にぞ置きたりける。時致杯取り上げて、酌に立つたる朝比奈に色代して、「御杯の前後は遅參の無禮御免あれ、御杯は給はり候」とて、三度までこそ乾したりけれ。「その杯思ひ取り申さん」とて、元の座敷に直りけり。五郎も酌に手を掛け、「近くも參らぬ御酌に、時致立たん」と

揺るぎ立つ。四郎左衛門座を立つて「某これに候」とて、銚子に取り附けば、五郎も暫し色代す。義盛これを見給ひて、「客人の御酌然るべからず、其れ其れ」と有りければ、常氏酌にぞ立ちたりける。朝比奈、杯取り上げ三度乾す。その杯を虎飲みて義盛に差す。其時五郎、扇、笏に取り直し、「今暫くも候べけれども、曾我にさし當る用の事御座候、後日に訪れ申さん」とて、兄諸共に立ちければ、虎も同じく立ちにけり。一座も不興至極にして、和田は鎌倉へ通りければ、此人人は打連れて、曾我へとてこそ歸りけれ。

## 曾我にて虎が名残惜みし事

まことに此殿原の事は、これや名鳥莫天に翼を雙べ遊ぶと云へども、沼澤に下りてきうそう「〇さうさう（爪爪）カ」の憂に遇ひ、大魚深淵の底に尾を振れども、陸に上がる思ひありと見えたり。十郎も身に思ひの有るものぞかし、由無き女の許にて思はずの難に遭はんとしけるぞ、危ふかりし次第なり。斯くて祐成は虎を具して曾我に歸り、常に住みける所に隠し置き、何時よりも細細と打語りしは、「此度御狩の御供申し、思はずのおごし「丘越カ」の矢にも中り、朽ち果つる埋木とも成るならば、身こそ貧に生れめ、鬢なる鷹の見苦しさと、人の言はんも口惜し、髪梳りて賜ひ候へ」と云ひければ、虎は何としも思はで、數の櫛を取り散し、暫く髪をぞ梳りける。十郎は女の膝に臥しながら、虎が顔をつくつくと見て、祐成を陸



まじと見んも、これぞ限りなるべきと思へば、流るる涙を見て、「例ならぬ御涙心許なごよ、何なるらん」と問ひければ、「今に始めぬ事とは云ひながら、憂き世の中の定め無きよ、此程の萬つあぢきなく、何事も心細く覺ゆれば、徒に契り置きし同じ世の、名の立つ程も如何にやと思へば、心に浮ぶ涙のこぼるるぞ。げにや頼まぬ身の習ひ、歎つ命も露の間も忌はしくこそ思はるれ。」「げにも然やうに思ひ給はば、此度の御侍思食し止まり給へかし。君に知らるる宮仕の暇無き業にも候はず、止まり給へ」と云ひければ、「思ひ立つ御供なり、何事かは」と云ひながら、斯程深く思ふ中、思ひ知らせず出でなば、情の色も絶えぬべし、せめて夢ほど此事を知らせばやと思へども、女は甲斐無きものなれば、飽かぬ別れの悲しさに、止めん爲めに母にもや語り廣めん。此度は思ひ定めたるもの故、かなはぬ事を母聞きて、思ひの種とも成りぬべし。又は五郎も怨みなん。思ひ切りたる一大事、女に然ぞと云はんこと悪しかるべしと思ひ切り、何とも無く戯れけり。忍ぶとすれど其色の怪しく思ひ奉り、「覺束なし」と問ひければ、深き思ひの切なるに、束の間も思ひ合する事無くて果てぬるものならば、後の怨も深かるべし。よし、思出に一端を、云ひてや心を安むると、身の有様を思ふには、憂きが住居の詮無くて、世には住まじの其故を、如何にと云ひて知らすべき。「然ればにや祖父入道の謀叛に由つて斬られ参らせし孫なれば、君にも召使はれ、御恩蒙ぶることも無し。まして先祖の本領は、年月餘所に見なす上、馬の一疋も毛なだらかに飼はず、又父の爲めとて經卷の一部も書かず、有るとしも無き身の仕儀、人に見ゆるも耻しく、面竝ぶる便りも無し。然

れば此度御侍より歸りなば出家を遂げ、墨の衣に染め更へて、頭陀乞食して靈佛靈社に参り、父の後世をも弔らひ、我身をも助からんと思ひ候なり。世に在りとも夢幻の如く、ほうしんを残すべきにあらず、花山の法皇だにも、萬乗の位を去りて山林に交り給ふぞかし。ましてや貧道無縁の祐成が、何に命も惜しかるべき「〇一本し」。今度の御供を最期に定め、再び歸らじと思へば、飽かぬ別れの道捨て難くて」と申しければ、虎聞きも敢へず、十郎が膝に掛かり、暫しは物も云はざりけり。やや有りて、「怨めしや、問はずは知らせじと思食すかや。まこと、わらはは大磯の遊君、あさましき者の子なれば、誠の道をも思食さじなれども、女の身のはかなさ、身に代へてもこそと思ひ奉れ、見え初めしより何とやらん、思ひの色深草よ、忍の袖の摺衣、忘れ奉る便りも無し。御心ざしは知らねども、御誓言の違ふをば、偽りに又成るらんと、心を盡し待たれしに、然やうに思ひ立ち給はば、わらはも同じく髪剃り下ろし、墨の衣に身を覆し、一つ庵に在らばこそ、外に庵室引き結び、衣を濯ぎて参らせん。香を供へ給はば花を摘み、薪を拾ひ給はば關伽の水を掬び、一つ蓮の縁をも願はん。其睦びをも否とのたまはば、山山寺を修行して、餘所ながら見奉らん。それも憚り思食さば、聞き給へ、身を投げ一日片時も長らへじ」と涙に咽び申しけり。まことに十郎が膝の上も虎が涙に浮くばかり、袖も絞りぞかねたりける。十郎はつくづくと案ずるに、これほど思ひ入りたる心ざし、露ほども知らせずして、心強く隠し遂げぬるものならば、長き怨みと成りぬべし。若し立ち返らぬ習ひあらば、思ひ出だして念佛をも申すべし。然ればとて、人に洩らすなと云はん事を徒

にやすべき。其上日數無ければ知らせばやと思ひ、「此事母にだにも知らせ奉らで今まで」「〇一本しままでナシ」過ぎしかども、御身の心ざし切にして知らせ奉るぞ、洩らし給ふべからず。眞の道心にもあらず、出家また遁世にても無し。年比祐成が身に思ひ有りと知り給ひぬらん、其本意を遂げんと思へば、此度出でて後再び歸るまじければ、相見んことも今宵ばかりなり。然てしも何と無く申し契りて、時の間と思へども、三年に成りぬ。いつ思出も無くて果てん事こそ無念なれ。御心ざしの程こそ有難く思ひ奉れ。面面如きの人は、祐成風情の貧しく頼む所無し「〇一本なきに」、何に由りてか露の情も有るべきに、三年の間の顔ばせの、變らぬ色の常盤山、おのれ鳴きてやほととぎす、憂き世の夢か朝顔の、はかなく成らん身の程を、耻ぢず忘れぬ情の袖、前世の事と云ひながら、過ぎにし事の耻かしさよ。奉公の身ならねば、御恩の時とも云はれず、懐錢の身ならねば、利の有らん折とも云はれず、思出の無きことを思ひ出だし給はんことよとて、さめざめと泣きにけり。虎も此言葉を聞きて、又打伏して泣くより外の事ぞ無き。や有りて起き直り、「そも是れは何と成り行く事どもぞや、是程の大事、はかなき女の身なりとも、如何でか人に洩らすべき。一人まします母にだにも聞かせ奉らず、振り棄てて心強く思ひ立ち給はん事、數ならぬわらは申すとも止まり給ふべきか。何につけても、飽かぬ別れの道こそ悲みても餘り有り。斯様の大事、心置かず知らせ給ふこそ、返す返すも嬉しけれ。然ても此年月の御なじみ、何時の世にかは忘るべき。思ふに協はぬ事なれども、御物具の見苦しきを見參らするをりふしは、人入しき身なりせば、何とや便りにも成り

奉らざらんと、賤心を盡し明し暮しつるに、世を捨てて何處とも無く成らんと仰せらるるをこそ、身の置き處無かりしに、思ひも寄らぬ永き別路と成らん悲しさよ」とて、聲も惜まず泣き居たり。十郎も爲ん方無くして、「あまりな歎き給ひそ、人もこそ聞き候へ、名残は誰も同じ心ぞ」と慰めつつ、「これを形見に」とて、「祐成に添ふと思食せ」とて、鬢の髪を切りて取らせぬ。虎は涙もろともに受け取り、肌守に深く納め、物をも云はず伏し沈みぬ。同じ枕に打傾ぶき、涙に咽ぶばかりなり。日も既に暮れければ、今宵ばかりの名残ぞと、思ひ遣るこそ悲しけれ。千代「夜カ」を一夜に重ねても明けざれかしと思はるる。比さへ五月の短夜の、有明なれば宵の間の、待たる程も無ければや、出づると見れば其儘に、傾ぶく空も恨めしく、八聲と云ふも雞の、夜やしりとふると明け易く、夢見る程も睡眠まで、東にたなびく横雲の、東雲白む憂き枕、まだ睡言の盡きなくに、きぬぎぬに成る曉の、涙に床も浮きぬべし。互の名残、心の中、然こそと思ひ知られたり。猶しも虎は打伏して、消え入るやうに見えしかば、十郎彼を勇めんとて、「暇申して祐成は、後生にて參り逢はん」とて驚かせば、起き直りたるばかりにて、物云ふとまでは無かりけり。今を限りの別なり、後の世までの形見とて、十郎著たげける目結の小袖に、虎が紅梅の小袖に著更へて、「心の有らば移り香よ、暫し残りて憂き別れ、慰むほども面影の、著更へし衣に留まれかし、互の名残盡きせず」と、また諸共に打伏しぬ。「幾萬世を重ねても、名残盡くべきにあらず、祐成も途まで送り奉るべし、日こそ傾ぶき候へ」とて、葦毛なる馬に具鞍置かせ、だう三郎門の邊に引かへたり。「此馬

鞍返し給ふべからず、此三年通ひしに、馬は變れども鞍は變らず、鞍は變れど馬は變らず。今日を最後の別れなれば、留め置きて永き形見とも思ひ給ふべし。但し馬は生あるものにて變ること有り、鞍をば失はで持ち給へ」と、云ひ云ひ、馬にぞ乗せたりける。

## 山彦山にての事

祐成も送るべしとて、馬に鞍置かせ打乗りて、「中村通に行くべし、大道は馬鞍も見苦し。虎を祐成が思ふとは皆人知られたり、伴の者どもも甲斐甲斐しからず」とて、打連れてこそ送りけれ。曾我と中村の境なる山彦山の峠まで送り來て、十郎ここに駒を引かへ、今少しも送りたくは候へども、必ず今朝より出でんと定めしかば、定めて五郎も來らん。名残は盡くべきにあらず、此世にて相見ん事も今ばかりぞと思へば、遣る方無くして涙に咽ぶばかりなり。遠近のたつきも知らぬ山中の「〇一本に」、道も分明に見え分かず、かの松浦佐用姫が領布ふす「〇ふるカ」姿は石に成る、それは昔の事ぞかし。今の別れの悲しさに、駒近近と打寄せ、手に手を取り組み涙に咽ぶばかりなり。やや有りて、「祐成が心の中、推測り給へ。是にて年を送るべきにあらず、ただ一筋に淨土の縁を結ばん、來世を深く頼むぞ」と心強くも思ひ切り、控ふる袖を引き分けて、泣く泣く立ち別れけり。げにや笹の床の上には、遙かに契を千年の鶴に結び、沈麴の鐘の上には、遠く巖を萬劫の龜に擬して契りしかども、遁れぬ別れの途は力及ばず、互に後ろを顧み、坂

中に休らひて控へたり。幽かに見えし姿も見えず成り行けば、其方の空のみ返り見る。足曳の山のあなたの戀しさは、いづれも同じ心にて、現とも無き涙の袖、夢の如くに打別れにけり。思ひの餘りに、虎が、馬の口控へたるだう三郎に泣く泣く云ひけるは、「祐成を見奉らんも今ばかりの名残なり、何事も細細と云ひたかりつるを、涙に昏れて云ひも盡さず、取分き暇をひし「〇一本しナシ」給へるに、返事せざりし心許なければ、今一度呼び返し奉りて賜ひ候へ、物一言申さん」と云ひければ、だう三郎、「ただ世の常の出家遁世にても無し」とて、然しても騒がざりけるが、斜ならざる互の歎を見て、哀れに思ひ、急ぎ走り歸り、遙かに行きたりける十郎を呼び返し、もとの峠に打上がり、駒を控へ、「何事ぞ」と問ひければ、虎は涙にも昏れて、思ひ設けし言の葉の、いつしか今は失せ果てて、鞍の前輪に打掛かり、消え入るやうに見えしかば、十郎分きて云ふべき言葉「〇一本もアリ」無くて、ただ泣くばかりにてぞ有りける。やや有りて、虎は息の下にて云ひけるは、「何時と無く然ぞと契らぬ夕暮も、駒の足竝、響の音のする時は、若しやと思ふをりをりの、其人と無く過ぎ行けば、其夜は空しく床に臥し、鳥諸共に泣き明かす、枕の上の塵の海、思ひを深く湛へつつ、夕の鐘の響には、暮るる便りを待ちかねて、干されぬ袖の其ままに、はかなかりける契かな、三年の夢は程も無く、別るる現に成りにけり。然ていつの世にめぐり逢ひ、斯かる思ひの又もや」と、聲も惜まず泣き居たり。「祐成身の上をつくづく思ふに、罪の深きぞ知られたる。幼くして父に後れ、本領だに餘所に見なし、母一人のはごくみにて身命を延ぶると云へども、在る甲斐も無し。此三年

御身にだにも相馴れて、飽かぬ別れの悲しさは、歎きの中の歎きなり。五欲の無常は春の花、娑婆は假の宿なり。秋の紅葉の影散りて、草葉にすぎる露の身、後生弔らひて賜ひ給へ」とて、東西へ打別れける「〇一本り」。

比叡山の始まりの事

然ても我朝比叡山の始まりを聞くに、天地既に別ち、國未だ定まらざる時は、人壽二萬歳を保ちける。迦葉尊者は西天に出世し給ふ。大聖釋尊は其教儀を得て、都率天に住し給ふ。「我れ八相成道の後、遺教流布の地何の處にか有るべき」と云ふに、此南閩浮洲を遍く飛行して御覽じけるに、遠遠茫茫たる大海の上に、一切衆生、悉有佛性、如來常住、無有へんい「〇へんやく（變易）ノ訛」、斯くの如く立つ波の聲あり。此波止まらん處一つの國と成りて、われ佛法を弘め通達すべき靈地たるべしとて、造「〇一本はるナシ」かの十萬里の滄海を凌ぎて行くに、葦の葉一つ浮びたる所に、此波流れ止まりぬ。今の比叡山の麓、大宮權現のおはします波止土濃是れなり。然ればにや波ま止り土濃かなりと書けり。斯く御覽じ置きて、釋尊天に上がり給ふ。然れば葦原の中つ國と申し習はせるは、此一葉の葦の故とかや。日本我朝は、葦の葉を表するとぞ申し習はせるとぞ聞えし。其後人壽百歳の時、悉達太子と生じて、八十年の春の比、頭北面西の時、跋提河の波と消え給ふ。然れども佛は常住にして不滅なりしかば、無緣法界の妙諦を顯はし給ふなれば、葦の

葉の嶋と成りし中つ國を御覽じける時、鴈草葦不合意の御代なれば、佛法の名字を人知らず。ここに、さざなみや志賀の浦の邊に釣をする老翁あり。釋尊彼に向ひて「〇一本てナシ」、「翁若し此處の主たらば、此地を我に得させよ、佛法結界の地と爲すべし」とのたまへば、翁答へて申さく、「我れ人壽六萬歳の始より此處の主として、此湖の七度まで葦原に成りしをも、正に見たりし翁なり。然れば此地結界と成るならば、釣する所無かるべし」と深く惜み申せば、釋尊力無くして、今は寂光土に歸らんとし給ふ時に、東方より淨瑠璃世界の藥師如來忽然と出で給ひて、「善哉、善哉、早早佛法を弘め給へ。我れ人壽八萬歳の始より、此處の主なれども、老翁未だ我を知らず、何ぞ此山を惜み申すべき。早佛法を弘め給へ、我も此山の守護として、共に五五百歳まで佛法を弘むべし」とて、二佛東西に去り給ふ。其時の老翁「〇一本はアリ」今の白鬚の大神にてましましける。東方よりの如來は中堂の藥師にてぞましましける。釋迦、藥師の東西に歸り給ひき。今の十郎と虎が行き別るるには違ひぬる心なるをや。蝸牛の角の上、何事をか争ふ、石火の光の中に、此身を寄せつらん。名残の道盡くべからず、後世には參り會はんと云ふ中にも、だう三郎が心も耻かして、思ひ切りてぞ別れける。虎は峠に手綱引かへ、祐成の後姿の暮るるまで見送りける。然てしも有らわば、泣く泣く大磯にぞ歸りける。母の許に入りしかば、友の遊君ども廣縁に出でて、「思ひ掛けざる今の御入かな、いつと無き山路の寂しさ、推測りて」など戯れけれども、虎は馬より下ると同じく、衣引き被き打伏しぬ。遊君ども集りて、「何とて是程御歎き候やらん、十郎殿に捨てられおはし

ますか」と、様様に慰めけれども、斯くと云ふべき事ならねば、ただ打伏し泣き居たり。人人討たれての後、斯くとは申し聞かせけれ。だう三郎申しけるは、「殿も今朝より御出であるべきにて候、急ぎ御暇を申さん」と云ふ。虎は彼を近く呼び寄せて、「三年が程馴れにし汝にさへ、別れなん事もや有らんと思へば」とて、袖を顔に押し當て、さめざめと泣きければ、だう三郎返事にも及ばず涙を流しけり。「昔が今に至るまで、主従の縁浅からぬことぞとよ、構へて思ひ忘るな、二世までも朽ちせぬものぞ」と云へば、だう三郎暇乞ひて出でにけり。心ざしは二世までも盡きせじとこそ覺えけれ。

佛生國の雨の事

然れば縁に由り佛果を得る事を思へば、昔佛生國に血の雨降りて國土紅なり。御門大に驚かせ給ひて、博士を召して御尋ねありければ、占形を引き、申しけるは、「今宵不思議の子を生む者あり、尋ね出だして遠き嶋に捨てらるべし」と申しければ、舍衛城の中に、其夜生子みし者千人なり。其中より選び出だして見るに、口より焰吹き出だす子を生みたる者あり。即ち是れを人蟒とぞ名づけける。これ不思議の者として、官人に仰せ付けて嶋に捨てけり。然るに此人蟒は、やうやう成人する程に、猛き鬼の姿に成りにけり。此嶋に来る者を洩らさず取りて食らふ。又國に罪ある者を此嶋に流せば、これをも取りて食らふ。七萬二千人までぞ食らひける。其罪盡し難し。佛これを感み給ひて、阿難尊者を遣ひ奉りて、善知識達引導し給ひけるとか

や。人蟒は阿難を七度見奉りし結縁に、七度天上に生じて佛果を得たりとなり。斯様の縁を思ふには、彼等が後世も何とや一つ蓮に生ぜざらん、頼もしくぞ覺えし。然て十郎が心の猛きこと、四方にも聞えしかども、さし當る恩愛の道には迷ふ習ひなり。まことに夏の蟲の飛びて火に入り、秋の鹿の笛に心を亂し、身を徒らに爲す事、高きも卑しきも力及ばぬは此道なり。入つの苦の中にも、愛別離苦と書かれたり。内典外典にも深く戒め給ふとなり。

嵯峨の釋迦作り奉りし事

然ても五郎待遠なる折節來りて、「此者送りし今まで時を移しぬ、如何に遅しと不思議に思ひ給ひけん」とぞ仰せ「〇一本申し」ける。五郎承つて、「昔も然る事の候、釋尊の母の報恩の爲めに忉利天に上り給ふ。帝釋聞き給ひて、毗首羯磨と云ふ天人を下し給ふ。優填王喜びて、梅檀にて如來を作り奉り、いづれを寫したる姿とも見えすぞ作りける。優填王喜びの餘りに、毗首羯磨を留められければ、我は是れ善法の大工なり、留まるべからずとて、遂に天に上りぬ。其像を玄奘三藏盗み取りて此國に渡し、多くの衆生を濟度し給ふ。今の嵯峨の釋迦これなり。ましてや人間として、如何でか恩愛を思はざるべき。」十郎聞きて、「大に違ふ心かな、優填王は利益方便の戀なれば、愚癡凡夫輪廻の執着なり「〇し力」、一つに有らじ」と笑ひて、おのおの富士野の出で立ちをぞ急ぎける。

曾我物語 卷第七

千草の花見し事

それ迷ひの前の是非は、是非共に非なり、夢の中の有無は、有無共に無なり。然れば我等が身の有様、有れば有るが間なり。夢の浮世に何を「〇一本をナシ」か現と定むべき。然れば刹那の榮花にも、心を舒ぶる理を思へば、無爲の快樂に同じ。いざや最期の眺めして、暫し思ひを慰まんとて、兄弟共に庭に下りて、植ゑ置きし千草の榮えたるを見るにも、餘波ぞ惜しかりける。心の有らば草も木も、如何にか哀れを知らざるべきと、彼方此方に休らひけり。是に比へて古き歌を見るに、

古里の花の物云ふ世なりせば如何に昔の事を問はまし

今更思ひ出でられて、情を残し哀れを掛けずと云ふ事無し。五郎聞きて、「草木も「〇一本もナシ」心無しとは申すべからず。釋迦如来涅槃に入らせ給ひし時は、心無き植木の枝葉に至るまでも、歎きの色を現はしけり。我等が別れを惜み候やらん、如何でか知り候べき」とて草を分けければ、卯の花の蕾みたるが一房落ちたりけり。十郎これを取り上げて、「如何に見給へ五郎殿、老少不定の習ひ今に始めぬ事なれども、老いたる母は「〇一本はナシ」留まり若き我等が先立ち申さん事、是れに等しきものを、開きたるは留まり、

蕾みたるは散りたるや。名にし負ふ忘草ならば、餘波を思ひてや散りつらん。それは昔住吉に諸神影向なりける事あり、御歸りを留め奉らんとて、此花を植ゑて忘草と名づけ給ひけるなり。歌にも、

もみぢては花咲く色を忘草ひと秋ながらふたまちの頃

その忘草は、紫苑とこそ聞きて候へ」とて、猶草むらに分け入りければ、深見草の盛りと咲きたるを見て、「卯の花は蕾みてだにも散るに、此花の思ふ事無げに盛りなるや。如何に咲くとも、二十日草、盛りも日數あるなれば、花の命も限りあり。あはれ身に知る心かな」と涙ぐみければ、五郎聞きて、「此草の事は、花開き落ちてせんにも「〇本文白氏文集ノ「二十日」ノ訛讀」、同じく一城の人狂かすが如しと見えたり。これは樂府の詞なり。又歌にも、

名ばかりは咲かでも色の深見草花咲くならば如何で見てまし」

と口ずさみければ、十郎聞きて、「此歌は未だ咲かざる時も色深き草とこそ詠みたれ、盛りの花には心や遠ふべからん」と戯れけるにも、哀れを残さぬ言の葉は無かりけり。無慙なりし心ざしどもなり。「然ても我等が思ひ立つ事、母に露程も知らせ奉るべきか、計らひ候へ」と云ひければ、時致聞いて、「思ひも寄らぬ御事なり、是程思ひ定めざる前は知らず、今は如何でか事變じ候べき。其上人が子が謀叛起して出で候はんに、其親聞きて、急ぎ死にて物思はせよとて、よろこぶ母や候べき。某はただ御形見を賜はつて、最期まで身に添へ、此方よりもまた參らせて、罷出でんとこそ存じ候へ。」十郎聞きて、「まことに此儀然るべし、

然らば其序に、御分が勘當をも申し許して見ん」とて、母の方へぞ出でたりけり「るカ」。

## 小袖乞の事

十郎御前に畏まり、扇笏に取り申しけるは、「奉公を致し御恩蒙るべき身にては候はねども、末代の物語に、富士野の御狩の御供に思ひ立ちて候。恐れ入りたる申し事にて候へども。御小袖一つ借し給はり候へ」と申しければ、母聞きて、「君臣を使ふに禮を以てし、臣君に事ふるに忠を以てすと、論語の中に候ぞや。何の忠に由つてか御感も有るべき。御恩無くば無益なり、あはれ此度の御供思ひ止まり給へかし。それを如何にと云ふに、伊東殿の父、奥野の狩場より病づきて歸り、幾程無くて死に給ひぬ。御分の父河津殿、狩場にて討たれ給ひぬ。斯かる事どもを思ひ續くるに、狩場ほど憂き所無し。しかも謀叛の者の末、上にも御許無きぞかし。又馬鞍見苦しくて、物を見れば却つて人に見らるるものを、思ひ留まりて親しき人の方にて慰み給へ。斯様に申せば小袖惜むに似たり、善くは無けれども、紋柄面白ければ」とて、秋の野に草盡繼うたる練貫の小袖一つ取出だして賜びにけり。十郎畏まつて、障子の中にて着更へ、我が小袖をば打置きて出でぬ。亡きあとの形見にとぞ思ひ置きたりける。五郎は不孝の身にて、兄が方に空しく泣き居たり。よくよく物を案ずるに、母の不孝を許されずして、死なん事こそ無念なれ。推參して見ばや。生きたる程こそ仰せらるるとも、死して後悔み給はんこと疑ひ無し。思ひきり申して見んとて、母の方へは

出でたれども、さすがに内へは入り得ず、廣縁に畏まり、障子を隔てて、「そも誰が御子にて候はん、時致にも召替の御小袖一つ賜はりて、狩場の晴に着候はん。」母聞きて、「誰そや、來りて小袖一つと云ふべき子こそ持たね。十郎は只今取りて出でぬ、京の小次郎は奉公の者なり、二宮の女房は又斯様に云ふべからず、禪師法師とて乳の中より捨てし子は、叔父養育して越後に在り、又箱王とて悪者の有りしは、勘當して行方知らず。是れはただ武藏相摸の若殿原の、貧なるわらはを笑はんとて斯くのたまふと覺えたり。しかも留守居の體見苦し、早門の外へ出で候へ」と、事の外にそのたまひける。時致思ひ切りたることなれば、「其箱王が参りて候。」「それは誰が許し置きたるぞ。女親とて卑み候か、然やうには候まじ。とても斯様に侮らるる身、七代まで不孝するぞ、對面思ひも寄らず」とぞ云はれける。五郎は許さるる事は協はずして、結句後の世までと深く勘當せられて、前後を失ひ、思ひに忘じ果ててぞ居たりける。やや有りて、小聲に成りて申しけるは、「斯様の身に罷成りて重ねて申上ぐべき事、上までは恐れにて候へば、女房達心ある人あらば聞食せ。人の親の習ひ、盗みする子は憎からで、翻つくる者を恨むるは、常の親の習ひにて候ぞや。」母聞きて、「然やうならん者を吾殿が母にして、わらはがやうなる者をば親とな思ひそとよ。人の言葉を重くせず、言葉を返すは善き子かとよ。」「御言葉を重くして、御返事を申さじとてこそ、御前の人人には申し候へ。」「然やうに申すは返事にては無きか、一念の瞋恚には、俱胝切の善根を焚き、刹那の怨害には、無量億劫の苦報を招く。聞けばいよいよ腹ぞ立つ。其座敷立ちて」とのたまふ。「恐れながら

普門品をば遊ばし候はずや。「如何なる観音の誓ひにも、捉を背く者を許し候へとは説き給はぬぞとよ。」

## しやうめつ婆羅門の事

「恐れながら、事長く候へども聞食され候へ。昔天竺にしやうめつ婆羅門と云ふ人あり。物の命を千日に千殺して、悪王に生れんと云ふ願を起し、早九百九十九日に、九百九十九の生物を殺し、今千日に満ずる日、西山に上りて見れども無し。曲江に下り、船に乗り、海中に出でて、比翼の龜を一つ捕りて害せんとす。母これを悲みて渚に出でて見れば、波風高くして雲雷電おびただしき其中に、婆羅門龜を害せんとす。母これを見て、其龜放せ、汝が父の命日ぞ。婆羅門聞きて、忌日ならば沙門をこそ供養せめと云ひて、おさへて殺さんとす。龜涙を流して、我八十年後、可不墮地獄、大慈大悲故、必生安樂國とぞ泣きける。母これを聞き、汝龜の言葉聞き知れりや。知らずと答ふ。龜は罪深きものにて、萬劫の罪障を經盡し成佛すべきに、今劍に従はば、また多劫を經返すべき事の悲しさよとなり。願はくは其龜を放して、自らを殺し候へと云ふ。まことに龜の命に代り給ふべきにやと云ひも果てず、龜を海上に投げ入れ、即ち劍を抜きて母に向ふ時、天神地神も是れを捨て給へば、大地裂け割れて捺落に沈む。母を殺さんとする子の命を悲みて、心ならず母走り向ひて、婆羅門が髻を取り給へば、即ち頭髮抜けて母の手に留まり、其身は無間に沈みけり。然れども龜を放せし功力に由つて佛果を得、法花經の普門品に婆羅門身と説かれたり。斯様の子をだにも、

親は憐れむ習ひにて候ものを。「母聞きて、「や殿、それも母が云ふ事を聞きて、龜を放ちてこそ成佛はし給へ。汝何とてわらはが教を聴かざるぞ。」「悪き子を思ふこそ、まことの親の御慈悲にては候へ。又母の憐みの深きには、事長く候へども、或國の王一人の太子の無き事を歎き、天に祈りし感應にや、后懷妊し給ふ。國王の悦び斜ならず、然れども三年まで生れ給はず。公卿僉議ありて博士を召して尋ね給ふ。勸文に云はく、御位は轉輪聖王たるべし、但し御産は平かなるまじと申す。后聞き給ひて、賢王の太子如何でか空しくすべき。自が腹を裂き破りて、王子を恙無く取り出だすべしとのたまふ。大王大きに御歎あつて許し給はず。后然らば干死にせんとして、食事を留め給ひしかば、力無く大臣に仰せつけて、御腹を裂かれにけり。其半に后仰せられけるは、太子の誕生如何にと問はせ給ふ。御恙無しと申せば、悦び給ふ色見えて打笑みたるまま、御年十九にてはかなく成り給ひぬ。然て此太子御位に即き給ひしが、母の御心ざしを悲み、御菩提の爲め、三年胎内にて苦め奉りし日數千日に當てて、千間に御堂を建て給ひけり。今のしかん寺是れなり。日本には西の寺なり。然ればにや后即ち成佛し給ふ時に、金蓮臺を傾ふけ來迎し給ふ、其紫金蓮に準らへて、藤を多く植ゑられたり。然てこそ藤の名所には入りたりけれ。母親の慈悲は斯様に候ひしなり。」「母聞きて、「老いたる自らが「〇一本がナシ」遇はぬ教のむつかしくて、腹をも裂きて死にじせよとな。汝も母と見ず、わらはも子とも思はぬぞ」とて、障子荒らかに立て給ふ。時致は此度許し給はずしては、永劫を經るとも協ふまじければ、五郎は打ふてて、



班足王の事

「仁王經の文をば御覽じ候はずや。昔天竺に御門一人ましますに、太子おはしき。名をば班足王と申す。外道羅陀の教訓に附きて、一千人の王の首を取り、塚の神に祭り、其位を奪ひ、大王に成らんとて、數萬の力士を集めて、東西南北、遠國近國の王城に、押し寄せ押し寄せ搦め捕り、既に九百九十九人の王を捕り、今一人足らで如何がはせんと云ふ、或る外道教へて云はく、是れより北へ一萬里行きて王あり、名をば普明王と云ふ、是れを捕りて一千人に足すべしと云ふ。やがて力士を差遣し、彼王を捕りぬ。今は千人に満ちぬれば、一度に首を斬らんとす。ここに普明王合掌して云はく、願はくは我れに一日の暇を得させよ、故郷に歸り三寶を請じ頂戴し、沙門を供養して闍路の便にせんと云ふ。易き間の事とて、一日の暇を取らず。其時王宮に歸り百人の僧を請じて、過去七佛の法より般若波羅密を講讀せしかば、其第一の僧普明王の爲めに偈を説く。劫燒終訖、乾坤洞然、須彌巨海、都爲灰燼と述べ給ふ。普明王此文を聞きて、四諦十二因縁を得たり。ほつけむくう「○ほふげんくう(法眼空)ノ訛」を悟る、然ればにや班足王、諸法みな「○かい(皆)ノ誤讀」空の道理を聽聞して、忽に悪心を翻へして、取り籠むる千人の王に云はく、面面の科に有らず、我れ外道に勸められ悪心を起す、不思議の至りなり。今は助け奉るべし、急ぎ本國に歸り、般若を修行して、佛道を成し給へ。即ち道心起して、無生法忍を得たりと見えたり。これも普明王を許してこそ、俱に佛果を得給

ひしなり。」母聞きて、「其如く佛果を證して、多くの人を助くべき汝、何とや法師に成りてわらはをば救はぬぞ。まことや重きに從つて、道遠ければ休むこと地を選まずして仕へよとこそ、古き言にも見えたれ。何とてわらはが云ふ事を聞かざるぞ。」五郎も思ひ切りたる事なれば、居直り畏まつて、「ただ御慈悲には御許し候へ」とのみぞ申し居たりける。十郎は我所にて、五郎を待てども見えざりけり。餘りに遅ければ、又母の方へ行きて見たれば、五郎内までは入り得ず、廣縁に泣き萎れて居たり。餘りに無慙に覺えて、障子を引き明け、畏まつて、五郎が理をつくづくと聞き居たり。やや有りて、「某兄弟數多候へども、身の貧なるに由つて處處の住居仕る。ただあの者一人こそ連れ添ひては候へ。祐成を不便に思食され候はば、御慈悲を以て御許し候へかし。御子とても御身に添ふもの、我等二人ならでは候はぬぞかし。」母聞きて、「心に合ふ時は吳越もらんでい「○こんてい(昆弟)ノ訛」たり、合はざる時は骨肉も敵黨たり。智者の敵とは成るとも、愚者の伴とは成るべからず。位の高からぬをば歎かざれ、智惠の深からぬをば歎くべしとは、漢書の言ならずや。」十郎承りて、「それは然る事にては候へども、觀經の文を見るに、諸佛念衆生、衆生不念佛、父母常念子、子不念父母と説かれて候。此文を釋すれば、佛は衆生を思食さるれども、衆生佛を思ひ奉らぬところ見えて候へ。親として子を思はぬは無きものをや。」母聞きて、「汝等は親の善きを申し集むるかや、いで又自ら子の孝行なる事を云ひて聞かせん。孟宗は雪の中に筍を得、王祥は氷の上

齒をほどこし、くわうふめいは身を温め惜しき子を殺す、是れ皆孝行の爲めならずや。扁鵲もしんやくをしやうぜざる病をば治せず、げんしやう王も善言の聞かざる君をば用ひずとこそ申せ。人の詞を聴かざる者、何の用にか立つべき。其上不孝の者をば、同じ道をも行くべからず、急ぎ出でよ」とぞ云ひける。祐成重ねて申しけるは、「一旦の御心を背き法師に成らざるは、不孝には似て候へども、父母に心ざしの深き事は法師に由るべからず、僧俗の形にも由らず。時致箱根に候ひし時、法華經一部讀み覚え、父の御爲めに早二百六十部讀誦す。毎日六萬遍の念佛怠らずして、父に回向申すと承り候へば、大地を戴き給ふ堅牢地神も、地の重き事は候まし。不孝の者の踏む跡、骨髓に徹りて悲み給ふなり。一つは彼の御跡をも弔らひ、一つは御慈悲を以て祐成に御許し候へかし。父に幼少より後れ、親しき者は身貧に候へば目も懸けず、母ならずして誰か憐み給ふべきに、斯様に御心強くましませば、立寄る蔭も無きままに、乞食と成らん事不便に覚え候ぞや。」哀れげに今を限りと申すならば如何が易かるべきを、申すべき事ならねば、忍びの涙にも昏れて、暫しは物をも云はざりけり。猶も「許す」とのたまはねば、十郎怒りて見ばやと思ひて、持ちたる扇さつと披き、大きに目を見出だし、「とても斯くても生甲斐無き冠者、有りても何にか「〇一本なにか」益あらん。御前に召出だし、細首打落して見參に入れん」と、大聲を出だして座敷を立つ。女房達驚き、「如何にや」と取り付く袖に引かれて、板敷荒く踏み鳴らし怒りければ、母も驚き縋り付き、「物に狂ふか、や殿、身貧にして思ふこと協はねばとて、現在の弟の首を切る事や有る。それ程までは思はぬ

ぞ、暫し、や殿」と取り付き給ふ。事こそ善けれと思ひければ、「助け候はん、御許し候へ」と云ふ。母、「然らば許す、留まり候へ」とのたまへば、其時十郎怒を留めて、膝を柔かにし、座敷に直り、畏まり居たりける。然れども忍びの涙の進みければ、とかく物をば云はざりけり。五郎も恨みの涙を引き代へて、嬉しさの忍びの涙頻りにして、前後を更に辨へず、ただ憤んでぞ居たりける。

## 母の勘當許されし事

やや有りて、十郎座敷を立ち、「御許あるぞ時致、こなたへ參り候へ。」五郎は萎るる袖に忍びかね、暫しは出でこそかねたりけれ。暫く有りて時致袖打拂ひ、顔押し拭ひ出でければ、十郎も嬉しく、あはれにて打傾き居たり。兄弟共に物をも云はず、唯ださめざめと泣き居たり。母此有様を見て、「げにや親子の申程哀れなる事無し、年老い身貧にして人數ならぬわらはが詞一つを重くして、泣き萎るる無慙さよ。かたはなる子をだにも親は悲む習ひぞかし。如何でか憎かるべき、ただ善かれと思ふ故なり」と云ひも分かで、母も涙を流しけり。其後兄弟の者共畏まり居たるを、母つくづくと凝視り、いつしかの心地して、「汝自らを疎かにや思ひけん、十郎が有る處を見つるに、五郎ありと云ふ時は心安し、無しと聞けば心もとなきて、わらはも立ちて見るぞとよ。此三年が程打添はで、怨めしく悔しく思はれて、つくづくと見るに、直垂の衣紋、袴の着際、烏帽子のさしきに至るまで、父の思ひ出だされ「〇一本いでられ」、昔に袖を萎れける。然

ても五郎は箱根にても聞きつらん、十郎は如何にして經文をば知りけるぞや。」祐成承つて、「馬槽せては毛長く、嘶ふるに力無し。人貧にして智短く言葉賤し。何に由つてか愈くも候べき。」女房達聞きて、勸學院の雀とかや申しければ、母打笑みて、「それぞれ、酒飲ませよ」と有りければ、種種の肴、杯取り添へて、二人の前にぞ置きたりける。母取り寄せ、飲み給ひ「〇一本給ひナシ」て、その杯十郎飲む。その杯を五郎三度乾して置きければ、その杯母取り上げて、「三年不孝のこと只今許したるしに、この杯思ひ取にせん。但し親と師匠に杯差すは、必ず肴添ふなるぞ。當時鎌倉にては、秩父の六郎が今様、堀原源太が横笛と聞く。然れども他人なれば見もし聞きもせらればこそ。吾殿は箱根に在りし時、舞の上手と聞きしなり。忘れずは舞ひ候へかし。」十郎腰より横笛取り出だし、平調に音取り、「如何に、如何に遅し」と促めければ、暫し辭退に及びけるを、十郎離し立てて待ちければ、五郎扇披き、斯うこそ謠ひて舞うたりけれ。

君が代は千代に一たび居る塵の白雲かかる山と成るまで

と押し返し押し返し三遍踏みてぞ舞うたりける。其儘調子を踏み更へて、

別れの殊更悲しきは親の別と子の歎

夫婦の思と兄弟と何れを分きて思ふべき。

袖に餘れる忍音を返して留むる關もがな。

と二遍せめにぞ踏みたりける。母は昔を思ひ出づれば、彼等は然ても憂き命の「〇一本のナシ」近き限りの涙の露、思はぬ餘所目に取り成して、袖の翻しに紛らかし、暫し舞うてぞ入りたりける。斯くて酒も過ぎければ、十郎畏まつて、「今度御狩に罷出で、兄弟の「〇一本が」中に如何なる高名をも仕り、思はずの御恩にも預り候はば、率塔婆の一本をも心易く刻み、父聖靈に供へ奉らばやと存じ候。」母聞き給ひ「〇一本給ひナシ」て、「何とやらん此度の御狩の御供、心許なく覺ゆるぞや。好き程にも候はば、思ひ留まり給へかし。然りながら衣裳の望みも有れば、小袖惜むに似たり。それぞれ、女房達」とのたまへば、白き唐綾に鶴の丸ところどころに「〇一本にナシ」繕ひたる小袖一つ取出だし、「十郎にも取らせぬぞ、失はずして返し給「〇一本候」へ。十郎は常に小袖を借りて返さず。これは曾我殿の見知りたる小袖なり、二度とも見えずは、又例の子供に取らせたりと思はれんも耻かし。小袖をしたためて置くべし、構へて構へて「〇一本とくアリ」歸り給へ」と有りければ、「承り候」とて、練貫の着損じたるに脱ぎ更へ、「見苦しく候へども、人に賜ひ候へ」とぞ置きにける。小袖の欲しきには有らねども、互の形見の更衣、袖なつかしく打置きけり。然ても兄弟は座敷を立ちければ、母見送り、のたまひけるは、「過ぎにし比十郎小袖を借り、二度とも見せず、如何なる遊者にも取らせぬるよと思ひしに、然は無くして弟の五郎に着せけるかや「〇一本けるぞ」。又近き比大口直垂仕立てて取らせしを、是れも二度とも見せざりしが、だう三郎に着せたりと思へば、是をも弟に着せけるぞや。まことに兄弟をば、野の末、山の奥にも持つべかりけるものをや。父

には幼くして後れ、一人ある母には不孝せられ、貧なれば親しきにも疎く成り、有るか無きかの世に無し者、誰やの人か憐れむべき」とて、涙をばらはらと流し給ひければ、其座に在りし女房達、共に袖をぞ濡らしける。然て兄弟の人人は、我方様に歸り、小袖の中に置き、「嬉しくも推参しつるものかな、只今許されずしては、多生劫を経るとも協ふまじ。生きて二度歸るべきやうに、小袖返せと仰せられつるこそ疎かなれ、何しに返せとは云ひつらん、神ならぬ身の悲しさよと、後悔し給はんこと今のやうに覺えたり」とて、打傾きてぞ泣き居たり「〇一本る」。我等世に在りて、心のままに親の孝養をも致さば、是程まで思はぬ事も有りぬべし。此三年こそ不孝の身にては候へ、それさへ戀しく思ひ奉りし折は、或時は物越にも見奉りて慰みしに、只今御許しを蒙り、一日だにも無くして出でん事こそ悲しけれ。死に給へる父を思ひて孝養せんとすれば、生き給へる母に物を思はせ奉る。然れば我等程親に縁無き者は無し。後の世まで盡きせぬものは、ただ手跡に過ぎたる形見は無し。いざや我等一筆づつ忘形見を残さんとて、墨磨り流し、斯くばかり、

今日出でて廻り逢はずは小車のこのわの中に無しと知れ君  
祐成生年廿二、後の世の形見とぞ書きける。

ちちふ山下す嵐のはげしきに枝散り果てて葉葉「母」如何にせん

五郎時致生年廿歳、親は一世の契りとは申せども、必ず浄土にては参り逢ふべしとこそ書きたりけれ。お

のおの箱に入れて、「我等討たれぬと聞き給はば、此所に轉び入りて伏し沈み給ふべし。いざや装らへせん」とて、疊敷き直し、めんらう「〇めんどう（馬道）カ」の塵打拂ひ、先づ見給ふやうにとて、差し入りの障子の際にぞ置きたりける。「空しき人をば常の所よりは出ださず、我等死人に同じ」とて、既の荒れ間より出でたりけり。最後の文にこそ斯様の事まで書きにけれ。斯くて出でけるが、いざや今一度母を見奉らんとて、暇乞にぞ出でたりける。母のたまひけるは、「構へて人といさかひし給ふな、世に在る人は貧なる者をば、迂愚がましく思ひ侮づるべし、然やうなりとも咎むべからず。三浦、土肥の人人は然やうには有らじ、其人人に交はり睦み給へ。心の逸るままに、人の相附けたる鹿を射給ふべからず。公方の御許も無きに、弓矢持たずとも出で給ふべし。謀叛の者の末とて、咎めらるる事もや有らん、如何にも事過し給ふな。年比憎まれずしてや失せられたる曾我殿に大事かけて怨み掛け給ふな」と、こまごまとぞ教へける。五郎は聞きても色に出ださず、十郎は斯様の教も今を限りと思ひ、心の色も顯はれて涙ぐみければ、急ぎ座敷を立ちにけり。五郎も餘波に涙を押へかね、餘所目にもてなし立ちけるが、妻戸の敷居に蹶つまづき俯伏にこそ倒れけれ。然れども人目に洩らさじとて、「色ある小鳥の東より西の梢に傳ひしを目に掛け、思はずの不覺なり」とて打笑ひける。母これを見給ひて、「今日の道思ひ留まり候へ、門出悪しし」と有りければ、五郎立ち歸り、「馬に乗る者は落ち、道行く者は倒る、皆人毎の習ひぞかし。然ればとて留まり候はんには、道行く者も候はじ」と、打連れてこそ出でにけれ。五郎は猶母の名残を慕ひつつ、今一度と思ひけん、

扇の見苦しく候」とて歸りにければ、母これをば夢にも知らずして、「折節扇こそ無けれ、悪ろけれ」○一本悪ろけれナシ」ども」とて賜びにけり。時致これも形見の數と思ひ、母の賜はりけるよと思へば、扇さへ懐しくて、開きて見れば霞に雁をぞ書きたりける。折に觸れなば夏山の、繁る梢の松の風、五月雨雲「○一本のアリ」晴間より、遠里小野の里つづき、我等が道の行末も、顯はるべきに然は有らで、其色違ふも理なり。憂き身の上と案ずれば、古き歌を思ひ續けて、「○一本思ひ出でて」

同じくは空に霞の關守りて雲路の雁を暫し留めん

これは爲世卿の詠みし歌ぞかし。我等限りの道を歎けども、誰ありて留むる者も無きに、扇、心の有るやらん、暫しと云ふ言の葉の有りける「○一本詠まれける」かな。然ても十郎が供にはだう三郎なり。五郎が供には鬼王其他四五人召具して打出でける有様、母は女房遠引き連れ、廣縁に立ち出で見送り、さまざまにぞのたまひける。「直垂の着様、行藤の引き合せ、馬の乗り姿、手綱の取り様、十郎は父に似たれども、器量は遙かの劣りなり。五郎は烏帽子のさしき、矢の負ひ様、弓の持ち様に至るまで、櫛かなる體、父には少し似たれども、是れも遙かの劣りなり。山寺にて育ちたれども、色黒く下種しく見ゆる。十郎は里に住みしかども、色白く尋常なり。我子と思ふ故にや、何れも清げなる者どもかな。如何なる大將軍と云ふとも耻かしからじ。あはれ世に有らば誰にか劣るべき。同じくは彼等を。父諸共に見るならば、如何に嬉しく有りなん」と、さめさめとこそ泣き給ふ。女房達これを見て、「ものへの御門出でに、御涙忌はし」と申しけ

れば、「まことに彼等が貧なる出で立ち、すずろなる事ども思ひ連らねられて、袖のみ昔に濡れ候ぞや。げにげに千秋萬歳と、榮ゆ「○一本るアリ」べき子供の間出でなり、嬉しくも云ひ出だし給ふものかな。此度御狩より歸りなば、上の御感蒙ふり、本領悉く安堵して、思の儘なる歸るさぞ待つべき」とこそ、急ぎ内にぞ入り給ふ。後に思ひ合はすれば、これぞ最後の別れなりと、今こそ思ひ知られけれ。哀れなりし次第なり。

## 李將軍が事

然ても鎌倉殿は、相澤が原に御座の由聞えしかば、此人人も駒に鞭を添へて急ぎける。道にて十郎云ひけるは、「名残惜かりつる故郷も、一筋に思ひ切りぬれば、心の引き換へて先へのみ急がれ候ぞや。」時致聞きて、「然ん候、思ふ程は現、過ぐれば夢にて候。心のままに本意を遂げ、憂き世を夢に成し果てて、早く淨土に生れつつ、戀しき父、名残惜かりつる母、斯く申す我等まで、一つ運の縁と成らん」とて、引つ掛け引つ掛け打つて行く。やや有りて十郎申しけるは、「我等が有様を物に譬ふれば、めいみやう「○ぐみやう（其命）ノ訛讀カ」鳥に似たり。それを如何にと云ふに、大唐しくうざんに雪深うして春秋を分ざる山あり。其山に頭は二つ頭一つある鳥あり。かの山には青き草無ければ、食ふべきもの無し。然れば其左の頭、たまたま餌食を求め服せんとすれば、右の頭中にて取りて奪うて食ふ。或時思ひけるは、所詮毒の虫を求め、右

の頭を對治せんと思ひ、毒の虫を求め、いつもの如く服せんとす。かの頭また奪うて食ふ。然れば胴一つにて有りぬれば、其身も如何で堪るべき、遂に空しく成る。其鳥も明暮右は左を取らん、左は右を取らんとせしぞかし。我等も敵の手にや掛からん、敵をや手に掛けんと思ふ憂き身の長らへて、何時まで物を思はまし。此度は然りともし」と申しければ、五郎聞きて、「弱き御譽を仰せ候ものかな、何に由つてか空しく敵の手に掛かり候べき。本意を遂げて後は知り候はず、それはとも斯くも候ひなん。事長くは候へども、昔大國に李將軍とて猛く勇める武勇の達者あり。一人の子の無き事天に祈る、憐れみにや、妻女懐妊す。將軍よろこぶ處に、女房云ふやう、「生きたる虎の肝」「〇一本をアリ」こそ願ひなれ。」將軍易き事とて、多くの兵を引き連れ、野邊に出でて虎を狩りけるに、却つて將軍虎に喰はれて亡せにき。乗りたりけるうんしやうれうと云ふ馬、鞍の上空しくして歸りぬ。女房怪みて、「將軍虎に喰はれるや」と問へば、れう、涙を流し膝を折り泣けども協はず。我が胎内の子は父を害する敵なり、生れ落ちなば捨てんと日數を待つ處に、月日に關守無ければ、程無く生れぬ。見れば男子なり。いつしか捨つべき事を忘れ、取り上げ、名をかうりよくと付けてもてなしけり。名將軍の子なれば、胎内より父虎に喰はれるを安からず思ひ、敵取るべき事をぞ思ひける。光陰矢の如し、かうりよく早七歳にぞ成りにける。或時父重代の刀を差し、角の附きたる弓に神通の鎗矢を取り添へ、厩に下り、父乗りて死にけるうんしやうれうに向つて云はく、汝馬の中の將軍なり、然るに父の敵に心ざし深し、父の取られる野邊に我を具足せよと云ふに、馬黄なる涙を

流して膝を折り、高聲に嘶えけり。かうりよく大きに喜びて、彼のれうに乗り、馬に任せて行く程に、千里の野邊に出でて、七日七夜ぞ尋ねける。八日の夜半に及びて、或る谷間に獸多く集り居たり。其中に隊長一丈餘りなる虎の、兩眼は日月を雙べたる様にて、紅の舌を振りて臥しければ、肝魂を失ふべきに、然る將軍の子なりければ、是れこそ父の敵よと、矢取つて差しつがひ、よつひいて放つ。過たず虎の左の眼に射立てたり。少し弱ると見えければ、かうりよく馬より飛んで下り、腰の刀を抜き、虎を切らんと見ければ、虎にては無くして、年經たる石の苔むしたるにてぞ有りける。斯様の心ざしにて遂に敵を討つ。今の世の石竹と云ふ草、かうりよくが射ける矢なりとぞ申し傳へたる。然れば弓取の子は七歳に成れば、親の敵を討つとは此心なり。心ざしに由り石にも矢の立ち候ぞや。歌にも此心を詠みけるにや、

虎と見て射る矢の石に立つものを何ぞ我戀の徹らざるべき」

十郎聞きて、「や殿、歌物語心得ず。祐成如何なる鬼神なりとも、遁さじとこそ思ふぞとよ。何ぞ我敵討たであるべきと語れかし。」「げにや折に由る歌物語、悪しく申すと覺ゆるなり。歌はとも有れ斯くも有れ、此度は敵討たんこと易かるべし。老少不定の習ひなれば、我等が空しく成り、敵に先き立たば、悪靈とも成りて取るべきものをや」と戯れつつ、馬に鞭打ち急ぎける「〇一本り」。

## 三井寺の智興大師の事

十郎は「足柄を越えて行かん」と云ふ。五郎は「箱根を越えん」と云ふ。謂れ有り。此三四年別當の呼び給へども、男に成りける面目無きに見参に入らず、序に打寄りて御目に掛かるべし、最後の暇をも申さんとして参りたりと思食さば、聖教の一卷も、陀羅尼の一遍なりとも、弔らひ給ふべき善知識なり。其上師の恩を重くすれば法にあづかる例あり。近き比の事にや、園城寺に智興大師とて、めでたき上人渡らせ給ひけり。顯密有驗の高僧と聞えけれども、未だ肉身を離れ給はざりける故に、重病に冒されて苦痛惱亂辨へ難し。即ち清明を呼びて占はせけるに、「定業限りにて助かり給ふべからず、但し多き御弟子の中に、報恩を重くし命を軽くして、師の御命に代るべき人ましますば、まつり代へん」と申す。上人は苦痛の儘に、誰とはのたまはねども、御目を上げて、御弟子を見廻し給ふ。並び居給ふ御弟子二百餘人あれども、我れ代らんと仰せらるる方一人も無し。目を互に見合せ、赤面し給ふ色あらはれにけり。憂たてかりし御事なり。ここに證空阿闍梨と申して、十八に成り給ふが、末座より進み出でて、「我れ報恩の憐み盡し難し、何とかして報じ奉るべき。我等が命なりとも代り奉る身なりせば、喜びの上の喜び何事か是れに如かんや。早、早」とて、墨染の御袖を掻き合せ給ひて、清明が前に跪き給ふ。上人聞食し、惱める御毗に御涙を淨べさせ給ひて、御顔を振り上げ、本尊の御方を御覽じけるは、證空の命を御惜みありて、御身は如何にもと思食さるる御容顔あらはれたり。これ又御慈悲の御心さしとぞ見えける。證空重ねて申されけるは、「深く思ひ定めて候、變ずべきにも候はず。其上上人の苦惱を見奉るに、刹那の間も惜しくこそ候へ、御心に任

すべきにあらず。急ぎ法會を行ひ、まつりを急がれ候へ。但し八旬に餘る母を持ちて候、今一度今生の姿を見見え候ひて歸り参るべし、暫し待ち給ふべし」とて、暇乞うてぞ出で給ふ。證空阿闍梨を哀れと云はぬ者は無し。其後母の許に行き、此事委しく語り給ふ。母聞きも果てず、證空の袖に取り付き、「思ひも寄らず、師匠の御恩ばかりにて、母が憐みをば捨て給ふべきか。御身を殘し、みづから先き立ちてこそ順次なるべけれ。思ひも寄らぬ例」とて、證空の膝に倒れ掛かり、涙に咽ぶばかりなり。證空は母の心を取り留めて、「よくよく聞食せ、師匠の御恩徳には何をか譬へて申すべき。はかなき仰せとも覺えて候へ。」「はかなき母が生み置きてこそ、尊き師匠の恩徳をも蒙り給へ。母の恩大海よりも深しとは、誰やの人か云ひ初めける。」「親は一世、師は三世、淺き憐みなり、知らせ給ふらん。」「何とて情はましますまぬぞ、今日の命を知らぬ身の、耻をば誰か隠すべき。協ふまじ」とて取り付きたり。「聞き給はずや、淨飯大王の御子悉達太子は、一人おはします父大王を振り棄て、阿羅羅仙人に給仕し給ひしぞかし。」「それは生きての御別れ、これは死すべき別れなり、喻へにも成るべからず。」「御詞の重きとて、只今隠れ給ふ師匠をや殺し奉るべき。」「まことに自ら物ならずは、暇を乞ひても何かせん、七生まで不孝するぞ」と云はれつつ、打轉び給ひけり。斯くて證空進退ここに谷まり、師匠の恩徳を報じ奉らんとすれば、母の不孝永劫にも遁れ難し。身の置き所無かりければ、母の御前に跪き、「不孝の仰せ悲しみても餘り有り、擦落の責いつをか期せん。此世は假の宿なり、未來こそ實の住所にて候へ。」「〇一本ヘナシ」。師匠の命に代り奉らば、御迎ひにも參

るべし。然らば一つ蓮の縁にも何どかは成らで候べき。思食し切り候へ」とて、餘波の袂を引き分くる。母は猶も慕ひかね、然らば自らをも連れて、一つ蓮の縁に成し給へや。捨てられて老の身の何と成るべきと、絶え悲み給ふ。阿闍梨は母を慰籍めかね、斯様ならんと思ひなば、なかなか申し出だすまじかりつるものを、又は母に暇申さずとも、思ひ定むべかりつる事を、心弱くて斯様に憂目を見ることよ。惜み給ふも理なり、只一人ある子なり、月とも星とも我をならでは頼み給はぬ御事なり「〇月とも以下一本ナシ」、一日片時も見奉らぬだに心もとなくて、暇無き行法の間さまへ、心ならず思ひ見奉る事無し。見ゆること遅き時は、杖に纏り來り給ひて、跪き、背後に立ち、夏は扇を遣ひ、冬は暖むるやうにしたため給ふ。「これ然るべからず」と申せども、「幾程も無き自らが心に任せてくれよ」と仰せられければ、上人も憐み有りて、心に任せよと御慈悲あるに由つて、片時も離れ給ふ事無し。我れまた御憐みの默し難きに、間を計らひ見奉らんと通ひしぞかし。げにも今更別れ奉りなば、然こそ悲しくましますまめと思へば、涙もせきあへず。まことに自ら失せなば、やがても絶え入り給ふべき心ざしなれば、立つも立たれず、居るも居られず、唯だ惘然として泣くばかりなり。猶しも母は引かへたる袂を放さで寄り掛かり、泣き沈み給ひければ、袖引き分き難くて、掌を合せ、「自らが申す理よくよく聞食し候へ。惜み思食さるる御事、備事には存じ候はず、然りながら、かねても申しし如く、此世は夢幻と住み成し給へ、佛と申す事は外に無し、我が爲す胸の中に明かなり。月輪の曇らぬを悟りと申す、埋るるを迷ひと申し候。然れば佛は衆生に善惡

隔て無き由説き置かせおはしますものを、然らば親と成り子と成り、師と成り弟子と成り、これ皆一心の願に由り、三箇大事悉く阿字の一字にこそ納まりて候へ」と怒りければ、母引かへたる袖を少し許るしける處に、乘恩入無爲、眞實報恩者の理を悉きに説きければ、母涙をおさへて、「然らば」とて許しけり。證空は嬉しくて、急ぎ坊に歸りけり。まことに孝行の程、天衆地類も憐れみを成し給ふべきにや。

泣不動の事

晴明遅しと待ちし事なれば、七尺に床をかき、五色の幣を立て並べ、金錢散供、數の供具、菓子盛り立て、證空を中に居えて、晴明禮拜恭敬して、數珠さらさらと押し揉み、上は梵天帝釋、四天王、下は堅牢地神、八大龍王まで勸請して、既に祭文に及びければ、牛王の渡ると見えて、種種の金錢幣帛、或は空に舞ひ上がりて舞ひ遊び、或は壇上を跳り廻る。繪像の大聖不動明王は利劍を振り給ひければ、其時晴明座を立て、數珠を持つて證空の頭を撫で、平等大慧、一乘妙典と云ひければ、すなはち上人の苦惱醒めて證空に移りけり。やがて五體より汗を流し、五臟を破り、骨髓を碎く事云ふに及ばず。これを見る人、晴明が奇特の尊さ、證空の心ざしの有り難さに、上下袖を絞るばかりなり。然て證空の頭より烟立つて、苦痛忍び難かりしかば、年比頼み奉る繪像の不動明王を睨み奉り、「我が二つ無き命、師命に奉ず、召し取らしめ、屍を壇上に留めん」と、正念に住して、「安養淨刹に迎へ取り給へ、知我心者、即身成佛、過ち給ふな」



と、一心の願を成しければ、明王哀れとや思しけん、繪像の御眼より紅の御涙をはらはらと流させ給ひて、「汝貴くも報恩を重くして、一人の親を振り捨て、師命に代る心ざし、褒しても餘り有り。我また如何でか汝が命に代らざるべき。行者を助くる大聖明王の誓ひ、地藏薩埵に限らず、受くるところの苦痛を見よ」と、新に靈驗顯れければ、明王の御頂より猛火ふすぼり出で、五體より汗を流し給ふ。貴しとも忝なしとも言葉にも云ひ難し。すなはち證空が苦惱止まり、智興大師も助かり、證空も誓ひにあづかり給ふこと、有り難かりし例なり。然れば三井寺に泣不動とて、寺の寶の其一なり。泣かせ給ひし御涙紅にして、御胸まで流れ掛かりて、今に有りとぞ承る。まことに師匠の恩、斯様にこそ有り難きものなれ。

鞠子川の事

「箱根を忍び出で候ひし時は、權現にも御暇をも申さず、まして師匠に斯くとも申さざりし事、今に其恐れ残りて覺え候」と申しければ、十郎も然てこそとて、箱根にぞ掛かりける。鞠子川を渡りけるが、手綱かいくり申しけるは、「吾殿三つ、祐成五つの年より廿餘の今まで、此の川を一月に四五度つつも渡りつらん。如何なる日なれば、今渡り果てん事の悲しさよ。何とやらん何時よりも此川の水濁りて候、心もとなしと云ひければ、五郎申すやう、「皆人の冥途に赴く時は、物の色變り候とな。我等が行くべき道、曾我を出づるは娑婆を別るるにて候。此川は三途の川、湯坂の峠は死出の山、鎌倉殿は閻魔王、御前祇候の侍共は獄

卒阿防羅刹、左衛門尉は善知識、箱根の別當は六道能化の地藏菩薩と念じ奉る。此川の水色變ると見えて候へ」とて、駒打入れけるが、やや有りて、十郎、

五月雨に淺瀬も知らぬ鞠子川波に争ふ我が涙かな

五郎聞きて、歌の心悪しくや思ひけん、行藤鼓打鳴らして、斯くぞ詠じける。

渡るより深くぞ頼む鞠子川親の敵に逢瀬と思へば

斯様に思ひ連ねて、通る所は阿彌陀のりんじゆ、かさまでら、湯本の宿を打過ぎ、湯坂の峠に駒を控へ、弓杖突きて申しけるは、「人生れて三が國にて果つるとは理なり。我等が「〇一本がナシ」生るる所は伊豆國、育つところは相摸國、最期所は駿河國富士の裾野の露と消えなん不思議さよ。」五郎聞きて、「其最後所が大事にて候ぞ、心得給へ」と諫むれば、「仰せにや及ぶ」とのたまへども、さすが故郷の餘波や惜しかりけん、我が故郷の方を遙遙と眺むれば、ただ雲のみ掛かり、何處を其處とも知らねども、「烟少し見えたるは若し曾我にてや候らん。」だう三郎これを顧みて、「烟は餘所にて候「〇一本曾我にて候はずトアリ」、其れより南の黒き森に雲の掛かりて候こそは、曾我にて候へ」と申しければ、古き事どもの思ひ出だされて、十郎、

曾我はやし霞な掛けそ今朝ばかり今を限りの途と思へば

と打詠め涙ぐみければ、五郎此の有様を見て、此人に同心しては、はかばかしき事あらじ、諫めばやと

思ひければ、怒り聲に成りて、「殿こそは大磯、小磯、曾我故郷をも眺め給へ、時致に於いては、思ふ事こそ急がはしく候へ」とて、駒引き退け駈け出だし、二町ばかり駈け通りぬ。十郎興醒めて思ひながら、駒駈け出だし、追ひ付きけり。五郎引き下がり口説きけるは、「人界に生を受くる者、誰かは最後の餘波惜しからで候べき。鬼王、だう三郎が心をも御耻ぢ候へかし。彼等をば曾我へ歸し候べし、若し此事協は〔〇一本ひ〕で候はば申すにや及ぶ。爲損するものならば、此人人が、此處にては歌を詠み、彼處にては詩を詠じて、しもたてぬ事なんと嘲られんも口惜し。如何ばかりとか思食し候」と申しければ、道理と思はれけん、其後は歌をも詠まず、横目をもせず、打ちける程に、大崩にこそ着きにけれ。

## 二宮の太郎に逢ひし事

際行く道を見渡せば、馬乗五六騎出で來たる。誰なるらんと十郎見るに、二宮殿と覺えたり。「いでや此事語らん」と云ふ。五郎聞きて餘りの事なれば返事もせず、やや有りて申しけるは、「如何で斯様の大事、聲には知らせ候べき。異姓他人にては候はずや、如何なる人か世に無き我等が死に行くと言はんは、同意する者や候べき。ただ對面ばかりにて御通り候へ。」十郎聞きて、「御分の心を見んとてこそ」と相談し、間近く成りければ、此人人馬より下り、弓取り直し色代す。「人人は何處へ行き給ふぞや。」「鎌倉殿富士の御狩と承り、狩座の體見參らせて、末代の物語と思ひ立ちて罷出で候」と申す。義實聞きて、「あはれ人人の無用

の見物かな、馬、鞍見苦しくての見物然るべからず、是より歸り給へ。某も御供と仰せられつるを、見苦しさに、風の心地と梶原が方へ申して遣はし候。面も唯だ是れより歸り給ひて二宮に逗留し、笠懸など射て遊び給へ」と申しければ、十郎、「畏まり存じ候へども、斯様の事は重ねて有り難き見物と存じ、既に思ひ立ち候。馬弱くば山をば牽かせ候べし。歸りには參り、暫くも逗留仕り候べし、設けの看御用意候へ」と申しければ、「此上は御歸りをこそ待ち申すべし」とて、馬引き寄せ打乗り、東西へ打別れにけり。ただ世の常とは思へども、これぞ最期の別れなり。然ても我等討死の後、形見ども曾我より二宮へも送りなん、其時にこそ、男子なりせば一途に成らで在るべきに、女の身の悲し、然は其事こそ協はずとも、「〇一本せめてトアリ」道より何と最期の傳言だに無かりつるぞと怨み給はん事、然ぞあらんと思へば、包む其涙先き立ちぬること悲しけれ。

## 矢立の杉の事

「とても捨つべき命ども、運速は同じ事ながら、然りぬべき便宜もこそ有らめ、一時も急げや」とて、駒を早めて打つ程に、矢立の杉にぞ着きにける。此杉と申すは、元は湯本の杉と云ひけるを、一年九州阿蘇の平權守とて虎狼の逆臣あり。九國を討ち從へてちやう「領カ」する事四か年なり。軍すること五十餘度なり。度毎に勝てり。其時の齡七十二歳なり。あまつさへ天下を惱まし奉らんとて、國を催す聞え有りければ、六孫

王の御時其討手の爲めに、關東の兵を召され上りしに、此杉のもとに下り居て祈りけるは、九州に下り籠守を討ち従へ、難無く都に歸り上り、名を後代に揚ぐべくは、一の矢受け取り給へとて、おのおの射けるに、一人も射損ぜず。然て筑紫に下り合戦するに、難無く打勝つて歸り上りぬ。其時よりして矢立の杉と申しけり。「門出めでたき杉とて、上下旅人、心あるも無きも、此木に上矢を參らせぬは無し。況や我等思ふところ有りて行く者ぞかし、如何でか上矢を參らせざらん」とて、十郎一の枝に留む。五郎二の枝にぞ射立てける。何と無く射けれども、十郎は宵に討たれ、五郎は朝に斬られにけり。此杉の瑞相現れて、一二の枝の隔て、不思議なりける次第とは、今こそ思ひ合せけれ。然ても兄弟は駒を早めて打つ程に、箱根の御山にぞ着きにける。

曾我物語 卷第八

箱根にて暇乞の事

そもそも箱根山と申すは、關東第一の靈山なり。後ろには高山峨峨と連りて、眞如の月影を宿す。前には生死の湖漫漫として、波煩惱の垢を滌げば、無始の罪障も消滅すと覺えたり。本地文殊師利菩薩、衆生を化度し給へば、有爲の都と名づけたり。然れば一度縁を結ぶ者は、長く惡所に落さじと誓ひ給ふ事、頼もしくぞ覺えける。此人人は御前に參り、「歸命頂禮、願くは淨土に迎へ取り給へ。時致十一より此御山に參り、今に至るまで毎日三卷づつ、普門品怠らず讀み奉るも、ただ此爲めなり、憐み給へ」と念誦して、別當の坊へ行きにけり。

同じく別當に逢ふ事

行實やがて出で逢ひ給ひて、古今の物語し給ふ。「男に成り給へばとて、昔に成り變りて思ふべきにあらず、御身こそ外がましくし給へ、画面の心中初めより委しく知りて候ぞ、哀れにのみこそ思ひ奉れ、如何でか恨み申すべき。人に頼まるる事は「〇一本はナシ」、在家出家に由らず、愚僧も年だに若く候はば、何

どかは便に成らざるべき」とて、墨染の袖を顔に押し當て、さめざめと泣き給へば、十郎承り、「御意畏まり入り候へども、更に野心の候はず。時致も其後やがて罷上り、男に成りて候陳謝をも申すべきにて候ひしを、母に不孝せられて候ひぬ。また恐れを成し奉るゆゑ、今に遅なはり候。」別當聞き給ひ、「祈禱は頼もしく思ひ給へ、千騎萬騎の方人と思食せ」とて、酒取り出だして「〇一本てナシ」三三九度勧め給ひけり。

## 太刀刀の由來の事

「何を以てか方方の門出祝はん」とて、鞘巻一腰取り出だし、十郎に引かれけり。此刀と申すは、木曾義仲の三代相傳とて、三つの寶あり。第一に龍王作りの長刀、第二に蜘蛛威しと云ふ太刀、第三に此刀なり。名をば微塵と云ふ。通らぬもの無ければなり。然れば此三つの寶を祕藏して持たれたり。御子清水の御曹司、鎌倉殿の聲に成り給ひて、國の大將軍賜はつて、海道を攻め上り給ひ候由聞えければ、かの寶を祈りの爲めとて此御山へ參らせらる。「寶殿の事は一向別當の計らひたるに由つて、これを御邊に奉る。高名し給へ」と引かれけり。五郎には、兵庫鎖の太刀を一振り出だし引かれけり。「此太刀と申すは、昔頼光の御時、大國よりぶあく大夫と云ふ莫耶を召し、三が月に作らせ、一か月に磨かせ、二尺八寸に打出だす。祕藏竝ぶ物無くして持たれける。或時二つの太刀を枕上に立てられし時、俄に雨風吹きて此太刀を吹き動かしければ、双風に傍なりける草紙三帖の紙數七十枚切れたりけり。頼光てうかと名付けて持たれたり。それより河内守頼

信の許へ讓られぬ。それにての不思議には、此太刀を抜かれければ、四方五たんぎりの虫も翼も切れ落ちにければ、虫ばみとぞ附けられける。それより頼義の許へ讓られたり。それにての不思議には、折折御所中震動して、人死に「〇本し」失すること度度なり。或時頼義此太刀を枕に立てられしに、例の如く雷電烈しく御所中騒し。此太刀已れと抜け出でて、大地一丈が底に入り、斯かる悪事仕る大蛇の尾頭九尋ありけるを、四つにこそは切りたりけれ。其後よりぞ御所中の狼藉も止まりける。怪みて跡を尋ねて見給へば、斯かる不思議を爲たりければ、毒蛇と名づけて持たれたり、それよりして八幡殿へ讓られける。それにての不思議には、其比宇治の橋姫の暴れて人を取りけり。或夕暮に八幡殿宇治へ參られけるに、人の申すに違はず、川の水浪頻りにして、十八九ばかりなる美女一人橋の上上がりて、八幡殿を馬より抱だき下ろし、川の中へ入れんとす。彼の太刀已れと抜け出でて、橋姫の左手の腕を切り落す。力及ばず川の中へ飛び入りぬ。それより狼藉も止まりけり。然れば此太刀を姫切と名づけて持たれたり。それより六條の判官爲義の許へ讓られたり。それにての奇時には、此太刀に六寸ばかり勝りたる太刀を添へて置かれたる「〇一本にアリ」、夜に入りぬれば斬り合ひけるを、判官此由聞き給ひて、かねてより様ある者をとて、五夜までこそ立て添へて置かれけれ。五夜の間隙無く戦ひて、六夜と申すに我が寸に勝りたるを安からずや思ひけん、餘る五寸を切り落す。然れば友切と名づけて持たれたり。源氏軍代にも傳ふべかりしを、保元の合戦に爲義斬られ給ひ、嫡子左馬頭義朝の手へ渡りけるに、佛法守護の佛とて鞍馬の毘沙門に籠め給ふ。然れども過ぎにし

合戦に父を斬り給ひしかば、多聞も受けずや思しけん、合戦に打負け、東國指して落ち給ふ。尾張國知多郡野間の内海と云ふ所にて、相傳の家人鎌田兵衛正清が舅、長田の四郎忠致に討たれ給ひて後、傳ふべき人無かりしに、義朝の末の子九郎判官殿、未だ牛若殿にて、鞍馬の東光坊の許に學問しておはしけるが、如何にしてか聞き給ひけん、折折毘沙門に詣り、歸命頂禮、願くは父義朝の太刀此の御山に簡められて候、父の形見に一目見せしめ給へと祈念申されければ、多聞哀れと思食しけん「〇一本けるにや」、此太刀を下し給ふと夢想を蒙ふり、喜びの思ひを成し、急ぎ参りて見奉り給へば、現實に「〇一本うつつにナシ」御戸開けて此太刀あり。盗み出だして深く隠し置きて、十三に成り給ひける年、相傳の郎等奥州の秀衡を頼み、商人に伴なひ下り給ひけるに、美濃國垂氷の宿にて、商人の寶を取らんとて、夜討の多く入りたりしかども、起き合ふ者も無かりしに、牛若殿一人起き合ひ、究竟の兵十二人斬り止め、八人に手を負はせて、多くの強盗追つ返す。高名したる太刀なりとて、奥州まで秘藏せられけるに、十九の年兵衛佐殿謀叛起し給ふと聞食し、鎌倉に上り見参に入り、幾程無くして西國の大將軍にて發向せられけるに、今度の合戦に打勝たせ給へとて、此御山へ参らせ給ひて候。自然に御事爲出だし候ひて、上より御尋ねあらば、法師が御邊に奉りて、狼藉なりと御不審あらん時は、京に上り四條の町にて買取りたる由申さるべし。御分男に成り給へば、今に見参に入れたくは無けれども、心ざしを思ひ遣られて哀れなるぞとよ。祈禱は頼もしく思ひ給へ、此法師が息の通はん程は、明王を促め奉らん、何の疑ひか有るべき」とのたまひけり。時致承つ

て、「仰せ忝なけれども、更に野心の儀は候はず、御不審の條尤にて候へども、恐れ奉つて参らぬなり。狩場より歸りには参るべく候。又は思食し合はする事も候ひなん」とて罷立ち、然らぬ體にはもてなせども、今を限りなれば、忍びの涙を流しけり。別當も縁まで立ち出で給ひて、遙遙見送りつつ、名残惜しくぞ思はれける。兄弟の人人は、駒に鞭を打ち、急がれける程に、三嶋近くぞ成りにける。

## 三嶋にて笠懸を射し事

十郎道にて申しけるは、「只今別當の御詞、ひとへに御託言と覺えたり。其上我等に權現より劍二つづつ賜はり候上は、今度敵を討たんこと疑ひあるべからず」と喜びて、三嶋の大明神の御前にこそ着きにけれ。此人人疊紙を挟み、七番づつの笠懸を射て法樂し奉り、敵のこと心の儘にぞ祈られける。「まことに思ふこと協はずは、我等敵の手に掛かりて、足柄を東へ二度歸し給ふべからず、南無三嶋の大明神」とぞ念じける。皆人は神や佛に詣りては、或は壽命長遠と祈り、諸病悉除とこそ祈るに、此人人の明暮は、父の爲めに命を召せとのみぞ申しけるこそ「〇一本こそナシ」無慙なれ「〇一本なりし事どもなりトアリ」。斯様の事どもを「〇一本事まで」も最後の文に委しく書きて、富士野よりぞ返しける。「〇一本そがへかへしける」。母見給ひて、五つや三つより思ひ立ちけるとも知られけり。

浮嶋が原の事

然ても御寮は浮嶋が原に御座の由承り、曾我兄弟も急ぎ追つ付き奉りぬ。浮嶋が原を通りけるに、彼の原の昔は海にて有りけるに、大國よりあしたか山と云ふ山、富士と才競せんとて來りけるを、權現蹴鞠し給ひければ、其山海に浮きて、今の浮嶋が原に成りにけり。一方は海漫漫として雲行客の跡を埋み、一方は横折り伏せる佐夜の中山、宇津の山へ續き、東路分けて遙かなり。或人東國に下りけるが、此原にて、滄波路遠くして雲千里と云ふ詩の上の句を作り、下の句を寄せかねたりけるをりふし、十六歳に成りける娘を連れたりけるが、詩をば作り得ずして、

路遠く雲居遙けき山中に又とも聞かぬ鳥の聲かな

と詠みたりければ、父聞きて先の下下の句を次ぎけり。白霧山深うして鳥一聲と云ふ詩も、今更思ひ知られたり。其夜は君浮嶋が原に御泊りあり。此人人も便宜好くばと窺ひけれども、用心隙無かりければ力無し。其夜も其處にて窺へども、北條殿の警固にて隙も無し。

富士の狩場への事

御寮は相澤の御所にましましてけるが、梶原源太左衛門を召して仰せ下されけるは、「昨日の狩場より勢子少

なくては協ふまじ、其由相觸れよ。」承つて人人に觸れ、射手を捕へけり。先づ武藏國には畠山の庄司次郎重忠、三浦の和田左衛門義盛、三浦の介義澄、下總國には千葉の介、古郡左衛門兼忠、武田太郎信義、下野國には宇都宮の彌三郎朝綱、横山藤馬丞、相模國には松田河村の人人を先として、以上三百餘人なり。若侍には、畠山次〔〇六カ〕郎重保、梶原源太左衛門景季、朝比奈三郎義秀、同じくひこ太郎、御所の太郎、森五郎、林四郎、小山三郎、葛西六郎、板垣彌次郎、本間彦七、澁谷小五郎、愛甲三郎を始めとして四百五十餘人なり。總じて弓持ち馬に乗る侍、三百萬騎も有るらんと見えし。其後勢子を山へ入れけるに、東は愛鷹の峰の境、西は富士川を際として引き廻されけり。勢子は雲霞の如し。嶺に登り谷に下り、野干を平野に追ひ下し、思ひ思ひに射留めけり。御寮の其日の御装束には、羅綺の重衣の藤松の風折したる立烏帽子に、狩衣は柳色、大紋の指貫に熊の皮の行膝しばうちながに召し、連錢鞆毛なる馬の五尺に餘りたるに白鞍置かせ、厚房の鞆掛けてぞ召されける。御寮の役は江戸太郎、御笠の役は豊嶋新五郎、香の役は小山五郎、御敷皮は金子十郎なり。其外一人當千の兵六七百人、御馬の廻りと見えたりし。其中に殊に勝れて見えたりしは五郎丸なり。萌黄〔葱〕威の胴丸に、一尺八寸の大刀差し、四尺八寸の太刀を佩き、黒金の棒の三人して持ちけるを、本輕げに撞きて、御馬の前にぞ立ちたりける。御陣の左右には和田、畠山いづれも鷹をぞ据えさせける。馬打ち靜かにして又並ぶ人無くぞ見えし。其外數千騎の出で立ち、花を織り月を招く粧、廣き富士野も所無くぞ見えし。斯くて山より鹿ども多く追ひ下ろし、思ひ思ひに止めて、御寮の御

見參にぞ入れにける。畠山六郎重保、左手右手に相付けて鹿二頭留む。宇都宮五頭、一條板垣五頭、武田、小山の人人も五頭こそ留めけれ。其狩場の物數は此人人とぞ聞えし。爰に葛西六郎清重日の暮れ方に至るまで、鹿一頭も留めずして、勢子に漏るる鹿もやと、繁み繁みに目を掛けて廻りける。折節左手の繁みより鹿一頭出で來たる。願ふ所と見渡せば、矢頃少し延びたり。鐙に鞭を打ち添へて、下様にぞ落しける。既に二三段ぎり違へて、弓打上げて引かんとする所に、思はぬ岩石に馬を乗り掛けて、四つ足一つに立てかねて、わななきてこそ立ちたりけれ。下ろすべき様も無く、進退ここに谷れり。上下萬民これを見て、唯だあれはあれはとぞ申しける。今は馬人諸共に微塵に成るとぞ見えたりける。清重手綱を靜かに取り、とねりなしを結び置き、かがみの鞭を打ち添へて、二つ一つの捨て手綱、むくんにうに落ち掛かり、放せば後ろに下り立つたり。馬は手綱を捨てられて、眞砂に連れて落ちて行く。ぬし「〇一本ぬしナシ」かづきたる「〇一本たるナシ」弓のもと岩角にえり立て、暫し堪へて立ち直る。諸人目をこそ澄ましけれ。乗りたり下りすべたりや「〇一本下りたりすゑたりやトアリ」堪へたりと、暫しは鳴りも靜まらず。君の「〇一本も」御感の餘りにや、常陸國小栗の庄三千七百町下されけり。時の面目、日の高名、何事か是れに如かんと、感ぜぬ人こそ無かりけれ。

## 源太、重保が鹿論の事

斯かる所に上の繁みより鹿一頭出で來り、梶原源太控へたる左手を通りてぞ下りける。景季幸ひにやと喜びて、鹿矢を打番ひ、よつひき放つ。追つ様筋かひに首を掛け、つとぞ射貫きたる。然れども鹿は物ともせず、思ふ繁みに飛び下る。二の矢を取つて番ひ、鞭打下す所に、不思議に馬を乗り懸けて、足竝亂るる所に、下り立つて馬引立つる其隙に、畠山の六郎重保、馳せ並べて、よつひいて放つ。源太が矢目をはぎりまでぞ射ける。源太にはしたたかに射られぬ。鹿は少しも働らかず、二つの矢にてぞ止まりける。重保馬打寄せて見る所に、源太も馴け寄せて、「鹿は景季止めて候ぞ。」重保聞いて、「心得ぬ事をたまふものかな、鹿は重保が矢一つにて留めたる鹿を、誰人か主あるべき。」源太弓取り直し、あざ笑ひて申す様、「狩場の法定まれり。一の矢二の矢次第あり、矢目は二つも有らばこそ、一二の論も有るべけれ。景季も正しく射つるものを」とて見れば、實にも矢目は一つならでは無かりけり。然りながら御前で取らるるものならば、時の耻辱に思ひければ、源太大に怒りを成し、「勢子の奴原は無きか、寄りて此鹿取れ。」重保も駒打寄せ、「雑人は無きか、重保が止めたる鹿の皮たて。」源太も「〇一本もナシ」然る者なりければ、少しも怯む氣色は無し。「臆したる奴原かな、景季が留めたる鹿の皮たてかきて取れ。」重保然らぬ體にて駒駆け廻し、「雑色共は何と鹿をば取らぬぞ」と、早事實なる詰論なり。源太は手綱掻い繰り、駒打寄せて小聲に成りて「〇一本なりてナシ」云ふ様、「隠路に迷ふ隠文、遣る者こそ主候よ。」重保聞いて、「優しくのたまふ譬へかな、思ひの色の數夜まで、空しく返すには、返し得たるぞ主と成る。」源太打笑ひ、「吉野、龍田の

花紅葉、誘ふ嵐は主ならずや。」重保聞きて、「云はれずや、誘ふ嵐も其儘に、終に連れても行かばこそとたまふ。龍田の河の河波に、散りて流るる花の雪、紅葉の錦渡りなば、中や絶えなん然りながら、流れて止まる所こそ、まことの主と思はるれ。」「げに故ありて聞えたり、波にも連れて行かばこそ、斯かる井堰の主なるべき。」「井堰も留め果てばこそ。流れて止まる濠こそ、まことの主とは覺えけれ。」源太此詞を打捨てて、「更け行く月の傾ぶくをも、詠むる者こそ主と成れ。」重保聞きて高らかに打笑ひ、「世界を照す日月を、主とのたまふ過分なり。」「過分は人に由るものを、御分一人に歸すかとよ。」重保堪らぬ男子にて、「二人に歸すか歸せざるか、手竝の程を見せん」とて、既に矢をこそ抜き出だす。源太も白まぬ者なれば、「案の内よ」と云ふままに、既に中指抜き出だす。梶原が郎等は云ふに及ばず、時の綺羅並ぶ者無かりしかば、知るも知らぬも押し竝べて、梶原方へぞ馳せ寄りける。三浦の人人も是れを見て、源太に意趣ある上は秩父方へは疎遠なり、見放すまじとて馳せ寄りける。以下の人人、兒玉の人人は梶原方へぞ與力する。みま本間の人人は秩父方へぞ「〇一本よせアリ」来る。駿河の國の人人は梶原方へぞ寄りにける。伊豆の國の人人は、北條殿を先として、秩父方へぞ馳せ寄りける。安房と上總の侍は二つに割れて寄りにける。常陸下總の人人は秩父方へぞ集りける。八か國のみにあらず、日本國中に名を知らるる程の侍、魚鱗に重なり鶴翼に連りて、ひたひしめきにひしめきけり。畠山殿は始より知り給ひしが、如何が思はれけん、知らぬ由にてぞましましける。頼朝これを御覽じて、「あれあれ、義盛静め候へ」と仰せ下されければ、和田殿、

兩陣の間へ馬駆け入れ、「上意にて候ぞ、鹿論の事互に其理あり、所詮鹿をば上へ召され候、兩人御前へ參られよとの御説にて候」と、大音聲にて云ひ、其後勢子を召し、かの鹿を昇かせ、六郎と源太と引き連れ御前差して參られけり。然てこそ兩陣は破れにけれ。危ふかりし事どもなり。然ればにや、君の御惠み遍く御憐み深くして事静まりぬ。方方も安穩なるにて昔を思ふに、

## 燕の國旱魃の事

大國の燕の國旱魃する事三が年なり。然れば草木悉く枯れ失せ、人民多く亡びける上は、鳥獸に至るまで、生き残るべしとは見えざりけり。國王大に歎き給ひて、大法祕法残さず行ひ、雨を祈られけれども、驗無し。大王思ひの餘りに諸天に恨み奉りて云はく、「我れ生れてよりこのかた禁戒を犯さず、事を妄りに行ふとも思はず候に、斯くの如く旱魃して、人のしやうめい少なし。若し我身に過まる所あらば、戒め給へかし」と歎き申さるれども、其驗無し。今は身命を民の爲めに捨てんには如かじとて、廣き野邊に出で糞を多く集めて、高さ二十丈に積み上げさす。公卿大臣奇異の思ひを爲す所に、國王臨幸なりて、其の糞の上に登り給ひて、「火を附けよ」と諭言なりければ、臣下大きに辭して附くる者無し。其時大王のたまふ、「若し過まりて政治猥りなる事あらば焼けぬべし。焼くる程の身ならば、命生きても益無し。若し又過まらずば天是れを守るべし」とて、大きに逆鱗ありければ、諭言背き難くして、四方より火を附ければ、猛火山の如くに燃え上が



りて炎空に滿てり。大王も烟に咽び前後辨へ難し。既に御衣に火の附きければ、目を閉ぎ掌を合せて正念に住して、火坑變成池と念し給ひければ、天是れを憐みて大雨俄に降り下りて、山の如く成りつる猛火を消し、國王も助かり給ひ、人民も命を繋ぎ、五穀成就しけるとなり。然れば論語に云はく、過まりて改むるに憚ること勿れ、過まりて改めざるは、賢却りて愚なりと見えたり。此文の名を圓珠と云へり。まどかなる玉の鑑を走ると比へてなり。君御言葉の重き一つにて、多勢の靜まりけるにて知られけり。曾我の人人は、あはれ事の出で來れかし、方人する風情にて、狙ひ寄つて一刀刺さんとばかり思ひけり。斯くて日も暮れ方に成りしかば、今日を限りと傾ぶく日影を惜しみけり。

新田が猪に乗る事

ここに伊豆國の住人新田の四郎忠常、未だ鹿に逢はずして、落ち來る鹿を相待つ處に、幾年經るとも知らざる猪が、ふしくさかく十六つきたるが、主を知らぬ猪矢ども四つ五つ立つたりしが、大に猛つて驅け廻る。譬へば養由が術、きよりくりうが神變も、及ぶべしとは見えざりけり。近づく者を猛れば、落ち合ふ者も無くして、徒らに中を明けてぞ通しける。忠常これを幸ひと驅け寄せけり。御前近う成りければ、「よしや新田よ、しや忠常」とぞ仰せ下されける。人もこそ多き中に、斯様の御説蒙る事、生前の面目何事か是れに如かんと存ずる間、鐵銅を丸めたる猪なりとも、餘さじものをと思ひければ、大の猪矢を抜き出だし、唯

だ一矢にと引いて放つ所に、矢よりも先に飛び來り、乗りたる馬を主共に宙にすくうて投げ上げ、落ちば懸けんとする所に、協はじとや思ひけん、弓も手綱も打捨てて、向様にぞ乗り移る。然れども倒にこそ乗つたりけれ。猪は乘られて腹を立て、馬を彼處へ懸け倒し、雲と霞に分け入つて、虚空を飛んで廻りしは、周の穆王、釋尊の教法を聞かんとて、八匹の駒に鞭を上げ、萬里の道利那に飛び著きしも、是には如何で勝るべき。新田は習ひし手綱の様、腰も切れよと挟みつけ、尾筒を手綱に取り、樂人が傳へし三頭王良が秘せし手綱是れなりけりと堪へけれども、詮方無くぞ見えたりける。猪はいよいよ上猛りをかき、木の下の、萱の下、巖石を嫌はずして、宙に飛んで廻りしかば、烏帽子、竹笠、沓、行膝、一度に切れて落ちにけり。大童に成りて、ただ落ちじとばかりぞ堪へける。大きに猛き猪も數多手は負ひぬ、新田が威にや押されけん、御前近き枯杭に爪突き弱る所に、あやまたず腰の刀を抜き、胴中に突き立て、肋骨二三枚掻き切りければ、猪は四足を四五寸土に踏み入れて、立ちすくみにこそ成りにけれ。新田は急ぎ飛び下りて、數の止めを刺す。上下の狩人これを見て、「前代未聞の振舞かな、面白くも止めたり、乗りも乗つたり、堪へも堪へたり」と、感ぜぬ人こそ無かりけれ。君も此由御覽じて、「狩場の中の高名は是れに如かじ」と御感あり。富士の下方にて、五百餘町を賜はりけり。勢ひ餘りてぞ見えし。然れども此猪は、富士の裾隱居の里と申す處の、山の神にてぞましましける。凡夫の身の悲しさは、夢にも是れを知らずして留めにける御咎めにや、やがて其夜曾我十郎に打ち合ひ、數多の手負ひ危かりし命、幾程無くて、田村判官が謀物同意の由讒言せられ

て、討たるべかりしを重保に付き申し開き、御目に掛からんとて參じけるをりふし、召しの御馬離れたりしが御庭狭しと馳せ廻る。日本一の荒馬なれば、追ひ廻す人人これを見て、「よしや新田、取れや忠常、綱を懸けよ、過すな」と、聲に呼ばはりて庭上騒動す。新田が郎等門外に集りて、「我等主只今搦め取らるるぞや、主の討たるるを見捨てて、何處までか逃るべき」とて、思ひきつたる兵共二三十人抜き連れて、御前指して斬つて入る。新田が運の極なり。御所方の人人これを見て、「新田が謀叛眞なり、餘すな方方」とて、非番當番の面而出で合ひて、火出づる程こそ戦ひけれ。御所方の人人數多討たれしかば、新田がちんぼろ逃れずして、廿七にて討たれにけり。不便なりし事どもなり。是れも「○一本もナシ」然しながら富士の裾野の猪の咎めなりとて、舌を巻かぬは無かりけり。是れや靈神怒る時は災害岐に満つなるも、今こそ思ひ知られたれ。

船の始の事

然ても御寮は、何時の暮より御狩の興に入り、四方の海山をぞ眺めさせ給ひける。折節沖つ嶋の木の間より、漕ぎ浮べたる蟹小舟、同じ風にぞ行き違ふ。げに不思議なる舟の操かな、誰人か爲初めつらんと仰せられけり。千葉介が申しけるは、「船の始は、昔黄帝の御時蚩尤と云ふ逆臣ありて、おほごう「○をかう(鳥江)ノ訛」と云ふ海を隔て、攻むべき様無かりけり。ここに貨狄と云ふ臣下あり。折節秋の末なるに、

寒き嵐に散る柳の一葉の上に乗りつつ、次第次第に小蟹の、いとほかなくも柳の葉の、汀に寄りし秋霧の、立ち來るくもの振舞、げにもと思ひ初めしより、巧みて船を造らせ、おふごう「○をかう(鳥江)ノ訛」を易く渡り、蚩尤を平け、御代を治め給ふ事、一萬八千歳となり。然るに船の船の字を君にすすむと書きたり。又天子の御駕を龍駕と名づけ奉り、又船を一葉と云ふ事も、此時よりぞ始まりける。又君の御座船を龍頭鷄首と申すも、此御代よりぞ起りける」と申しければ、「然て極樂の弘誓の船は如何にや。」「それは菩薩聖衆の御法にて、凡夫の及ぶ所に候はず」とぞ申されける。同じく富士の高嶺を遙遙と見上げさせ給ひて、昔竹取の翁、鶯の卵を養じて、赫夜姫と成りし行方、又、風に靡く富士の烟の空に消えて行方も知らぬ我が思かなと詠せし西行法師が下心まで、思食し出だしけり。

祐經を射んませし事

梶原源太左衛門景季は未だ鹿に逢はずして、落ち來る鹿を待ち掛けつつ、馴け並べ、よつひいて放つ。然れども上を遙かに射越して通しけり。景季取り敢へず斯くこそ申しけれ。夏草の繁みが下を行く鹿の袖の横矢は射にくかりけり

君聞食して神妙なりとて、これも富士の裾野にて百餘町をぞ賜はりける。人人これを聞いて、「鹿射外し、歌

詠みてだに恩賞に預かる、まして好く留めたらん輩は如何に」とぞ申しける。御寮、左衛門尉祐經を召して、「不審なる事あり、用心せよ」と仰せ下されければ、畏まり存じ候由を申しける。ここに梶原源太景季、侍の所司にて、總奉行第一の者なれば、上の御説を承り、曾我の人人を近づけて申しけるは、「神妙に御供申されて候。奉公は何れも同じ事、御宿に大事の御物具あり、留守の御宿直申されよ。如何様今度鎌倉へ入らせましたして、御免蒙ふり給ふべし。奉公心に入れられよ」と申しければ、祐成是非に及ばずして、「畏まり入り候、好き様に御申し候へ、頼み奉る」とぞ、返事しける。源太重ねて申す様、「御給仕に由つて、本領子細あらじと存じ候」と云ひてこそ歸りにけれ。時致これを聞きて、「あはれ源太、我我を謙かさと思ひたる氣色のさし現はれたる奴かな、蛇は一寸を出だして其大小を知り、人は一言を以て其賢愚を知る。狐の子は子狐より、父が孫を繼ぎて、此冠者が頼の白さよ。いつの奉公に由りてか御氣色も好かるべき。定め御寮の仰には、其冠者原は誰が許して狩場へは出でけるぞ、よくよく謙かし置きて首を斬れとの御説か、洗罪せよとの仰にてぞ有るらん。げにや古き詞を案ずるに、國の賢を以て興し、諛を以て衰ふ。君は忠を以て安じ、偽を以て危し。人は巧みにして偽はらんよりも、拙なうして誠あるには如かず。此者の振舞は世の煩ひとも成りぬべし、其上奉公申すべき爲めならず。あはれ身に思ひだに無かりせば、此冠者が頼一太刀斬つて慰さまんずるものを」とぞ申しける。然て兄弟は見え隠れに連れつ離れつ、心を盡し狙ひけるこそ無慙なれ。十郎が其日の装束には、萌黄「葱」匂の裏打ちたる竹笠、村千鳥の直垂に夏毛の行膝深く引つこ

うで、鷹うすべうの鹿矢、管高に取つて付け、重藤の弓の眞中取り、葦毛なる馬に具鞍置きてぞ乗つたりける。五郎が其日の装束には、薄紅にて裏打つたる平紋の竹笠、眼深に著て、唐細美に蝶を二つ三つ、所所に附けたる直垂に、紺の袴、秋毛の行膝たぶやかに穿き下し、鶴の本白の征矢、管高に負ひ成し、二所藤の弓の眞中取り、鹿毛なる馬に蒔繪の鞍置きて乗つたり。遙かに遠き敵を見付けて十郎に告げ、下野「〇一本野ナシ」にて祐經を見付けて五郎に告げ、互に心を通はしけり。人は皆鹿に心を入れ、如何にもして上の見參に入らんと、嶺に登り谷に下り、野を分け里を尋ねけれども、餘所目如何がと思ひしに、勢子を破りて鹿こそ三頭出で来りけれ。是は如何にと見る所に、かの祐經こそ追つすがひて落しけれ。其日の装束花やかなり。浮線綾の直垂に、大斑の行膝に、切符の矢負ひ、吹寄藤の弓の眞中取り、金砂にて裏打ちたる平紋の竹笠、風吹き靡かせ、黒き馬の太く逞しきに、白覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。馬も聞ゆる名馬なり、主も究竟の乗手なり、三つ有る鹿に目を懸けてこそ追つすがうたれ。三つ有る鹿には隔たりぬ、馬の駈場も好かりけり。十郎これを見て、「此鹿は埜の外に勢子を破りて落ち来るにや、追つ返し奉らん」とて、十三束の大の中差取つて番ひ、矢所多し云いへども、奥野の狩場の歸り様に、父の射られけん鞍の山形の端、行膝の引き合せ、報いの知らする恨みの矢、餘の所をば射べからず、如何なる金山鐵壁なりとも、心ざしの何かは通らざらんと、左手に成してぞ下りける。五郎も同じく中差取つて差し番ひ、左衛門尉が首の骨に目を掛けて、大鯨石を重ねたりと云ふとも、何とか斬つて捨てざらんと、鞭に鐙を揉み添へて、右手に相付

け馳せ竝べ、三つ有る鹿と左衛門を眞中に取り込め、矢先を左衛門に指し當てて引かんとする所に、祐經が暫しの運や残りけん、祐成が乗つたる馬を、思はぬ伏木に乗り懸けて、眞倒に轉びけり。過たず弓の本を越して、馬の頭に下り立つたり。五郎は是れを知らずして、矢管を取り立ち上りけるが、兄の有様を一目見て、目も昏れ心も消えにけり。此際に敵は遙かに馳せ延びぬ。鹿をも人に射られけり。五郎空しく引き返し、急ぎ馬より下り立つて、兄を介錯しける心の中こそ悲しけれ。「哀れ、げに我等ほど敵に縁無き者あらじ、只今は然りともこそ思ひしに、馬強かりせば斯様には成り行かじ。是れも貧より起る事なり、人を恨むべきにもあらず。協はぬ命長らへて物を思はんよりも、自害して悪靈にも成りて、本意を遂げん」とぞ悲みける。十郎これを聞きて、「暫く待ち給へ、それ泰山のかめは巖を穿ち、らいは石を穿つ」「○本文文選ノ(泰山之雷穿石)ノ訛讀」、彈極の綱は輪を斷る。水は石の鑿「○同上(石之鑿)ノ訛」にあらず、案は木の鏝にあらず、せんひの然らしむる所なり「○同上(漸靡使然也)ノ訛讀」、ただ心を延べて功を積み給へ」とて、馬引き寄せ打乗りける。

畠山歌にて訪はれし事

其後は人人如何に見るらんとて、十郎駈くれば五郎控へ、五郎行けば十郎止まり、他目をも包みければ、時移り事延び行きければ、其の日も巳に暮れなんとす。畠山殿は程近くましませば、兄弟の有様をつくづく

御覽して、今まで本意を遂げぬ「○一本ざる」ぞや。あはれ平家の御代と思はば、何とか矢一つ訪らはざらん。當君の御代には斯様の事も協はず、重忠も若き子供を持ちぬれば、人の上とも思はずして、まことに無慙に覺えたり。梶原觸状には、明日鎌倉へ入らせ給ふべきなれば、今宵討たでは協ふまじ、此由知らせんと思ひ給へども、人人數多ありければ、歌にてぞ訪らひ給ひける。

まだしきに色づく山の紅葉かなこの夕暮を待ちて見よかし  
と詠め給ひて涙ぐみ給ひけり。折節梶原源太左衛門が近う控へたりしが、「何事にや、曾我の殿原にまだしきに色づく」と詠じ給ふは心得ず。「重忠聞いて、「夏山に夕日影のさし残る風情、初紅葉に似ずや、此夕こそ猶も移り行かば、まこと秋にや成り行かん」。源太は「○一本はナシ」猶も言葉有り顔なりしを、君より急ぎ召されしかば駈け通るとて、「重忠の御歌の不審残りて」と云ひながら馳せ過ぎければ、人人聞きて、「命に始めぬ梶原が和議とは云ひながら、ことに懸りて見えぬるをや」と申し合ひける。重忠仰せけるは、「命を養ふ者は病の先に薬を求め、世を治むる者は亂れぬ先に劍を習ふと、三部論に見えたり。それまでこそ無くとも、斯様のえせ者を近く召し使ひて、末の世如何が」とぞ仰せける。其後曾我の人人を近づけて、「今宵重忠が所へまします、歌の物語を申さん」とのたまへば、畏まり存じ候よし返事して、十郎弟に云ひけるは、「畠山殿は情を以て、早此事を知り給ひけるぞや。耳を信じて目を疑ふ者は、耳の常の弊なり、遠を尊みて近づくを賤む者は、人の常の情と抱朴子に見えたり。然れども歌の心は如何に」と問へば、「知らず」と

云ふ。十郎は萬つに情深くして歌の心を得たり。「思ふ事あらば今宵限りと告げ給ふぞや、君は明日伊豆の郷、明後日鎌倉へ入らせまします由、其聞えあり、思ひ定め給ふべし」と云ふ。「珍しくも思ひ定め候べきか。」申すにや及ぶ」とぞ申しける。元來剛なる時致が、重忠には勇められ、いよいよ今宵を限りとぞ定めける。かねてより思ひ定めし事なれども、さし當りての「〇一本のナシ」心細さ思ひ遣られて無慙なり。日暮れ君井出の屋形へ入り給ひしかば、國國の大名、小名、御供してぞ歸りける。曾我兄弟も人竝竝に柴の庵へぞ歸りける。

屋形廻りの事

道にて十郎が「〇一本がナシ」申す様、「吾殿は屋形へ歸り給ふべし、二人連れては人も怪しく思ひなん、祐成ばかり行きて、屋形の案内見て歸らん」とて、太刀ばかり持たせ、屋形屋形を廻りけり。思ひ思ひの幕の紋、心の屋形の次第、なかなか言葉も及ばれず。ここに二つ木瓜の幕打ちたる屋形あり。誰が幕やらん。是は我等が家の紋なり、御敵と成り亡びぬ。伊東と名乗「告」る者無ければ、此幕打つべき者無し、誰なるらんと不思議にて立ち寄り、幕の物見より見入れければ、敵左衛門が屋形なり。是は如何に、彼等は一つ木瓜の幕をこそ打つべきに、心得ぬものかな。まことや人人にあらず、しる「〇一本しか」を以つて人とし、家家にあらず、いづくを以つてか家とす、繼ぐべきをば繼がで、すするなる曾我の某と呼ばれぬる上は、家の

紋いるべからず。祐經はまことやらん、我が先祖の知行せし所領を知るに由つて、斯様に成り行くものをや。あはれ昔は斯様に無かりしものと、見入れて通りけり。

祐經が屋形へ行きし事

斯くて祐經が嫡子の「〇一本のナシ」犬房、祐成を見付けて、「只今十郎通り候。」左衛門聞きて、「玉の井の十郎か、横山の十郎か」と問ふ。「曾我の十郎殿」と云ふ。「是は祐經が屋形にて候、立ち寄り給へ」と云はせければ、祐成少しも憚らず、屋形の内へ入り見給へば、手越の少將は左衛門尉が君と見えたり。黄瀬川の龜鶴は、備前國吉備津宮の王藤内が君と見えたり「〇一本て」。嫡子犬房に酌取らせ、酒盛しけるをりふしなり。幾程の榮華なるべき、今宵の夜はに引き換へん事の無慙さよと思ひながら、座敷にぞ直りける。祐經敷皮を去りて、「これへ」と云ふ。十郎「斯くて候はん」とて押し退け居たり。祐經が初對面の詞ぞ強かりける。「まことや殿原は祐經を敵とのたまふなる、ゆめゆめ用ひ給ふべからず、人の讒言と覺えたり。さし當る道理に任せて、人の申すも理なり。伊東は嫡嫡なる間、祐經こそ持つべき所なるを、而面の祖父伊東殿横領し、一所をも分けられざりしかば、一旦は恨むべかりしを、第一養父なり、第二叔父なり、第三烏帽子親なり、第四に舅なり、第五に一族の中の長者なり、一方ならざるに由つて堪へて過ぎしに、是は唯だ高きに望み登らざれ、賤しきを謗り笑はざれと云ふ本文を捨てて、我等をみんぐわい「〇員外カ」に

思給ふ故なり。面々の父河津殿、奥の狩場の歸りに討たれ給ひぬ、磯師多き山なれば、丘越しの矢にや當り給ひけん。又は伊豆駿河の人人多く打寄り、相撲取りて遊び給ひけるに、股野の五郎と勝負を争ひ、當座に喧嘩に及びしを、御寮の御成敗に依り静まりぬ。然様の宿意にても討たれ給ひけんを、在京したる祐經に掛けて申されけるなれども更に知らず。あまつさへ祐經が郎等ども數多失ひぬ。其時分やがて對決を遂げたりせば残るべかりしを、幾程無くして當御代と成りて、面親しき人人皆御敵とて長らへ給はぬ。ただ祐經一人に成りて、終に此事さんだん「沙汰ノ音便カ、今算段ト書クト同ジ語カ」せずして止みぬ。然ればただ祐經が爲たるに成りて年月を経候。これ不祥と云ふも餘りあり、よく聞き給へ十郎殿。「祐成聞きて、兎角云ふに及ばず、ただ謹んで居たり。「是れなる客人をば知り給ふにや。」「今日初めて見參に入り候へば、如何で見知り奉るべき。」「あれこそ備前國吉備津宮の王藤内とて、然る人なるが、今年七年君の御不審を蒙ぶり、所領召されて有りつるを、此三が年祐經取り次ぎ申しつる間、御免を蒙ぶり所領に安堵して、蒲原まで上り給ひしが、祐經に名残惜まんとて歸り給ふ。斯様に他人だにも申し承れば親しく成るぞかし。まして殿原と祐經は、從兄弟甥と云ふ者なれば、今は親とも思ふべし。便宜然るべく候はば上様へ申し入れ候ひて「〇一本候ひてナシ」、奉公をも申し、一所をも賜りて、馬の草飼所をばし給へ。殿原が祐經が思ひ奉る様には思ひ給はじ。北條へは常に越えて遊び給へども、何を恨みてか更に伊豆へは見え給はず。しもたてぬ賢人顔せんよりも、我等「〇一本我我」に睦びて若き者共に背かれずして座せ。面々の馬の様を見るに瘦せ弱

り候、伊東に馬ども數多候へば、乗りつけて乗り給へ。なまじひに人の云ふ事に附いて祐經討たんと思ひ約はん事、今生にては協ふまじ、曾我殿原」とぞ「〇一本ぞナシ」廣言しけるが、如何が思ひけん、言葉を替へて云ひけるは、「酔狂の餘り、言失仕ると覺えたり。今より始めて互の遺恨を止めて、親子の契りたるべし」とて、杯取り寄せ、客人なればとて王藤内に始めさせ、その杯珍しきとて十郎に差す。その杯少將に差す。その杯を祐經に差す。その杯を十郎に差す。酒を八分に受けて思ひけるは、憎き敵の廣言かな。身不肖なり、何事か有るべきと思ひこなし、初對面にさんざんに言ひつるこそ奇怪なれ。此君共が耳こそ東八か國の侍の聞くところ。日比は親の敵、只今は日の敵、襖に衣を重ねても逃すべきにあらず。受けたる杯敵の面に打ち掛けて一刀刺し、如何にも成らばやと、千度百度進めども、心を替へて思ふ様、待て暫し、兄弟と云ひながら、祐成と時致は、父の敵に心ざし深くして、一所にてとも斯くにもと契りしに、心逸りの儘に祐成如何にも成るならば、五郎空しく擽め捕られ、怨みん事こそ不便なれ。ここは堪ふる所と思ひ静めて止まりしは、情深くぞ覺えける。左衛門尉は神ならぬ身の悲しさは、我に心を懸くるとは夢にも知らずして、「十郎殿、杯は如何に乾し給はぬ。御前達數多ましますせば、看待ち給ふと覺えたり、今様を誦ひ給へ」と云ひければ、二人の君扇拍子を打ちながら、蓬萊山には千年経る、千秋萬歳重なれり。松の枝には鶴巢くひ、巖の上には龜遊ぶ。と云ふ一聲を返し、二遍までこそ誦ひけれ。其時杯取り上げて、三度までこそ乾したりけれ。其土器

祐經乞うて、「方方は何か思ひ給ふらん知らねども、今日よりして親子の契約あるべし。あの小童奴を弟と思食され、汝も兄と思ひ奉れ。他人の悪しからんは恨みにあらず、親しき中の疎きをば、神明も憎み給ふ事なれば、今より後互に憚りあるべからず。この杯賜はりて祝ひ候はん。但し所望候ぞや、十郎殿は亂拍子の上手と聞けども未だ見ず、一番舞ひ給へ。一つは客人の爲め、一つは祐經が祝のあやにく如何があるべき。御前達面白く候べし、早早」と促めければ、犬房唯ぞ立てたりける。祐成子細に及ばずして、持ちたる扇さつと開きて、「君が住む龜尾が山の瀧つ瀬は」と云ふ一聲を揚げて、暫し舞ひけるが、千千に心を通はして、とやせん斯くやせましと思ひ亂るる舞の手に、夜更けば入るべき道づたひ、つがひ外さん長舞に、此處より入り彼處より廻らん。彼處は詰り、此處は通路、忍びて入らば音は立たじ、入るとも知らじ差す腕、袖の返しに目を遣ひ、半時ばかりぞ舞うたりける。座敷に連なる人人は、見知る印の無き儘に、興を催すばかりなり。君どもを始めとして、唯すも覺えぬ風情なり。斯くて十郎舞ひ入りければ、祐經、杯思ひ返しとて十郎に差したりければ、十郎取り上げ三度乾して、扇取り直し、畏まつて申しけるは、今宵は是れに御宿直申したく候へども、北條殿に申し合する子細候、何様明日参りて常宿直申すべしと、暇乞うて出でにけり。祐成案者第一の男子にて、敵何とか云ふらんと思ひ、小柴垣に立ち隠れ聞く事は知らで、王藤内、「此殿原の父をば眞に討ち給ひけるか」と問ふ。左衛門尉聞きて、「今は彼等が聞かばこそ。以前具さに申しつる様に、我等嫡孫にて持つべき所領を、彼等が祖父に横領せられぬ。某が在京ながら、田舎

の郎等どもに申し付けて、彼等が父河津の三郎と云ひし者を討たせしなり。人もや然ぞ知りて候らん。此輩どもの子孫は皆謀叛の者、君に失はれ奉り、今祐經一人に罷り成る。然れども君不便の者に思食され、「〇一本し先祖の所領拜領の上は、祐經に狭められ、思ひながらぞ候らん。彼が此比の分限にて祐經に思ひ掛からんは、蟻娘が斧を取つて隆車に向ひ、蜘蛛が網を張りて鳳凰を待つ風情なり、哀れなる」とぞ申しける。王藤内聞きて、「それこそ僻事よ、世に在る人は所領財寶に心が留まり、思ふ事は滞るなり。然れば寸の金を切る事無し。貧なる侍と鐵とは侮つらぬものをや。何とやらん悪しき様に仰せつる時には、頻りに目を掛け奉り、刀の柄に手を掛け片膝押し立てつる時、事出で來ぬと見えしが、然れども色には出ださず、好き兵かな」とぞ譽めたりけり。左衛門尉これ聞き、「何程の事か仕るべき。龍は眠りて本體をあらはさず、人酔ひて本心をあらはす。思ふ事こそ云はれ候へ。恒河沙は盡き、螢の火にて須彌は焼くるとも、討たる事あるべからず、南無阿彌陀佛」とぞ申しける。後に思ひ合すれば、是れや最後の念佛と哀れにぞ覺えし。十郎斯く云ふを立ち聞きて、即ち屋形の内へ走り入り、如何にも成らばやと思ひしが、五郎に憂身の惜まれて、ただ空しく歸りける、心の中こそ無慙なれ。そもそも只今の言葉ども、よくよく思へば、ただ王藤内が云はする言葉なり。今宵は落ちば落さんと思ひつれども、今の言葉の奇怪なれば、一の太刀には左衛門、二の太刀には王藤内と思ひ定めて、屋形よりこそ歸りけれ。

屋形の次第五郎に語る事

五郎、兄を待ちかねて、心許なくして佇みける處へ、十郎來りて、「如何に待ち遠なるか。」五郎聞きて、「然らぬだに人を待つは悲しきに、疎かに思食すものかな。」「祐成も然存するを、敵左衛門が屋形へ呼び入れられ酒をこそ飲みつれ。」「然て如何に便宜悪しく候ひけるか。」「云ふにや及ぶ。亂舞の折節、あはれと思ひしかども、御分一所にこそと存じて、堪へつる心ざし、推量り給へ。」五郎も聞きて、「御ふち〔扶持カ〕は然る事にて候へども、是程寄り付かずして心を盡す。便宜好く候はば御討ち候ふべきものを、然りながら一太刀づつ、ともどもに斬りたく候ぞかし。其屋形の様御覽じ候ひけるにや。」「其爲めの案内は善く見置き候ひぬ、但し屋形の數多くして、見知りたる人は所所にこそ候ひつれ。扇開きてこそは數へけれ。先づ君の御屋形に竝べて打ちたりしは、北條の四郎時政、御一門には、一條、板垣、逸見、武田、小笠原、南部、下山、山名、里見の人人、石山、山形、梶原、屋形を竝べて候なり。東には、和田、畠山、黒戸、姉崎、本田、榊澤、池延、兒玉、小澤、山口、丹野、横山、きいの兩黨、岡部、榊澤、金子、村山、村岡、なかさや、折原、比企、中條、みたむろの人人、屋形を竝べて候。常陸國には、佐竹、山内、志田、とう、近嶋、行方、こく、宍戸、森山、ちちばの殿原、下總國には、千葉常胤、相馬次郎諸胤、けしの三郎種盛、こくばの五郎胤道、たうの六郎胤兼、葛西三郎清重、大猿嶋、大原、小原、屋形を竝べ候なり。上野國には、伊

北、伊南、鷹北、鷹南、印藤、金岡、小寺、深須、山上、大越、大室、上總國には、桐生、黒川、汗後、片山、新田、園田、玉村、安房の國には、安西、金丸、東條、信濃國には、内藤、片桐、黒田、周防、齋藤、村上、井上、高梨、海野、望月、屋形を竝べ候なり。下野國には、小山、宇都宮、結城、長沼、氏家、鹽谷、木村、皆川、足柄、まのだの人人、屋形を竝べ候ひぬ。相摸國には、座馬、本間、土屋、愛甲、土肥の次郎父子、糟屋の藤五、澁谷、佐藤、秦野右馬丞、岡崎、三浦の人人、伊豆國には、入江、齋科、木津川、船越、大森、桂山、遠江國には、石泥、清水、三河國には、設樂、中條、尾張國には、大宮司、宮四郎、關の太郎、美濃國には、高嶋、松井、近江國には「〇一本高嶋以下ナシ」山本、柏木、たつる、錦織、佐佐木黨、屋形を竝べ候なり。當番の人人には、結城七郎、川越、高坂、大胡、大室、難波の太郎、上總介父子、屋形を竝べしなり。坂東八か國海道七か國のみにあらず、三年の大番、訴訟人と云ふ程の者の屋形雲霞の如くなり。然て君の御座所をば眞中に、四角四面に瑠璃を延べ、五十九間に飾られたり。面面思ひ思ひの屋形造、いろいろの幕の紋、金銀を鑲めてこそ飾られけれ。凡そ屋形の數二萬五千三百八十餘軒なり。總じて上下の屋形の數、十萬八千軒を竝べてこうじをやり、薨を竝べて打ちたりけり。東に添うたるは梶原平三景時、西のはづれば左衛門尉祐經が屋形なり、幾程とこそ思ひけん。」五郎聞きて、「客人は何處の國の如何なる人にて候ひける。」「備前國の住人吉備津宮の王藤内、手越の少將、黄瀬川の龜鶴を竝べ置きて、酒盛半なりしに呼び入れ、祐成も舞を舞ふ程の事なりつるに、面に當てて廣言ども爲つる無念さよ。一刀刺し、如何



にもと思ひけれども、吾殿に命が惜まれて、手に握りたる敵を逃しつる。「〇一本こそアリ」無念なれ。「五郎聞きて、「是れや寶の山に入りて「〇一本でナシ」手を空しくする風情なり、嬉しくも御堪へ候ものかな、餘し候べきにも候はず、南無阿彌陀佛」とぞ申しける。

曾我物語 卷第九

和田の屋形へ行きし事

「來つて暫くも留らざるは有爲轉變の悟り、去りて再び歸らざるは冥土黄泉の別れなり。愛傷戀慕の悲み、今に始めぬ事なれども、日本國に我等ほど物思ふ者あらじと案するに、劣らず歎きをする者の有るべきこそ不便なれ。」五郎聞きて、「誰やの者か我等に勝りて候べき。」「然ればこそとよ、備前の王藤内が七年御不審蒙ぶり、此度安堵の御下文を賜はると云ふ「〇一本給はりし」使先に下り、斯くと云はば國に留まる親類集り悦び合はん處に、又人下りて、討れぬと云ふならば、然こそ歎かんずらん」と、深き言葉を案するに、人として能ある者は天の加護に由り、人として財ある者は、歎きに由ると見えたり。然れば「王藤内助けばやとは思へども、雑言餘りに奇怪なれば、祐成に於ては餘す可からず、御分も漏すな」と申しければ、「承る」とぞ申しける。「斯くて夜の更けんほど待たんも遙かなり、いざや和田殿の屋形へ行き最後の對面せん。」「然るべし」とて二人打連れ、義盛の屋形へぞ行きける。やがて義盛出で合ひて、「如何に殿原達、遙かにこそ存ずれ。狩座の體これが初にてぞましますらん、何とか思ひ給ひけん、まことに見物には上や有るべき。」十郎扇笏に取り直し畏まつて、「然ん候、斯様の事は珍しき見物、末代の物語に、あの冠者に見

せ給はん爲め、二三日の用意にて罷出で候が、餘りの面白きに斧の柄の朽つるを忘れ、曾我へ人をこして候。其程と存じ参りて候」と云ひければ、和田聞きて、何條其儀あるべき、日比の本意を遂げんとするが、一家の見果てに、義盛に今一度對面せんとぞ來りぬらんと、哀れに思ひければ、「然ぞ思すらん、數多度見て候だにも面白く候、まして若き人人の初めて見給はんに然ぞ思食すらん。嬉しくも來り給ふものかな、かねてより知り奉りなば、初めより申すべかりつるものを」とて、酒取り出だし勸めけり。杯二三度廻りて後、和田のたまひけるは、「相構へて、爲ば善くし給へ、爲損じなば一家の耻辱なるべし、後楯には成り申すべし、頼もしく思ひ給へ」とて、杯差されけり。折節梶原源太屋形の前を通りけるが、斯く云ふを聞き、「何事ぞや和田殿、曾我の人人に爲ば善くせよと仰せられつる、不審なり、御耳にや入り候べき」と云ふ。和田殿聞きて、こは如何に、曲者通りけるよ。然りながら陳じて見んと思ひければ、「自然の物語何と聞きて、御分御耳に入れんとはのたまふぞ。此面而我に親しきこと、上にも知食されたり。それに付きては御狩と承り、必ず召は無けれども、末代の見物に忍びて御供仕り候。若き者の習ひ、黄瀬川にて女共と遊び候ひしが、君相澤の御所に御入の由承り、急ぎ参り候ひし間、引出物をせず候、歸りに何にても取らせんと申し候間、道の者は耻かしきぞ、引出物せば善くせよ、爲損じなば一家の耻ぞと申しつるが、此事ならでは何申したりとも覺えず、急ぎ御申し有りて義盛失ひ給へ」と高聲なりければ、景季も、「一興にこそ申し候へ、何とて和田殿は某に逢ひ給へば、由無き事にも角を立ててのたまふらん、是れは苦しからぬ」とて

空笑して通りけり。猶も和議の者にて、何とか云ふと思ひ「〇一本思ひナシ」暫し佇む。是れをば知らで和田殿のたまふは、「水を善く泳ぐ者は埋れ、〇おぼれカ」馬に善く乗る者は落ち、日は晝中に移る、月は滿つるに傾ぶく、昊天に踟躕まれ、厚地に抜き足せよと有るをや。此者は十分に過ぎて如何がぞと覺ゆる。」五郎これを聞き、「御ちんぼうを用ひず通るものならば、何程の事すべき」〇一本何程以ナシ、しや細首振ち切つて捨て候べきを」と申しければ、梶原立ち聞きて、まことや此者は朝比奈にみぎは勝りの大い、迂愚の者と聞きたり。此處にて事爲出だし勝負せんよりも「〇一本もナシ」、上様へ申し上げ、我力も入らで失はんこと、易かるべしと思ひ定めて、聞かざる由にて通りけり。和田のたまひけるは、「今暫くも候ひて細かに」〇一本こまかにナシ」物語申したけれども、源太と申す曲者が御前に参りつるが、如何様にか申し上げ候はんずらん。相構へて爲損じ給ふな」と云ひ置きて、和田は御前へぞ参られける。此人人は屋形に歸り、夜の更くるを待ちけるが、稍ありて十郎申しけるは、「件の梶原が御分が」〇一本の」云ひつる事を立ち聞きけるが、如何様大勢にて寄せぬと覺ゆる。屋形を替へん」と云ひければ、五郎聞きて、「源太はどの奴何十人も候へ、一一に切り伏せなん」と申す。十郎聞きて「〇一本でナシ」、「身に大事さへ無くは云ふに及ばず、但し某に任せ候へ」とそのたまひ「〇一本申し」ける。

## 兄弟屋形を變へし事

斯くて兄弟の人人は柴の庵を引き拂ひ、思はぬ所へ寄り居つつ、時を待つこそ哀れなれ。是れをば知らで源太百餘人の兵を引き連れて、人人の屋形へぞ押し寄せたる。然れども人無かりければ、「日本一の不覺人」斯様に有るべしと思ひしに違はず、人にては無かりけり」と高言して歸りしは、迂愚がましくぞ見えし。是れや鼠深く穴を掘りて群鳥の害を遁れ、鳥高く飛んでさうめいの害を遠ざけるとは、斯様の事なり。あやし「〇一本あやふ(危)」かりし事どもなり。

## 曾我への文書きし事

然ても兄弟の人人は、更け行く夜はを待ちかねて、十郎云ひけるは、「いざや此際に幼少より思ひし事を委しく文に書きて、曾我へ参らせん。」「然るべし」とて、おのおの文をぞ書きける。我等五つや三つの年より、父の討たれにしこと忘る隙無くて、七つ九つと申せしに、月の夜に出でて、雲井の雁金を見て父を戀ひ、明くれば小弓に小矢を取り添へて障子を射通し、敵の命に準らへ、彼を討たん事を願ひ泣き「〇一本なげき」しを、母の制し給ひしこと、また父の戀しき時は、一間所にて二人は語りて慰めども、人人には云はざりしなり。祐成は十三にて元服し、五郎は十一より箱根に上り塚間せしに、十二月の末つ方に、里里より衣裳着物取り添へ取り添へ世の稚子達には送れども、箱王が里よりは贈り物も無し、まして父の文も無し。明暮父を戀しく思ひて、權現へ参り、敵を見んと祈りしに、程無く御前にて祐經を見初めしこと不思

議なりとて、法師に成るべかりしを、此事に由りて、唯だ一人夜に紛れて曾我へ逃げ下りしなり。男に成りて母の勘當蒙ぶりし事、又打出でし時、互の形見賜はり参らせ置きて出でしこと、信濃の御狩に徒にて下り狙ひしこと、虎に契りを籠めしこと、鞍子川、湯坂の峠、箱根寺、大崩までの有様、矢立の杉にての事「〇一本杉の事」ども、今の様に覺えたり。思ふ事ども委しく書き、命をば父に回向申し、讀誦の經文「〇一本御經」は母に手向け奉る。親は一世の契りとは「〇一本はナシ」申せども、これを形見にて來世にて「〇一本はアリ」参り逢はんと、同じ心に書き留めければ、大きな巻物一つ宛ぞ書きたりける。十郎が言葉の末、五郎に異りたるは、大磯の虎が事なり。五郎が言葉の十郎に異りたるは、箱根の別當の事なり。然ては何れも同じ文章なり。哀れにこそは覺えけれ。

## 鬼王、だう三郎曾我へ返しし事

然て鬼王、だう三郎を呼びて、「汝「〇一本はアリ」急ぎ曾我へ歸るべし。小袖をば上へ参らせよ、馬鞍は曾我殿に奉れ。自然の時は御先途に代り参らせ候べき由、随分心に掛けしを、父の敵に心ざし深くして、先立ち申すこと無念に存じ候へども、恐れながら二人の子供の形見に御覽候へ。五つ三つよりして、左右の御膝にて育てられ参らせし御恩、忘れ難くこそ存じ候へ。肌の守と鬢の髪をば、弟共の形見に御覽じ候へとて、二宮殿に参らせよ。弓と矢は汝に取らすぞ、亡き後の形見に見候へ。鞭と弓懸をば二人の乳母が方へ

遣るべし。沓行藤は守り育てし二人が守に取らせよ。夜もこそ更くれば、是れを持つて落ち候へ」と有りければ、二人の者共忍びの形見を受取りて申しけるは、「我等相摸を出でしより、自然の事候はば、君より先に命を捨て、暫く三途の御供とこそ存じ候に、下郎をば命惜む者と思食し、斯様に承り候か、唯だ召具せられ候へ。ゆゆしき御用にこそ立ち申さずとも、心ざしばかりの御供」と申しければ、十郎聞きて「おのおのが思ひ寄る所誠に神妙なり、斯様なる者共を、世に無ければ恩をもせて離れん事こそ無念なれ。浮世の中何事も思ふ様ならば、如何で協はぬ事あらん。主君は三世の縁あり、來世にて此恩をば報ずべし。唯だ此の形見どもを悉く曾我へ届けたらん」〔〇一本にナシ〕は、最後の供に勝りなん。狩場に事出で來ぬと聞えなば、物思ふ子持ち給へる母の、我が子供やらんと歎き給はん、急ぎ参りて此由斯くと申すべし。今少しも疾く急げや」と有りければ、だう三郎承つて、「歸り候まじ、聞食せ、君をば乳の内より某こそ取り上げ奉りては候へ。然れば九夏三伏の暑き日は扇の風を招き、玄冬素雪の寒き夜は、衣を重ねて肌を温め參らせ、膽心も盡し育て、月とも星とも明暮は、見上げ見下し頼み奉り、御世にも出でさせ給ひ候はば、誰やの者にか劣るべきと、頼もしくも、いとほしくも思ひ奉り、今まで影形の如く付き添ひ參らせたる驗に、情無くも落ちよと承る。たとひ罷り歸りて候とも、千年萬年を保ち候べきか。唯だ御供に召具せられ候へ」とて、稚き子の親の跡を慕ふ如くに、聲も惜まらず泣き居たり。兄弟の人人も、心弱くぞ見えける。如何にもして歸すべきものをと、聲を高くして、「如何に未練なり、君臣の禮獻し難けれども、心に従ふを

以つて孝行とせり。其上終に添ひ果つまじき身なれば、名残の惜しきこと盡くべきにあらず。急ぎ出で候へ」とて、荒らかにこそたまひけれ。鬼王居直り、畏まつて申しけるは、「某も母の胎内を出で、竹馬に鞭を當てしより君に付き添ひ申し、成人の今に至るまで、片時も離れ奉る事無し。其驗にや落ちよとの仰せこそ、誠に御怨めしくは候へ。捨てられ參らせて後、何に懸かりて片時の長らへも有るべき。憂き身の果こそ悲しけれ」と、さめざめと泣き居たり。誠に心ざし深く馴染の久しければ、互に語り給へば、憂きに付けても、夜や明け日や暮れん。「すでに明方も〔〇一本もナシ〕近く成るものを、急げや汝等、早くも行け」と重ね重ね促めければ、二人の者共云ひかねて、御供申すべき命何處も同じ事よ。住み果つべき終の住家、後れ先だつ道芝の、變らぬ露の濡れ衣、拂ひて御供申さんとて、二人が袖を引違へ、既に刀を抜かんとす。時致早くも座敷を立ち、二人が間に押し入つて、涙と共に云ひけるは、「誠に汝等が心ざしは切なり、然りと云へども、我我これ程様を變へ制するを聞かで、狼藉を致すものならば、淺間大菩薩も御照贖候へ、未來永劫不孝すべし。我等に命を捨つると云ふとも、故郷へ形見を届けずは、永く心ざしに受くべからず。此上は制するに及ばず」と、荒らかにこそ叱りけれ。飽かぬは君の仰せなり、次第の形見を賜はつて、曾我へとこそ歸りけれ。互の心の中、然こそは悲しからめと、思ひ遣られて哀れなり。

## 悉達太子の事

斯くて鬼王、だう三郎は、次第の形見賜はり、泣く泣く曾我へぞ歸りける。是れや悉達太子の、十九にて菩提の心ざしを起し、檀特山に入り給ひしに、車匿舍人、騫特駒を賜はり、王宮へ歸りし思ひ、今更思ひ知られたり。鞍の上空しき駒の口を引き、故郷へとは急げども、心は後にぞ止まりける。五月雨の雲間も知らぬ夕暮に、何處を其所とも知らねども、其方ばかりを顧みて、涙と共に歩みけり。心の中ぞ無慙なる。

兄弟出で立つ事

然ても此人人は、郎等共はこしらへ返しぬ、今は思ひ置く事無し、いざや最後の出で立ちせん。然るべしとて、十郎が其夜の出で立ちには、白き帷子の腋深く掻きたるに、群千鳥の直垂の袖を結びて肩に懸け、一寸斑の烏帽子懸を強く懸け、黒鞆巻赤銅造の太刀をぞ持ちたる。同じく五郎が装束には、袷の小袖の腋深く掻きたるを狩場の用意にや爲たりけん、唐貨布の直垂に、蝶を二つ三つ所に書きたるに、紺地の袴の括り緩らかに寄せさせ、袖をば結びて肩に懸け、平紋の烏帽子懸を強く懸け、赤木の柄の刀を差し、源氏重代の友斬肩に打懸け、誠に進める姿、ふきうが昔とも云ひつべし、頼もしとも餘りあり。十郎松明振り上げて、「此方へ向き候へや時致、飽かぬ顔見ん」と云ふ。五郎聞きて、敵に逢ひ刹那の際も有るまじければ、是れこそ最後の見參の爲めなるべし。誠に祐成を兄と見奉らんも今ばかりと思ひければ、兄が顔をつつくと守りけり。十郎も又弟を見んも是れを限りと思ひければ、松明差し上げ、つくづく見、涙ぐみけり。互

屋形屋形の前にて咎められし事

此處に座間と本間と屋形數十軒向ひ合ひてぞ打ちたりける。かの兩人が郎等、鑓を數多處に焚かせ、木戸を結び重ね、辻を固め、通るべき様無かりけり。如何がせんと休らふを見て、「何者ぞ、是程に夜更けて通るは。殊に其體事がましく出で立ちたり。怪しや、通すまじ」とぞ咎めける。「苦しからぬ者なり、是れも用心の態、人をこそ咎むべけれ。」「いや、誰にてもまませ、五つ打ちて後協ふべからずとの御説なり。通すまじき」とぞ支へける。十郎打向ひて、「御咎あるまじき者なり、是れは土屋殿より愛甲殿への御使なり。通し給へ」と云ひければ、「然らば通せ」と許しけり。此處をば過ぎぬれど、未だ幾つの木戸、幾重の關、警護をか通るべき。事煩かしきをりふしかなど、足早に行きけるに、千葉介が屋形の前をぞ通りける。此處にも木戸をきぶく立てて、番装束の警護の者數十人、是も鑓を焚きてぞ固めける。「何者なれば是程夜更けて通らん、遣るまじき」とぞ咎めける。五郎打寄りて「御内方の者なり、苦しからず」とて打寄り、木戸を押し開く。「おへへて通るは様あり、我等が知らぬ人あるまじ、御内方とは誰なるらん、苗〔名〕字を名乗〔告〕れ」と

ぞ咎めける。「我等は苗字も無き者なり、通し給へ」と云ひければ、「御内方へとは虚言なり、やはか通る」と廣言して、木戸を荒くぞ押し閉てたる。五郎は木戸を閉てられて、大に怒つて云ひけるは、「苦しからねば通るなり、苦しき者の振舞を見よ、これこそ然る所へ強盗に入る者よ、止めんと思はん奴原は組み留めよ、手には懸けまじきものを」と云ひければ、番の者共これを聞き、夜半の兵士は何の用ぞや、斯様の狼藉静めん爲めなり、打止めよと追つ駆けたり。五郎も、「心得たりや、事し、掛かりて見よ」と云ふ儘に、太刀取り直し待ち掛けたり。十郎少しも騒がず、静静と立ち歸り、「是は更に苦しからぬ者にて候、應南殿より應北殿へ大事の御物具の候を取りに参り候が、夜深に候間、人を連れて候へば、若き者にて酒に酔ひ候ひて雑言申し候、唯だ某に御免候へ」と、打笑ひてぞ云ひたりける。御免と云ふに勝に乗り、「然ればこそとよ、不審なり、其儀ならば事易し、應南殿へ尋ね申す可し、其程待ち給へ」とぞ怒りける。十郎聞きて、斯かる笑事こそ無けれ、然りながらも陳じて見んと思ひければ、此者共怒りける其中へ、ながながと立ち交はり、「御分達我をば見知り給はずや、應南殿の御中にて彌源次、彌源太とて兄弟の厭の者なり。何時ぞや宇都宮殿北山への「〇一本のナシ」御出での時見参に入り候ひし「〇一本入りたりし」をば、忘れ給ひ候や」と云ふ。其中に大人しき雑色歩み出で、十郎が顔をつくつくと守りけり。祐成彼奴は怖しと思へば、松明少し側へ廻し、眼を少し眇めて居たりけり。此者共よくよく守りて、誠に思ひ出だしたり、片瀬より關戸へ御歸りに参り逢ひたる様に覺ゆるぞや。十郎、事こそ好けれと思ひければ、「然ぞとよ殿原、其時の酒盛には

座敷の一の狂人ぞかし、忘れ給ふか」と云ひければ、「げに其人にてましましけり、殿は人をばのたまへども、二王舞をば爲給はぬか。」傍なりける男が、「是程の知音にてましますや、御使なるに、急ぎ通し給へ」と云ふ。「あはれ濁酒一桶あらば、如何なる御使なりとも、得手の二王舞を所望申さぬか、一番見たし」と云ひければ、十郎聞きて、「同じ心にて候、然りながら後日に参り逢はん」とて、側目に掛けてぞ通りける。此者共打寄りて、「誤りけん、通り給へや、人人」とて、木戸を開きて押し出だす。兄弟の人人は罅の口を逃れたる心地して、十郎云ひけるは、「斯様の處にては如何にも降を乞ふべきに、御分の雑言心得ず。孔子の言葉をば聞き給はずや、事を見ては勇むこと勿れ、大事の前に小事無しとこそ見え候へ。身ながらも善くこそ陳じぬれ、是れや富樫那の辯舌にて、波斯匿王の憤を止めけるも、今に知られたる」とぞ申し合ひける。

## 波斯匿王の事

ももそも富樫那の辯舌にて匿王の怒りを止めける由來を尋ぬるに、昔釋尊靈山にて法を説き給ひしに、波斯匿王、聞法結縁の爲めに参らせられたり。富樫那尊者と申すは、辯舌第一の佛弟子にてましましけり。然れども匿王の臣下の子なり、教法に心を染めて、匿王の方をだに見遣り給はざりける「〇一本り」。匿王怒りを成して云はく、然ても尊者は自ら佛前に在りつるを、終に其れとだにも見られざりつる奇怪さよ。」此

間參らん時は其色見すべし」とて、高臣數相具し、怨敵を含みて參られける時、富樫那尊者は路中にて行き違ひ給ひ、「如何に尊者、何處へ」とのたまふ。尊者聞き給ひて、殊の外に恭敬して、過ぎにし佛の御説法の時、君參り給ひしかども、法門歡喜の砌、身を忘れ他を知らざりし事なれば、其禮更に無かりしなり。匿王は未だ心ぞく残り、是非にたづさはり給ひき。それ亦道理無きにあらず。御憤黙し難し、王宮よりの御企、然ぞと知られて急ぎ參りたり。誠に此道理辨へ給ふにや。眞如禪定の時は、無二亦無三と説れてこそ候へ。然るに於きて自も無く他も無く、法界平等なり。何者か有りて、邪とも又正とも隔てん。萬法一如にして、阿字不生の願を成し給へ」と示し給ひければ、匿王猶しも邪に入つて、自らが言葉徒らに成りて、無禮に等しく候べきにや、いよいよ怒りを高くして、尊者の理に受けん「〇一本が」はず、これ一重に驕慢瞋恚の外道と、あさましく覺えけれ。其時富樫那、「にやくいしきたんかいをんしむしやうくが、斯様の人は正に邪道を行じて、如來を見ること協ふべからずとこそ説かれて候へ。色に耽る言葉に尋ねんは、むじやうしはく、かんかんと見えたるをや。」匿王猶承つて、「其難は誰か致しける。」其心に歸りて尋ね給へど、外には無しとのたまひける所に、匿王一理を受けて、恭敬禮拜して佛果に「〇をか」成じ給ふ。即ち尊者引具し、靈山に參り給ふ。げにや本文に、私の心ざしを忘れ、まことの苦行に由つて、波斯匿王も方便の教化に由れる。返へす返へす私無しとこそ示されてこそ候へ。但し梶原と云ふ曲者の屋形の前如何がすべき。我等を見知りたる者なり。然れども歸るべき道にもあらず、浮沈ここに極れり、運に任せよ」とて通る。案の如く辻固めの武士數十人、長道具立て竝べ、誠に嚴しく見えたり。爲ん方無くして、「南無三所權現助け給へ」と念じて、知らぬ様にて通りけり。然れば神慮の御助にや、咎むる者も無かりけり。「すはや好きぞ」とこそやきて、足早にこそ通りけれ。只事ならずとぞ見えける。

## 祐經屋形を更へし事

既に祐經が屋形近く成りて此所ぞと云へば、打うなづき、既に屋形へ入らんと爲ける時、十郎弟が袖を控へて「〇一本でナシ」、「我我敵に打逢ひなば、刹那の隙も有るまじ、今こそ最後の際なれ、心靜かに念佛せよ」と云ひければ、「然るべし」とて、兄弟西に向ひて手を合せ、「臨命終の佛達、親の爲めに回向する。迎へ取り給へ」と祈念して、屋形の中へぞ入りにける。然れども王藤内が申す様に隨ひ、祐經思はぬ所に屋形を更へたりければ、唯だ空しく土器踏み散らして、一人も無かりけり。是れは如何にと松明振り上げ見れば、屋形も同じ屋形、座敷も宵の所なり。人は多く臥したれども、晝の狩場に疲れ、酒に酔ひ臥しければ、誰そと咎むる者も無し。此人人は力無く屋形を立ち出でて、天に仰ぎ地に俯し、悲みけるぞ道理なる。「敵に縁無き者を尋ねるに我等には過ぎし、今宵は然りともと思ひしに、餘しぬこそ口惜しけれ。斯様に有るべしと知るならば、曾我へ人をば返すまじきものを、然無きだに世間に披露せられんこそ悲しけれ。自害して失せなん」とて立ちたりけれ。

## 祐經討ちし事

然る程に兄弟の人人は敵は討ち洩しつ、憚れて立ちたる處に、秩父殿の御内なる本田の次郎親經、具足差し固め、夜廻の番なりしが、庭上に「今宵も餘しけるよ」と、小聲に云ふ音しけり。如何様伊豆駿河の盜賊の奴原にて有るらん、討ち留め高名せんと思ひ、太刀の鏝元二三寸透し、足早に歩み寄りけるが、心を變へて思ふ様、一定曾我の殿原の日比の本意を遂げんとて夜晝附廻りつるが、然様の人にもやと、障子の隙より忍びて見れば、案にも違はず、兄弟は敵の更へたる屋形を知らず、憚れてこそは居たりけれ。痛はしく思ひ、左衛門尉が臥したる屋形の妻戸を密かに押し開き、何とも物をば云はずして、扇を出だして招きたり。五郎此由きつと見て、本田が我等を招きつるは様こそ有れと思ひ、松明脇に引き側め、廣縁につと上がり、「何事ぞや本田殿」とささやきけれ「〇一本ささやけ」ば、本田小聲に成りて、「夜陰の苗字は詮無も、波に揺らるる沖つ船、知邊の山は此方ぞ」と、云ひ捨ててこそ忍びけれ。「其所とも知らぬ夜の浪、風を頼りの湊入、心あるよ」と戯れて、屋形の内へぞ入りにける。兄弟俱に立ち添ひて、松明振り上げ善く見れば、本田が教へに違はず、敵は此所にぞ臥したりける。二人が目と目を見合はせ、四邊を見れば人も無し。左衛門尉は手越の少將と臥したり。王藤内は疊少し引き退けて、鶴鶴とこそ臥しにけれ。十郎敵を見付けて、弟に云ひけるは、「吾殿は王藤内を斬れ、祐經をば祐成に任せよ」とぞ「〇一本こそ」のたまひ「〇一本言ひ」ける。

時致聞きて、「疎かなる御詞かな、我我幼少より神佛「〇一本佛神」に祈りし事は、王藤内を討たん爲めか。此者は逃げば逃すべし、立て逢はば斬るべし。祐經をこそ千太刀も百太刀も心の儘に斬るべけれ。早斬り給へ、斬らん」とて、勇み掛かりて立ちたりけり。果報めでたき祐經も、無明の酒に酔ひぬれば、敵の入るをも知らずして、前後も知らずぞ臥したりける。二人の君どもをば衣に押し巻き、疊より押し下ろし、「汝聲立つな」と云ひて、松明側に差し置き、十郎枕に廻りければ、五郎は後にぞ廻りける。二人の君共初めより知りたりけれども、餘り恐ろしさに音もせず。兄弟の人人は、祐經を中に置きて、おのおの目と目を見合せ、打らなづきて喜びけるぞ哀れなる。三千年に一度花咲き實なる西王母が園の桃、優曇華よりも珍しや、優曇華をば拜みて手折ると云ふなれば、それに譬ふる敵なれば、拜みて斬れや、拜みて「〇一本拜みてナシ」斬れと喜びけり。然て「〇一本斬れとてトノミナリ」、二人が太刀を左衛門尉に當てては引き、引きては當て、七八度こそ當てにけれ。稍ありて時致、此年月の思ひ、唯だ一太刀にと思ひつる氣色顯れたり。十郎これを見て、「待て暫し、寢入りたる者を斬るは死人を斬るに同じ、起さんものを」とて、太刀の切先を祐經が心もとに指し當て、「如何に左衛門殿、晝の「〇一本のナシ」見參に入りつる曾我の者共參りたり。我等程の敵を持ちながら、何とて打解け臥し給ふぞ。起きよや、左衛門殿」と起されて、祐經も、「好かりけり、心得たり、何程の事あるべき」と、云ひも果てず起き様に、枕元に立てたる太刀を取らんとする所を、「優しき敵の振舞かな、起しは立てじ」と云ふ儘に、左手の肩より右手の脇の下、板敷までも通れとこそ



は斬り付けけれ。五郎も「得たりや、おう」と罵りて、腰の上手を差し上げて、疊板敷斬り通し、下もちま  
でぞ打入りたる。道理なるかな、源氏重代友切、何者か堪るべき。當るにところ「○一本とところナシ」續く  
所無し。「我れ幼少より願ひしも是れぞかし、妄念拂へや時致、忘れよや五郎」とて、心の行く行く三太刀  
づつこそ斬りたりけれ。無慙なりし有様なり。

王藤内を討ちし事

斯くて後に臥したる王藤内、寝おびれて、「詮無き殿原の夜討の戲かな、過し給ふな、人違ひし給ふな、  
人人をば見知りたり、後日に争ふな」とは云ひけれども、刀をだにも取らずして、高道にしてぞ逃げたり  
ける。十郎追つ騙けて、「晝の詞には似ざるものかな、何處まで逃ぐるぞ、餘すまし」とて、左の肩より右  
の乳の下掛けて二つに斬つて押し退けたり。五郎走り寄り、左右の高股二つに斬りて押し退けたり。四十餘  
の男なりしが、時の間に四つに成りてぞ失せにける。「○逃げば一本ニアリ」逃すべかりつる「○一本し」も  
のを、搦伏しては逃げずして、なまじひなる詞云ひて四つに成るこそ無慙なれ。五郎、王藤内が果を見て、  
一首取り敢へず詠みたり。

馬は吠え牛は嘶くさかさまに四十の男四つに成りけり

十郎聞きて、「善く仕りたり、一期詠じても是程こそ詠み候はんずれ、秀歌に於いては時致、集にも召されな  
ん。思ふ本意をば遂げぬ、今は憚ること無し」と高聲に言ひ散し、どつと笑ひて出でにけり。

祐經に止めを刺す事

然ても兄弟は敵を心の儘に討ちて、門より外に出でけるが、十郎云ひけるは、「祐經に止めを刺しけるか、  
止めは敵を討つての法なり、實檢の時止めの無きは敵討ちたるに入らず。」然らば止めを刺し候はん」と  
て、五郎立ち歸り、刀を抜き取つて押へ、「御邊の手より賜はつて候刀ぞかし、只今返しぬるぞ、確かに受け  
取り給へ、取らずと論じ給ふな」とて、柄も拳も通れ通れと刺す程に、餘りに繁く刺しければ、口と耳と一  
つに成りにけり。然てこそ後に人の申しけるは、「宵に悪口せられし其嫉たに、わざと口を裂かるる」とぞ  
申しける。幼少より敵を見んと箱根に祈請申し、御前にて祐經を見初むるのみならず、一腰の刀を得たり、  
今止めを刺したる刀是れなり。權現の御恵とて感じける。さすがに離れぬ一門の中、哀れとや思ひけん、「我  
れ過去の宿業と云ひながら、一念の瞋恚に由り敵味方とは隔たるなり。慚愧懺悔の力に由り、六根の罪障  
を消滅し、因果の輪廻を只今盡し果てて、一念の菩提心誤り給はで、一つ運の縁と成し給へ、阿彌陀佛」と  
回向して、屋形をこそは出でたりけれ。十郎は庭上に立ちて、五郎を待ち得て云ひけるは、「我我名乗〔告〕りて  
人人に知られん。」尤も」とて大音聲にて罵りけり。「遠からん人は音にも聞け、近からん者は目にも見よ、  
伊豆國の住人伊東の次郎祐親が孫、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致とて兄弟の者共、君の屋形の前にて、

親の敵、一家の工藤左衛門尉経を討ち取り罷り出づる。我と思はん人人は、討ち止め高名せよ」と云へども、晝の狩場に疲れければ音もせず。小柴垣の下に跡り寄り、猶聲を擧げて呼ばはりけれども、東西南北に音もせず。三浦の屋形には、かねてより知りたれば、わざと出づる者も無し。次の屋形に聞き付けて、坂西、赤澤、柏原を始めとして、宗徒の者共出でんとする所を、重忠聞き、「餘りな騒ぎぞ、一定曾我の人人が本意を遂ぐると覺えたり。如何に嬉しく思ふらん、心静かに善くさせよ。然らぬだに若き者は心騒ぎて爲損ずる事ありぬべし。静まり候へ」と有りければ、出づる者こそ無かりけれ。兄弟の人人は暫し休らひ、敵を待てども無かりければ、十郎云ひけるは、「いざや時致、一先落ちて今一度母に逢ひ奉り、思ふ事をも語り申し、猶事延びば鬻切り、如何ならん野の末、山の中〔〇一本奥〕にも閉ぢ籠り、父の孝養をもせん。それ協はずは心静かに念佛申し、自害するまで」と云ひければ、五郎聞き、餘りの憎さに音もせず。稍ありて、「此仰せこそ條條然るべしとも覺えず候へ。弓矢取る者の習ひには、假初にも一足も逃ぐると云ふこと口惜しき事にて候。命の惜しき者こそ入道をもし、山林に閉ぢ籠り候はんずれ。幼少より思ひし事は遂ぐるなり、何事を思ひ残して落ち候べき。母に對面のこと、科を懸け奉るべき爲めか。然せる孝養報恩〔〇一本をアリ〕こそ送らざらめ、科も無き母痛められ、子供の行き方知らぬ事あらじとて責め問はれ、禁獄死罪にも行はれば、我等が出ださずして協ふまじ。なまじひに逃げ隠れ居て、彼處此處より擗め出だされ、あまつさへ諸國の侍共、幾程の命惜みて曾我の者共が鬻切り乞食をすと、沙汰せられん事は耻かし、其上一

日隠れ得たりと云ふとも、東は奥州外の濱、西は鎮西鬼界が嶋、南は紀伊地能野山、北は越後の荒海までも、君の御息の及ばぬ所あるべからず。天に翔り地に入らざらん程は、一天四海の内に、鎌倉殿の御權威及ばざる事無し。唯だ羅網の鳥、つり〔〇はり〕〔釣〕ノ訛〕を含む魚の如し、眞實の仰せとも覺えず。時致に於きては、向ふ敵あらば、太刀の目釘堪へん程は、命こそ限りなれ」と申しければ、十郎聞きて、「吾殿が心見んとてこそ云ひたれ、祐成が心をもかねてより知りぬらん、一足も引き候まじき」と語らひて、寄する敵をぞ待ち掛けたり。

## 十番斬の事

然る程に夜討の時、恐ろしさに聲も立てざりし二人の君共が、「御所中に狼藉人ありて祐經も討たれたり、王藤内も討たれたる」と、聲聲にこそ呼ばはりければ、鎧、甲、弓矢、太刀、馬よ、鞍よと、ひしめき周章つる程に、具足一領に三三人取付きて引き合ふ者もあり、駿馬に乗りながら打ちあふる者もあり、某彼れがしと罵る音は、ただ六種震動にも劣らず。稍ありて武者一人出で来て申しけるは、「何者なれば我が君の御前にて、斯かる狼藉をば致すぞ、名乗〔告〕れ」とぞ云ひける。十郎打向ひて、「以前名乗〔告〕りつれば定めて聞きつらん、斯く云ふ者は如何なる者ぞ。」「是れは武藏國の住人大樂の平右馬之允」と名乗る。祐成聞きて、「鬻蕪は入る物を同じくせず、鬻蕪は鬻を交へず、我等に逢ひて斯様の事は過分なり。是れこそ曾我の者共

と、敵討つて出づるぞ、止めよ」と云ひて追つ駈けたり。右馬之允詞には似ず撥ふつ「〇ふいノ訛」て逃げにけるが、押付のはづれに胛骨かけて打ち込まれ、太刀を杖に撞き引き退く。二番に是等が姉御横山黨愛甲の三郎と名乗つて押し寄せたり。五郎打對ひ云ひけるは、「紫燕は柳樹の枝に戯ぶれ、白鷺は蓼花の蔭に遊ぶ。斯様の鳥類までも己れが友にこそ交れ、御分達相手には不足なれども、人を選ぶべきにあらず。時致が手並の程を見よ」とて、紅に染まりたる友切眞甲に差し挿し、電の如くに飛んで掛かる。協はじとや思ひけん、少しひるむ處を、進み掛かつて討ちければ、五郎が太刀を受け外し、弓手の小腕を打落されて引き退く。三番に駿河國の住人岡部の三郎、十郎に走り向ひて、左の手の中指二つ打落されて逃げけるが、御所の御番の内に走り入り、「敵は二人ならは無く候、甚くな騒ぎ候ひそ」と申しければ、「神妙に申したり、いしくも見たり」とて、高名の御意にぞ預りける。四番に遠江國の住人原の小次郎斬られて引き退く。五番に御所の黒彌五と名乗り押し寄せ、十郎に追つ立てられ小鬘斬られて引き退く。六番に伊勢國の住人加藤の彌太郎攻め來つて、五郎が太刀を受け外し、二の腕斬り落されて引き退く。七番に駿河國の住人船越の八郎押し寄せ、十郎に高股斬られて引き退く。八番に信濃國の住人海野小太郎行氏と名乗りて、五郎に渡り合ひ、暫し戦ひけるが、膝を割られて犬居に伏す。九番に伊豆國の住人宇田の小四郎押し寄せ、十郎に打ち合ひけるが、如何がしけん、首討ち落されて、廿七歳にて失せにけり。十番に日向國の住人臼杵の八郎押し寄せ、五郎に渡り合ひ、眞向割られて失せにけり。此次に阿波國の住人安西の彌七郎と名乗つて、「敵は何處に在るぞや」

とて立ちけるが、十郎打向ひて、「一人は優しくも面も振らで討死したるは見つらん、愚人は銅を以つて鏡とす、君子は友を以つて鏡とす、引くな」と云ひて討ち合ひけり。彌七も然る者なり、「左右にや及ぶ」と云ひも敢へず飛んで掛かる。十郎足を踏み違へ、側目に掛けて、ちやうど打つ。肩先より高紐の端へ切先を打込まれ、引き退くとは見えしかど、それも其夜に死ににけり。比しも五月二十八日の夜なりければ、闇さは闇し、降る雨は車軸の如くなり。「敵は何處に在るぞや」とて走り廻る所を、小柴垣に立ち隠れて、出づるをちやうど斬りては蔭に引き籠り、向ふ者をばはたと斬る。斬られて引き退く者を後陣に受取りて、味方討する所もあり。二人の者共呼ばはりけるは、「武藏相摸の逸者共は如何に。是れも重代是れも重代と思ふ太刀と刀の鐵の程をも見せよかし。敵は十人あり二十人あると後日に沙汰するな。我等兄弟ばかりぞ、火を出だせ、其明にて名乗り合はん。無下なる者共かな」と呼ばはりければ、御殿の舎人時武と云ふ者、傘に火を付けて投げ出だす。是れを見て屋形屋形より我劣らじと雜人の義笠に火を付けて投げ出だす。二千軒の屋形より松明を出だしければ、萬燈會の如し、白晝にも似たり。彼等二人は素肌にて敵に逢はんと走り廻る有様、小鷹の鳥に逢ふが如し。斯かる處に武藏國の住人新開の荒四郎と名乗り掛けて、進み出でて申しけるは、「敵は何十人も有れ某一人にや越ゆべき。出で會へや、對面せん」と云ひたりける。十郎打向ひて、「優しく聞ゆる者かな、大將に代りて仕へる者は必ず其陣を破るとは、文選の言なるをや。引くな」と云ひて飛んで掛かる。言葉は主の耻を知らず、「御免あれ」とて逃げけるを、十郎繁く追つ驅けたり。餘りに逃所無くして小柴

垣を破りて、高這にして逃げにけり。次に甲斐國の住人に「〇一本にナシ」市河黨に、別當の次郎進み出でて申しけるは、「如何なる白痴なれば、君の御前にて斯かる狼藉をば致すぞ、名乗れ、聞かん」と云ふ。五郎申しけるは、「事新しき男の間ひ様かな、曾我の冠者原が親の敵討ちて出づると幾度云ふべきぞ。臆して耳が潰れたるか。親の敵は陣の口を嫌はず、然て斯様に申すは誰人ぞ、聞かん」と云ふ。「是れは甲斐國の住人市河黨の別當の大夫が次男、別當「〇一本べつ」の次郎定光」とぞ答へける。五郎聞きて、「吾殿は盗人よ、御坂片山つるばんどうに籠り居て、京鎌倉に奉る年貢御物の兵士の少なきを、遠矢に射て追ひ落し、片山里の下種人の立て逢はざるを夜討などにし、物取る様は知りたりとも、耻ある武士に寄り合ひ、晴の戦せん事は如何でか知るべき。今時致に逢ひて習へ、教へん」とて、踵り掛かり打つ太刀に、高股斬られて引き退く。是等を始として、兄弟二人が手に掛けて五十餘人ぞ斬られける。手を負ふ者は三百八十餘人なり。數出づる松明も、一度に消えて元の闇にぞ成りにける。人は多く有りけれども、此人人の氣色を見て、此處や彼處に群立つて、寄する者こそ無かりけれ。

## 十郎が討死の事

やや暫く有りて、伊豆國の住人に新田の四郎、十郎に打向ひ、「如何に曾我の十郎祐成か。」「對ひは誰ぞ。」「新田四郎忠常よ。」「然ては御分と祐成は正しき親類なり。」「其儀ならば互に後ろばし見するな。」「左右

にや及ぶ。今宵未だ尋常なる敵に逢はず、言甲斐無き人の郎等の手に掛からんと心に掛かりつるに、御邊に逢ふこそ嬉しけれ。一家の敵に同じくは、忠常が手に掛けて、後日に勸賞に行はれ給はば、御邊の奉公と思ひ給へ」と云ひて打ち合ひける。十郎が太刀は少し寸延びければ、一の太刀は新田が小脇に當り、次の太刀にて小鬘を斬られけり。然れども忠常究竟の兵なれば、面も振らず、大音聲にて罵りけるは、「伊豆國住人の新田の四郎忠常、生年二十七歳、國を出でしより命は君に奉り、名をば後代に留め、屍は富士の裾野に暴す。然りとも後ろは見すまじきぞ、御分も引くな」と云ふままに、互に鎧を削り合ひ、時を移して戦ひけるに、新田四郎は新手なり、十郎は宵よりの疲武者、多くの敵に打ち合ひて腕下がり、力も弱る。太刀より傳ふ血の糊に手の内繁く廻りければ、太刀を平めて討ちければ、十郎が太刀、鏢元より折れにけり。忠常勝に乗つて討つ程に、左の膝を斬られて、犬居に成りて腰の刀を抜き、自書に及ばんとする所を、忠常太刀取直し、右の脇の端を指し通す。忠常今は斯うと思ひ、屋形を差して歸りけるを、十郎伏しながら掛けたる言葉ぞ無慙なる。「や殿、新田、何處へ行くぞ、情無し、同じくは首を取つて上の見參に入れよ。親しき者の手に掛からんは本意ぞかし、返せや殿、忠常」と呼ばられて、げにもと思ひけん、すなはち立歸り、乳の間斬りて押し伏せたる。祐成が最後の言葉ぞ哀れなる。「五郎は何處に在るぞや、祐成こそ新田が手に掛かり空しく成るぞ。時致は未だ手負ひたるとも聞えず、如何にもして君の御前に參り、幼少よりの事ども一一に申し開きて死に候へ。死出の山にて待ち申すべきぞ、追つ付き給へ。南無阿彌陀佛」と云ひも果てず、生年廿二

歳にして、建久四年五月二十八日の夜半ばかりに、駿河國富士の視野の露と消えにけり。弓箭取る身の習ひ、今に始めぬ事なれども、親の爲めに命を軽くし、屍は路邊の岐に捨つれども、名をば龍門の雲井に揚ぐる、哀れと云ふも疎かなり。五郎は兄が最後の言葉を聞きて、死骸なりとも今一目見んと思ひ、又忠常を討つべきと思ひけん、太刀振り廻し、大勢の中を斬り分けて走り寄り、兄が死骸に轉ひ掛かり、「恨めしや、時致をば誰に預け置き、何處まで生きよとて、捨てては何處へおはするぞや。長らへ果つべき憂身にもあらず、連れてましませや」と打口説き、涙に咽びて伏したりけり。げにや同じ兄弟と云ひながら、互の心ざし深ければ、別れの涙然ぞあるらんと推量られて哀れなり。ここに又堀の藤次と名乗りて武者一人出でて、「五郎は何處へ行きたるぞや、兄が討たるを見捨てて落ちけるかや、未練なり」と尋ねける。五郎此詞を聞きて起き上がり、太刀取り直し、「や殿、藤次殿、兄の討たるを見捨てて何處へか落つべき。祐成は新田が手に掛かりぬ、時致をば吾殿が手に掛けて首を取れ、惜まぬ身ぞ」と云ひければ、藤次は五郎が太刀影を見て、掻伏して逃げにける。五郎追つ馴け、「汝は何處まで逃ぐるぞ」と追つ馴ければ、餘所へ逃げては協はじと思ひけん、御前さして逃げにけり。五郎も續いて入りければ、親家幕を擱んで投げ上げ、御侍所へ走り入り、五郎も幕を投げ上げて、親家を擱まん擱まんと思ひけるよそはひは、ただ天魔の如く、雷の落ち掛かるかとぞ覺えける。

## 五郎召捕らるる事

ここに五郎丸とて、御寮の召し使ふる童あり。元は京の者なりしが、叡山に住して、十六の年師匠の敵を討ち、在京協はで東國に下り、一條の次郎忠頼を頼みたりしに、忠頼御敵とて討たれ給ひて後、此君に参りたりしが、究竟の荒馬乗の剛の者、七十五人が力を持ちけり。宵の程は夜討と云へども音もせず、御前近く祇候せしに、五郎が親家を追うて入るを見て、薄衣引き被ぎ幕の傍に立ちけり。五郎は「〇一本はナシ」一目見たりけれども、屋形を出でし時、女房に手ばし掛くるなど、兄が云ひし言葉ありければ、太刀の背にて通り様に一太刀當ててぞ過ぎにける。五郎丸と知るならば唯だ一太刀に失はんと、危くこそ覺えけれ。時致も親家を手捕にせんと思ふ所を、五郎丸我前を遣り過し、續いて掛かる腕をくはへて取り、「得たりや、おう」と抱だきける。五郎は大力に抱だかれながら物ともせず、「こは如何に、女にては無かりけり、物物しや」と云ふままに、續いて内へぞ入りにける。五郎丸協はじと思ひけん、「敵をば斯うこそ抱だけ、斯様にこそ抱だけ」と高聲なりければ、彼等が傍輩、相摸國の前司太郎丸走り寄り、「逃すな」と取り付く。其後御厩の小平次を始めとして、てがらの者ども走り出でて、四五人取り付きけれども、五郎は物ともせず、二三人をば蹴倒し、大庭へ踊り出でんと心ざしけるが、板敷堪へずして五郎は足を踏み落し、立たんとする所に、小平次起き上がり、左右の足に取り付きければ、其外の人人「餘すな、漏すな」とて、か

なぐり附く。是れや文選の言葉に、百足虫は死に至れども戯ふれずとなり。心は猛く思へども、多勢に協はずして、空しく搦め捕られけり。無慙なりし有様なり。君も此由聞食して、糸毛の御腹巻に御重代の鬚切抜き、出でさせ給ひける所に、相摸國の住人、大友左近之將監が嫡子に一法師丸とて、生年十三に成りけるが、御前去らぬ者なるが、小賢しく御寮の御袖を控へ奉り、「日本國をだにも君は居ながら從へ給ふに、是れは僅なる事ぞかし、如何様若き殿原の醉狂か、又は女の杯論か、宿論か、何れにてか候はんに、御座ながら尋ね聞食され候へ」と止め申しければ、げにもと思食しけん、止まり給ひけり。然しも出でさせ給ひて、五郎に見えさせ給ふものならば、危くぞ覺えける。後には「〇一本はナシ」彼の「一法師いしくも申したりとて、御恩賞にぞ預りける。誠に古き言葉を見るに、大ざうとうけいに遊ばず、君子はふんしにかかはらずと云ふ事、今こそ思ひ知られたれ。其後小平次御前に参り畏まりて申し上げけるは、「曾我の五郎を搦め捕りて候、十郎は討たれて候」と申したりければ、「神妙に申したり、五郎をば汝に預くるぞ」と仰せ下されける。哀れなりし次第なり。

曾我物語 卷第十

五郎御前へ召出だされ聞食し問はるる事

然ても仰せを承つて小平次罷り出でて、御殿の下部、總追國光、五郎を預り、既に御殿の柱に縛り付けて、其夜は守り明しければ「〇一本ける」、「大將殿より尋ね聞食さるべき事あり、曾我の五郎連れて参れ」との御使ありければ、小平次細取にて参りけるを、母方の叔父、伊豆國の住人「〇一本にアリ」、小川三郎祐定申しけるは、「如何に小平次、侍ほどの者に縛付けずとも具して参れかし。山賊海賊の輩に有らざれば逃げ失すべきにあらず。事に由り人にこそ由れ、無下に情無し」と云ひければ、五郎聞きて、「誰一言の情を残す者の無きに、御分の芳志の嬉しさよ。然りながら御分、時致に親しき事、皆人知れり。斯様の身「〇一本の身ナシ」に成りて親類入るべからず。詮無き沙汰して人に聞かれ、方人したりと云はれ給ふな。人の上を善く云ふ者は無きぞとよ。時致は、盜強盜せざれば、千筋の繩は付くとも耻ならず、是れは父の爲めに讀み奉りし法華經の紐よ」とて、事とも思はざる氣色して、御坪の内へぞ引き入れられける。「其上敵の爲めに捕はるる者時致一人にも限らず、股湯は夏臺に囚はれ、文王は差里に囚はる。更に耻辱に有らず」とて打笑ひてぞ居たりける。哀れと云はぬ者ぞ無き。五郎御前に参りければ、君御覽ぜられて、「これが曾我の五

郎と云ふ者か。」某がごと候よ」とて立ち上り、繩取中に引き立てければ、警護の者共、狼藉なりとて引き据ゑたり。其時相摸國の住人新開荒四郎實光、伊豆の國の住人狩野介宗持、座敷を立つて、「申し上ぐべき事あらば急ぎ申し候へ」と云ふ。時致聞きて、大の眼を見出だして彼等をはたと睨みて、「見苦しきぞ入人、御前遠くは然も有りなん、近ければ直に申すべし。然様なれば問はれて申す白狀に似たり、問はるるに由つて申すまじき事を申すにあらず、面骨折りに退き候へ」とて、あざ笑ひてぞ居たりける。君聞食され、「神妙に申したり、おのおの退き候へ、頼朝直に聞くべし」と仰せ下されけり。然て五郎居直り、顔振り上げて高らかに申しけるは、「兄にて候十郎が最後に申し置きて候、我等が父を祐經に討たせ候ひしより以來、年月狙ひし心中、如何ばかりとか思食され候。其れに付き候ひては、一年君御上洛の時、酒匂の宿より付き奉り、祐經が御供して候ひしを、泊泊に徘徊し、便宜を窺ひ候ひしかども、協はで京に上り、四條の町にて鐵善き太刀を買ひ取り、昨夕の夜半に御前にて本意を遂げ候ひぬ。今は何をか思ひ残して、命惜しく候べき。御恩には今一時も、疾く頭を刎ねられ候へ」とぞ申しける。彼は京へは上らざりしかども、箱根の別當に契約せし故、太刀の出所をも隠し、又は別當の罪科もやと思ひて、斯様にぞ申したりける。君聞食され、「此太刀の出所隠さん爲めにこそ申すらん、更に別當の咎にあらず。先祖重代の太刀、箱根の御山に籠めし由、かねてより傳へ聞く。如何にもして取り出ださばやと思ひしを、神物に成る間、力及ばざりつるに、只今頼朝が手に渡る事、偏に正八幡大菩薩の御計らひと覺えたり、斯様の事無くては如何にし

て再び主に成るべき」とて、自ら御頂戴ありて、錦の袋に入れ深く納め給ふ。御重寶の其一つなり。代代に「〇一本にナシ」傳はりけるとかや。やや有りて、君仰せられけるは、「此事曾我の父母に知らせけるか。」五郎承つて、「日本の大將軍の仰せとも存じ候はぬものかな、當代ならず、何れの世にか、繼子が悪事企てんとて暇乞ひ候はんに、神妙なり、急ぎ僻事して、我惑ひ者に成せとて喜ぶ父や候べき。又母の慈悲は山野の獸類、江河の魚鱗までも、子を思ふ心ざしの深き事は、父には母勝れたりとこそ申し候へ。況や人界に生を受けて、二十歳餘の子共が、命死なんとて母に知らせ候はんに、急ぎ死にて物思はせよとて、喜び出だし立つる母や候べき。御景迹」とぞ申しける。然て「親しき者どもには如何に。」「身貧にして、世に在る人人に斯くと申し候はんは、唯だ手を捧げて是れを縛らせ、首を延べて是れを斬れとこそ申し候はんずれ、誰かは頼まれ候べき。疎かなる御説かな」とぞ申しける。君げにもとや思食しけん、「父母親類に至る迄も子細無し。又祐經は、伊豆より鎌倉へ繋ぐ通ひしに、道にては狙はざりつるか。」「然ん候、此四五か年の間、足柄、箱根、湯本、國府津、酒匂、大磯、小磯、砦上が原、もろこし、相摸川、懷嶋、入的が原、腰越、稻村、由井の濱、深澤邊に徘徊し、野路、山路、宿宿、泊泊にて狙ひしかども、敵の連る時は四五十騎、連れざる時も二三十騎、我我は連る時は兄弟二人、連れざる時は唯だ一人、思ひながらも空しく今まで延び候ひぬ。」又「祐經は敵なれば限り有り、何とて頼朝がそぞろなる侍共をば多く斬りけるぞ。」「それこそ理にて候へ、御所中に參りて、斯かる狼藉を仕つる程にては、千萬騎にて候とも、餘さじと存

ずる所に、小賢しく、敵は何處に在るぞと尋ね候間、公には忠を盡し、忠には命を捨つる習ひ神妙に存じて、是れに在りと申す聲に驚きて、足の立處も知らず逃げ候ひし間、罪造りと存じて追うて斬り殺すに及ばず、ただほう「○一本かう」計りの側太刀、形の如く當てたる迄にて候、表傷は餘も候はじ、只今召し出だして御覽候へ」と申しければ、やがて御使して聞食されけるに、申す如く表傷は無かりけり。面目無うぞ聞えける。又「王藤内を何とて討ちけるぞ。」「恐入つて候へども、年比の傍輩の討たれ候を、見捨てて逃ぐる不覺人や候べき、誠に健氣に振舞ひ候ひつるものをや。人富みて故郷に歸らざるは、鏢を著て夜行くが如しと云ふ古き言をや知りたりけん、所領安堵の印、本國に下りしが、祐經に暇乞とて道より歸りての討死、不便なり」とぞ申しける。此言葉に由り、「神妙なり、これも頼朝が先途に立ちけるよ」とて、「本領子孫に於て子細無し」と、重ねて御判下されけり。是れも兄の十郎が屋形を出でし時、王藤内が妻子然こそ歎かざらん、無慙なりしと云ひし言葉の末にぞ申しける。偏に時致が情に由つて所領安堵す、有難しとぞ感じける。稍ありて、「頼朝をも敵と思ひけるか」と御尋ねありければ、五郎承つて、「然ん候、身に思ひの候ひし時は木も葺も怖ろしく、命も惜しく存じ候ひしが、敵討つての後は、如何なる天魔授神なりとも存じ候。まして其外は活きたる者とも思ひ候はず。然れば千萬人の侍よりも、君一人をこそ思ひ掛け奉りしかども、御果報めでたき御事に渡らせ給へば、御運に壓されて、斯様に罷り成りて候」と申したりければ、君聞食されて、「敵討つての後、身を軽く思ふは道理なり、頼朝をば「○一本ばナシ」何とて敵と思ひけ

るぞ。」「自業自得果とは存じ候へども、伊東入道が謀叛に由り、我等が本領永く絶えぬ、先祖の敵にては渡らせ給はずや。又は閻魔王の前にて、日本の大將軍鎌倉殿に手に掛け奉りぬと申さば、一つの罪や赦さるべきと、随分窺ひ申しつれども」と申す。「然て五郎丸には如何にして抱だかれけるぞ。」「それは彼童を女と見成し、何事か候はんと存じて、不慮に捕られて候。斯様なるべしと存ずるものならば、唯だ一太刀の勝負にて候はんずるものをとて、後悔益無し、これ偏に宿運の盡きぬる故なり。げにや羅網の鳥は高く飛ばざるを恨み、呑釣の魚は餌を忍ばざるを歎くとは、ようらの言なるをやと「○一本とナシ」、今こそ思ひ知られたれ。君の御佩刀の鐵の程をも見奉り、時致が腐太刀の双の程をも試し候はんものを」と、言葉を放ちてぞ申しける。君聞食され、「猛將勇士も運の盡きぬる上は」と仰せられ、雙眼より御涙を流させ給ひて、「これ聞き候へ人人、日比は思はぬ事なれども、只今頼朝に問はれて、當座の構への言葉なり、協はぬまでも遅れんとこそ云ふべきに、露ほども命を惜まぬ者かな、世に在りなば思ひ止まることも有りぬべし、餘の侍千萬人よりも、斯様の者をこそ一人なりとも召し使ひたけれ。無慙の者の心やな、惜しき武士かな」とて、御袖を顔におし「○一本おしナシ」當てさせ給ひければ、御前祇候の侍共、心あるも無きも、皆涙流さぬは無かりけり。稍ありて君御涙をおさへさせ給ひて、然て十郎が振舞ひを聞食すに、「何を分きて云ひ難し、誠に討たれたるやらん」と仰せられければ、「新田に御尋ね候へ、黒鞘巻に赤銅作の太刀、村千鳥の直垂ならば、誠に候」と申す。然らば實檢あるべしとて、新田の四郎を召されけれ



ば、黒鞆巻に赤銅作の折太刀、村千鳥の直垂に頸を包みて童に持たせ、五郎が弓手の方を間近く、頸を見せてぞ通りける。五郎は今までは「〇一本はナシ」思ふ事無く高言して在りけるが、兄が頸を一目見て、瞳を失ひ、涙に咽ぶ有様は、盛りなる朝顔の、日影に萎るる如くにて、無慙と云ふも餘り有り。稍ありて申しけるは、「羨ましくも先き立ち給ふものかな、同じ兄弟と申し「〇一本言ひ」ながら、幼少より親の敵に心ざし深くして、一所とこそ契りしに、祐成は昨夜夜半に討たれ給ふに、時致は心ならず、今まで長らふる事の無念さよ。誰れか此世に長らへて候べき、死出の山にて待ち給へ、やがて追ひ付き奉り、三途の川をば手に手を取り組み渡り、閻魔王宮へは諸共に」と、云ひも果てず涙に咽びけり。袖にて顔をも押へたけれども、高小手手に縛められければ、右手へ傾ぶき、左手へ俯ぶき、猶しも溢るる涙をば、膝に顔を持たせつつ、唯さめざめと泣き居たれ「〇一本り」。和田、畠山を始めとして、皆袖をぞ濡らされける。斯かる所に十郎が佩きし「〇一本はきしナシ」太刀を御侍に取り渡し、「善きぞ、悪しきぞ」と申し合ひけり「〇一本る」。中にも昨夜追つ立てられて、小「〇一本て小ナシ」柴垣を破りて逃げたりし新開の荒四郎實光、進み出でて申しけるは、曾我の者共は、敵討つて高名は爲たれども、太刀こそ悪き太刀を持ちたれ、是程のえせ太刀を持ちて、君の御前にて斯かる大軍しける不思議さよ」と云ひければ、時致聞きて、眼を見出だし、荒四郎をはたと睨んで、「吾殿は何處を見て其れをえせ太刀とは申すぞ、只今御前にて申して無用の事なれども、男の悪き太刀持ちたるは耻なる間申すなり。其れこそ、や殿善く聞け、平家に聞えし新中納言の

太刀よ。屋嶋の合戦に如何がし給ひけん、船中に取り忘れ給ひしを、曾我の太郎取つて、九郎判官へ參らせしを、義經、神妙なり、然りながら、御分高名して取りたる太刀なれば、汝に取らすると賜はりたる太刀なり。奥州丸と云ふ太刀これなり。祐成が元服せし時、曾我殿の賜びたるぞとよ。それに就きては思ひの儘に敵を討ち取りぬ、兄弟して斬り留むる者、一二百人こそ有るらん、是程堪へたる太刀を、如何でえせ太刀なるべき。」實光猶も止らで、「既に太刀折れぬる上は」と云ひければ、五郎からからと打笑ひ、「人の太刀悪しと云ふ人、定めて善き太刀は持ちぬらん、但し、あのえせ太刀に追はれて、小柴垣「〇一本をアリ」破りて逃げしは如何に。御分の善き太刀も心にくからず」と云ひければ、聞く人皆汗を流さぬは無かりけり。實光なまじひなる事を云ひ出だし、赤面してぞ立ちにける。これや三思一言思慮あるべきにやとぞ申しける。

## 犬房が事

ここに祐經が嫡子犬房とて、九つに成りける童あり。御前去らぬ切り者にてぞ有りける。傍にて父が事をよくよく聞き、さめざめと泣き居たりしが、思ひやかかねけん、走り掛かり、五郎が顔を二つ三つ扇にてぞ「〇一本ぞナシ」打ちける「〇一本り」。時致打笑ひ、「汝は祐經が嫡子犬房な、其年の程にて善くこそ思ひ寄りたれ。打てや、打てや、打つべし、打つべし、犬房よ。我我も幼少にして汝が親に父を討たせぬ、年比の思

ひ如何ばかりぞや、今更思ひ知られたり。まことに古りにし事を思へば、打つ杖は痛まずして、弱る親の力を歎きし心ざし、五郎が今に知られたり。「打たるるをば痛まずして「〇一本してナシ」、主が心を思ひ遣る五郎が心ぞ「〇一本思ひやるこそ」哀れなる「〇一本れ」。「珍しからぬ事なれども、果報ほど勝劣あるものは無し。我我祐經を思ひ掛けて、此二十餘年の春秋を送りしに、汝はいみじき生れ性かな、昨夜討ちたる親の敵を、只今心のままに討つ事の羨ましきよ。それに付きても前生の宿業こそ拙けれ、現在の果を見て未來を知る事なれば、來世また如何ならん、南無阿彌陀佛」とぞ申しける。犬房は猶も打たと寄りけるを、「如何にや、退き候へ」と、繩取の者共云ひけれども退かざりけり。御寮御覽せられて、「犬房退き候へ、猶物間はん」と仰せられければ、其時退きけり。是れや禽鳥百を數ふると云へども一鵲に如かず、數星相連ると云へども一月に如かず、君の御詞一つにてぞ退きに「〇一本にナシ」ける。

## 五郎が斬らるる事

然て其後君仰せられけるは、「汝が申す所一一に聞き開きぬ、然れば死罪を「〇一本をナシ」宥めて召使ふべけれども、傍輩これを嫉み、自今以後狼藉絶ゆべからず。其上祐經が親類多ければ、其意趣遣れ難し。然れば向後の爲めに汝を誅すべし、怨みを残すべからず。母が事をぞ思ひ置くらん、不便に當るべし、心安く思ひ候へ」とて、御使召寄せ、曾我の別所二百餘町を、彼等兄弟が追善の爲めに、頼朝一期、母一期と、

自筆に御判を下され、五郎に戴かせ、母が方へぞ送られける。げにや心の猛く情の深きこと人に勝るるに由り、屍の上の御恩有難しと皆人感じける。これや文選の言に、晉の文王「〇公カ」は其仇を親みて諸侯をさとり、齊の桓公は其仇を用ひて天下を正すとは、今の御代に知られたり。五郎委しく承りて、「首を召されんに於ては遁るる所無し、暫くも長らへ申さんこと深き愁へと存すべし。母が事は辱なく仰せ下され候へども、故郷を出でし日より一筋に思ひ切り候ひぬ。御恩に一時も疾く首を召され候へ。兄が遅しと待ち候べし、急ぎ追ひ付き候はん」と進みければ、力無く、御殿の小平次に仰せ付けられ斬らるべかりしを、犬房が「親の敵に候」とて、ひらに申し受けければ渡されにけり。口惜しかりし次第なり。祐經が弟に伊豆の次郎祐兼と云ふ者あり。五郎を請け取りて出でにけり。時致東西を見渡し、「某が姿を見ん人人は、如何に迂愚がましく思ふらん。然りながら親の爲めに棄つる命、天神地祇も納受し給ふべし。附けたる繩は孝行の善の綱ぞ、おのおの寄つて手を掛け結縁し給へ」と申しければ、げにもと云はぬ人ぞ無き。其後五郎をば、はますかに連れて、松が崎と云ふ處の岩間に引き居る斬らんとす。時致見返り申しけるは、「構へて善く斬り候へ、人もこそ見るに、悪しく斬り候はば、悪靈と成りて七代まで取るべし」と云ひければ、祐兼聞きて、實に斬り損じなば如何なる悪靈にも成るべしと思ひしより、膝振ひ太刀の打處も覺えざりける所に、筑紫のなかだと申しけるは、御家人訴訟の事ありて左衛門尉に付きけるが、訴訟協ふべき比祐經討たれければ、是等が所爲とや思ひけん、わざと太刀にては斬らで苦痛をさせん爲めに、鈍き刀にて掻き首にこ

そ爲たりけれ。然したる親類知音に有らざる者も、別れを惜み名残を悲ますと云ふ事無し。然るに勇士の至つて猛きは、敵を破り利きを碎き、軍の先を駆くる故に、敵の爲めに囚はると云へども、藝を感じ、身を助け、情を掛くるは先規なり。傳へ聞く、紀信が軍車に乗りしも、武威を感じ、楚王、將に成さんと云ひしかども、自ら死を望み、沛公軍を破り、片時も生きん事を悲みて、戰場の石に腦を碎きて失せにき。因つて勇士敵の爲めに命を暫くも全くせざるは古今の例なり。然れば五郎も宵にや失せんと思ひしが、夜明けて死ぬる「一本死す」こと、矢立の杉の一二の枝の謂なり。

## 伊豆の次郎が流されし事

然ても悪事千里を走る習ひにて、伊豆の次郎未練なりと、鎌倉中に披露ありければ、秩父の重忠御前にて此事を聞き、「曾我の五郎をば重忠賜はつて、重代のかうひらにて誅し候べきを、不覺第一の伊豆の次郎に下し給はつて、かはゆき次第と承り、口惜しく候」と申されければ、君聞食し、「然様の不覺人にて有るべくは、誰にても仰せ付けらるべきものを」とて、伊豆の次郎は御不審を蒙り、奥州外の濱へ流されしが、幾程無くて悪しき病を受けて、同じ年の九月に廿七歳にして失せにけり。これ偏に五郎が憤りの報ゆ「る脱力」所にやと、唇を返さぬ者は無かりけり。時致は五月に斬られければ、祐兼は九月に失せにけり。不思議なりし例、因果歴然とぞ見えける。

## 鬼王、だう三郎曾我へ歸りし事

ここに此人人の郎等に、鬼王、だう三郎とて二人の者あり。彼等は富士の裾野、井出の屋形より、次第の形見を取り持ち、曾我の里へぞ急ぎける。然れども惜みし名残なれば心は後にぞ留まりける。げにや幼少より育て奉り、世にも出で給はば、我我ならでは誰かは有るべきと、人も思ひ我もまた頼もしかりつるに、斯様に成り行き給ひしかば、慕ひ憶がれしも協はで、泣く泣く曾我へぞ歸りける。思ひの餘りに道の邊に暫し休らひて、富士野の方を顧みれば、松明多く走りめぐり、唯だ萬燈會の如し。今こそ事出で來ぬると見えければ、我君の御命如何が渡らせ給ふらんと、心もとなき限り無し。唯だ二人ましませば、大勢に捕り込められ、如何に隙無くましますらん。今は御身も疲れ給ふらんと思へば、走り歸りて御最後を見奉らまほしきも、隔たりぬれば協はずして、唯だ泣くより外の事ぞ無き。暫く有りて松明の數も次第に少く、火の光も薄く成りゆけば、君の御命も斯くやと、火の光も名残惜しく思ひければ、道の邊に倒れ伏し、聲も惜まず泣き居たり。馬も性あるものなれば、人人の別れをや惜みけん、富士野の空を顧みて、二三度までぞ嘶えける。然て有るべきにあらざれば、遠近のたつきも知らぬ山中に、覺束なきは富士野なり。泣く泣く空しき駒の口を牽き、故郷へとは急げども、行きも遣られぬ山路の、末も分明かに見え分かず。ここに人の使と思しくて、文持たる者、後より急ぎ來る。だう三郎袖を引かへて、「今宵井出の屋形には何事の有りけれ

ば、松明の数見え候ひつる」と問ひければ、「然ればこそとよ、知り給はずや、曾我の十郎、五郎と云ふ兄弟して、一族の工藤左衛門尉殿を親の敵とて討ち給ひぬ、あまつさへ御所の内まで斬り入りて、日本の侍達の斬られぬは候はず、手負死人二三百人も「〇一本こそアリ」候らん。然れども兄の十郎は夜半に討死し給ひぬ、弟の五郎殿は曉に及び生捕られ給ひき。此人人の振舞は、天魔鬼神の荒れたるにや、斯かる夥しき事こそ候はざりつれ。斯様の事を大磯の虎御前の妹、黄瀬川の龜鶴御前より、大磯へ告げさせ給ふ御使なり」とて、走り通りけり。二人の者共聞きて、爲損じ給ふべしとも思はねども、一期の大事なれば、心もとなく思ひ牽りしに、何事無くて本意を遂げ給ひぬるよと、歎きの中の喜びにて、次第の形見を直々に奉りけり。

## 同じく彼者共が遁世の事

然れば此者共は、我家にも歸らず、高野山に尋ね登り、俱に髻切りて、墨染の衣の色に心を成し、一筋に此人人の後世菩提を弔らひけるぞ有難き。

## 曾我にての追善の事

然ても母は、子共の返したる小袖を取り上げて、おのおの顔に押し當てて、其まま倒れ伏し、消え入り給

ひにけり。女房達漸ら介錯し、藥など口に注ぎ、養生しければ、僅に目ばかり持ち上げける。せめての事に文を開きて讀まんとすれども、目も昏れ心も心ならねば、文字も更に見え分かず。「恨めしや、わらはを」と計り云ひて、胸に引き當て又打伏しぬ。稍ありて息の下にて口説きけるは、「誠に凡夫の身程はかなき事は無し。此小袖を請ひて、永き世までの形見と思ひて、折節こそ有るに、二人連れて來り請ひけるものを知らずして、返せと云ひけん悔しさよ。五郎も限りと思ひてや、此度強く云ひけるぞや。幾程も無きもの故に不孝して、年比添はざりける悲しさよ。猶も心強く赦さざりせば一目も見ざらまし。久しく添はざりに、珍らしくも頼もしくも覺えしものを、せめて三日とも打添はで名残惜しさよ。なつかしかりける面影を、何時の世にかは相見ん」とて、聲も惜まらず泣き居たり。如何なる賤の男、賤の女に至るまで、涙を流さぬは無かりけり。二の宮の女房を始めとして、親しき人人は集りて泣き悲む事斜めならず。思ひの餘りに、母は十郎が居たりける處に倒れ入り、「ここにも住みしものを」とばかりにて、憂かりし閨の傍に、書きたる筆のすさびを見れば、一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀とぞ書きたりける。我身を有りとも思はぬ口ずさび、見るに涙も止まらず。此押板には古今、萬葉を始めとして、源氏、伊勢物語に至るまで、數の草紙を積み置きたれども、今より後の慰びには、誰かは是れを見るべきと、見るに思ひぞ増さりける。文をば二の宮の女房ぞ泣く泣く讀み連ねける。聞くに付けても、心は心とも覺えず。「人の習ひ神や佛に參りては、命を永く福幸をこそ祈るに、此者共は唯だ朝暮死に失せんとのみ申しければ、此度

遭れたりとも終に添ひ果つまじきぞや。それに付けても箱王を年比不孝して添はざりし事の悔しさよ。それは草の蔭にても聞け、誠には不孝せず、たとへば法師に成さんとせし事の協はぬに、不孝と云ひしを、下手無くして何と無く月日を重ねしばかりなり。小袖直垂を著せし事も日比に變らざりしを、二の宮の女房の著する様にて取らせしを、まことと思ひて、わらはをば、つらき者にや思ひけん。よし、なかなか今は歎きの便なり。打添ひ馴るる身なりせば、いよいよ名残も惜しかるべし。斯くて我身は何かは長らへ果てん憂き命、有るも有られぬ例かな」と、悶え焦れける。曾我の太郎も幼き時より取り育て、理無き事なれば、實子にも劣らず、心様また賢しかりしかば、はいきやうちくいての思ひを成し、朝夕疎かならざりしかども、所領廣からざれば一所を分くる事も無し。其上御勘當の人人の未なれば、清げならんも恐れありなどと、思ひしことも夢ぞかし。今更後悔益無しとぞ歎きける。母は日の暮れ夜の明るるに従ひて、いよいよ思ひぞ増さりける。「惜しからざりし憂き身なれども、彼等が行方若しやと思ふ故にこそ、つらき命も惜しかりつれ、今は淨土にて生れ合ひ、今一度見ん」とて、湯水を絶ちて伏し沈みければ、露の命も危くぞ見えし。親しき人人集りて、「憂き世の習、御身一人の歎きにあらず、然しも繁昌し給ひし平家の公達も、一度に十〇一本人アリ」二十人目の前にて海中に沈み、弓箭にたづさはり給ひし時の別れども、日數積り年月隔たりぬれば、然てのみこそ過ぎ候ひしか。今の世にも或は父母に後れ、或は夫妻に別れ、又は親子兄弟に離れ、歎く者のみこそ多く候へども、忽命を捨つるもの無し。誠に御子の爲めに御身を捨て給はん

こと、逆なる罪の深さ如何ばかりと思食す。泣く涙は「〇一本も」猛火と成りて子に掛かるとこそ聞きつれ、まして子の爲めに命を失ひ給はん事、罪業の程を知らず。如何にも身を全くして後世菩提を弔ひ給へ」と、様様に申しければ、僅か湯水ばかりぞ聞き入れける。然て有るべきならねば、僧達を請じ奉りて、成等正覺、頓生菩提とぞ取り納めける。母の弔らはるべき身の逆なる事に歎き悲みける。げにや世の中の定め無き、涙の種とぞ成りにける。箱根の別當も此事を聞き、急ぎ曾我に下り、諸共に歎き給ふ。箱王が出でし時の面影、愚老が涙の袖に留まり、師弟親子の別れ變るべきにあらずとて、さめざめと泣き給ふ。其後は持佛堂に参り、彼の菩提を弔らひ給ひけり。七日七日四十九日まで怠らず追善あり。誠に彌陀の誓願は、十惡五逆の大罪をも、一念十念の力を以て來迎引接し給ふべき他力の本願頼もしかりけり。此人人は父の爲めに身を捨てける心ざしなれば、罪にして而かも罪にあらず、其上在世の時も仁義を亂さざりしかば、後の世までも惡道へは墮在せられじと、頼もしくぞ覺えける。

## 禪師法師が自害の事

然ても此人人の弟に御房とて十八に成る法師一人あり。故河津の三郎が忌の中に生れたる子なり。母思ひの餘りに棄てんとせしを、伯父伊東九郎養ひて、越後國國上と云ふ山寺に登せ、伊東の禪師とぞ云ひける。九郎、平家へ参りて後親しきに由り、源義信が子と號して、折節武藏國に在りけるを、頼朝聞食し、義信

に仰せつけて召されければ、力無く、家の子郎等數十人下され「一本下し」しこと、不便なりし次第なり。大方「○一本同じ」兄弟とは申しながら、乳の中より他人に養はれ、しかも出家の身なり。是れも唯だ普通の儀なりせば、彼等まで御尋あるまじきを、兄共世に越え、名を萬天に揚げし故ぞかし。義信の使は、本坊に來りて斯様の次第を云ふ。禪師法師聞きて、「心憂や、弓矢取りの子が、我家を捨てて他の親に付く事は、ゆめゆめ有るまじき事なり。斯様の罪過は、其源を正されけるをや。同じ死する命、兄弟三人一つ枕に討死せば、如何が人目も嬉しからまし。」今更後悔すれども協はず。佛前に參りて御經開き讀まんとすれども、文字も見えざりければ、巻き納め、數珠さらさらと押し揉み、「南無平等大惠、一乘妙典、願はくは、法華讀誦の功力に依り、刹那の妄執を消滅し、安樂世界に迎へ取り給へ」と祈請して、劍を抜き弓手の脇に突き立て、右手に引き廻さんとする所を、同宿早く見付けて、是れは如何に」と取り付き押へければ、「退き候へ、人手に掛からんより清き自害をして見せ申さん。一つは同朋達の思食さるる所もあり、空しく鎌倉へ捕れん事、寺中坊中の名折なり。放し給へ」と怒りけれども、大勢なれば力及ばず、其上いよいよ弱り果てにけり。誠に心ならず、人數多にて働らかさず、自害半にぞ爲たりける。無念と云ふも餘りあり。御使は庭上に充滿して促めければ、力及ばず、上意歎し難くして渡されにけり。口惜しかりし次第なり。御使請取り輿に乗せて、鎌倉へこそ上りけれ。君聞食されて、御前に召されければ、昇かれて參りけり。君御覽せられて、「吾僧は河津が子か」と御尋ありければ、禪師坊前後も知らざりけるが、君の仰せを聞

きて、兩の手を押し動かし、起き上がらんと心ざしけれども、協はで、頭を持ち上げ、「然ん候、伊東が爲めには孫候」と申す。然て「兄どもが敵討ちけるをば知らせざりけるか。」「恐れながら將軍の仰せとも存じ候はず、一腹一生の兄共が、親の敵討ち候とて知らせ候はんに、たとへ出家にて候とも、同意せぬ畜生や候べき。御推量も候へ」とぞ申し上げたりける。君聞食し、「汝が眼ざしを見るに、頼朝に意趣ありと見えたり。事を尋ねん爲めに召しつるに、粗忽の自害所存の外なり。」「粗忽とは如何でか承り候。既に御使賜はつて召し捕れとの御説を承つて、其用意仕らぬ事や候べき。あはれ兄共が知らせてだに候はば、二人の者共をば祐經に押し向けて、愚僧は一人にて候とも、君を二太刀伺ひ奉りて、後世の訴へに仕るべきものを」とて、御前を覗み、言葉を放ちてぞ申しける。君聞食して、「頼朝には何の意趣か有りけるぞ。」「我等が先祖の敵、又は兄共が敵にては候はずや。これに付きても果報の勝劣ほど、憂き物は候はず。唯だ御威勢に押されて、斯様に罷り成つて候、恐れながら身が身に候はば、源平兩氏の戦に、何れ甲乙候べき」と申しければ、君は暫く物をも仰せられず。稍ありて猶も心を見んと思食しけん、「其手にても生きてんや、然も思はば、助くべし」と仰せ下されければ、禪師承つて、からからと打笑ひ、「よくよく人とも思食され候はずや。御助けある程ならば、如何で是れまで召さるべき。若し然もとや申さんを、聞食されん爲めに、正無き人に由りてこそ、然様の御言葉は候べけれ。口惜しき仰せかな」とぞ申しける。御寮聞食し、此の法師も兄共には劣らざりけり。助け置きなば、又大事を起すべき者なり。よくぞ召し寄せたりけると思召しける。

禪師重ねて申しけるは、「とても助かるまじき身、刹那の長らへも苦しく候へ」と、頻に申しければ、生年十八歳にして、終に斬られにけり。無慙なりし次第なり。君此者の氣色を御覽じて、「剛なる者の孫は剛なり。あはれ彼等に世の常の恩を興へて召仕はば、思ひ止まる事も有りなまし。弓矢取る者は誰劣るべきには有らねども、斯程の勇士天下に有らじ」と仰せも敢へず、御涙を流させ給ひしかば、御前伺候の侍共も、袖を濡らさぬは無かりけり。

京の小次郎が死する事

ここに此人人に語らはれ、同意せざりし一腹の兄、京の小次郎も、同じき八月に、鎌倉殿の御一門、相摸守の侍に、由良の三郎が謀物起して出でけるを、止めんとて、由井の濱にて大事の傷を蒙ふり、曾我に歸り、五日を経ずして死にけり。同じくは五月に、兄弟共と一所に死にたらば、如何が好かるべきとぞ申し合ひける。

三浦の與一が出家の事

三浦の與一も與せざりしが、幾程無くして御勘當を蒙ふり出家してけり。人は唯だ義と信との道をば正しくすべき事をや。

曾我物語 卷第十一

虎が「〇一本がナシ」曾我へ來りし事

そもそも建久四年九月上旬の比なるに、世の憂きを思ふに、鰲がぬ月日も移り來て、昨日今日とは思へども、憂き夏も過ぎ、秋もやうやう立ちぬれば、飛雁を掛け、上林の霜に訪ふ。貞女何處にか在る。くわんしよ衣を打ちて、りやうしん未だ歸らざる所に、ぜんき尼一人、濃き墨染の衣に、同じ色の袈裟を掛けて、蘆毛なる馬に具鞍置きて乗りし人出で來る。何者ぞと見れば、十郎が常に通ひし大磯の虎なり。彼等が母の許に行き、ま「〇一本まナシ」近き所に立ち入り、使をして云ひけるは、「此人人の百か日の孝養、大磯にても形の如く營むべけれども、箱根の御山にて有るべしと承り候へば、此御佛事をも聽聞申し、我身の營みをも其序にして、一つの調誦をも捧げばやと思ひ、参りて候」と云ひければ、母聞きて、「嬉しくも思ひ寄りおはしますものかな。十郎在りし方へ入らせ給へ、やがて見参に入るべし」と、荒れたる住家の扉開けて呼び入れにけり。虎は十郎が住所へ立ち入り見れば、いつしか庭の通路に草繁り、跡踏み付くる人も無し。塵のみ積る床の上、打拂ひたる氣色も見えず。今はの別れの曉まで、見馴れし所なれば、變る事は無けれども、其主は無かりけり。思ひしより過ぎ來し方のゆかしく、我身は元の身なれども、心は在

りし心ならず。月や有らぬ春や昔のかこち草、深き名残の盡きせねば、泣くより外の事ぞ無き。轉び入りたる其儘にて、暫し起きも上がらざりけり。枕も袖も浮くばかり、立ち添ふ物は面影の、それとばかりの情にて、涙も更に止まらず。やや暫く有りて、母出で會ひけり。虎を一目見しより、何とも物をば云はで、袖をば顔に押し當てて、さめざめと泣きけり。虎も母を見付け「〇一本つけナシ」て、在りし容顏の残り留まる心地して、打傾ぶき、聲も惜まず泣き居たり。夫の歎き、子の別れ、然こそは悲しかりけめと、推量られて哀れなり。母涙をおさへて云ひけるは、「斯く有るべしと思ひなば、十郎が在りし時、耻かしながら見奉るべかりしものを、身の貧なるに由り親むべきにも疎く、語らふべきにも然もあらで、萬づ思ふ様にも候はで、打過ぎし事の悔しさよ。十郎淺からず思ひ奉りし事なれば、唯だ十郎に向ふ心地して、なつかしく思ふ」と泣く泣く語りければ、虎も亦「身の數ならぬに由りて「〇一本でナシ」、御見參申さず」とて、是れも涙を流しけり。「形見とて残し置かれし馬、鞍、見る度毎に目も昏れ、佛の御名を稱ふる障りと成り候へば、亡き人の御爲めも然るべからず、此度の御佛事の御布施に思ひ定めて候」と、云ひも果てず打傾ぶきけり。「仰せの如く、形見は由無き物にて、これらが狩場より返したる小袖を見る度毎に、心亂れ候ぞや。是れも此度の御布施に思ひ向けて候。御身は十郎「〇一本がアリ」事ばかりこそ歎き給へ。わらは程罪深き者は候はじ。河津殿に後れたりし時、一日片時の命も長らへ難かりしに、つれなき身の長らへ、百日の内に數多の子に後れたり。如何ばかりとか思食す。殊に彼等二人は身を離さで、雙の膝に据え育て、父の形見と

思へば、憂き時「〇一本もアリ」彼等にこそは慰みしか。今より後は誰を見、何に心の慰むべき。箱王は法師に成らざりしを、かりそめに不孝と云ひし其まま、許せと云ふ人も無し。身の貧なるに由り何と無く打過ぎ、月日を送り、年來添はざりし事、今更悔しく候ぞとよ。打出でし時、兄が連れて來り、限りと思ひてや許せと申せしに、然らばと云ひし言の葉を、嬉し氣なりし容顏の現れたりし無慙さよ。親ならず子ならずは、老いたるわらはが言葉の末、誰かは重く思ふべきと、頼もしく思ひて、つくづくと凝視りしに、杯取り上げ、傾ぶくほど涙浮びて候ひしを、不孝を許す嬉しさの涙と思ひて候へば、斯様に成るべきとて、限りの涙にて候ひけるを、凡夫の悲しさは夢にも知らで、懐しかりける容顏、何しに年月不孝しけん、過ぎにし方まで悔しきに、せめて三日打添はで、歸れとばかりのあらましを、如何に哀れに思ひけん。何時の世にか相見て憂きを語りてまし」とて、また打伏して泣きけり。虎も涙に咽びつつ、暫し物をも云はざりけり、互の心の中、然こそと思ひ遣られたり。「是れなる御經は、彼等が最期に富士野よりも送りたる文の裏に書き奉りて候。此文を讀まんとすれば文字も見えず、近く寄りて讀み給へ、聞き候はん」とて差し出だす。十郎が文と聞けば懐しくて、讀まんとすれば目も昏れ、何れを其れとも見え分かず、胸に當てて泣くばかりにてぞ有りける。涙を立つる習ひ、斯程の心ざし有るべしとは思はざりしを、優しくも見ゆるなりけりと思ふに、涙を増さりける。「今宵は鼻れに留まりて、心靜かに物語申すべきが、箱根への用意させ候ひて曉に「〇一本にナシ」出で候べし。聞き給ひぬるや、これらが孝養せよとて、君よりは所領賜はり候、世に



は敵討つ者こそ多く候なれども、心様人に勝るるに由り、斯様の御恩に預り候。如何に云甲斐無し「〇一本く」とも、彼等が安穩ならんこそ嬉しくも」とて、「是れや昔上東門院の御時、和泉式部が娘、小式部の内侍に後れて悲みけるに、君哀れと思し食して、母が心を慰めんと思し食し、御衣を下されしかば、和泉式部、

諸共に苔の下にも朽ちずして埋もれぬ名を聞くぞ悲しき

斯様に詠みたりし事まで思ひ知られて忝く覺え候ぞや。それに付き候ひては、此度の佛事、心の及ぶ程營むべきにて候。此邊には然りぬべき導師も候はねば、別當を導師に定め参りて候。五郎が事忘れず御歎き候へば、一入懸なるべし。曉は伴ひ奉るべし」とて歸りにけり。虎は母が後姿を見送り、十郎が装思ひ出でられて、是れも名残は惜しかりけり。然らぬだに秋の夕は寂しきに、獨り伏屋の軒の月、涙に曇る折からや、折知り顔の鹿の聲、枕に弱る蟋蟀、軒端の萩を吹く風に、古郷思ひ知られつつ、時しも長き夜もすがら、明かしかねたる思ひ寐の、逢ふ夢だにも無ければや、はや「〇一本はやナシ、前句ノばやヲ誤リテ重寫シタルナラン」片敷く間の枕に置き添ふ露の重なれば、現の床も浮くばかり、明け方の雁の友を語らひ啼く聲も、羨しくぞ思ひ遣る、餘所の砧を聞くからに、身に沁む風のいとどしく、鐘聞く空に明けにけり。

母虎を具して箱根へ上りし事

荒れぬる宿とは思へども、枕並べし睦語の、出でぬる後の別路は、今も打添ふ心地して、起きもせず寐もせで物を思ひ居たる所に、馬に鞍置き引つ立つる、使は來り木幡山、君を思へば心から、うはの空にや籠るらん。母も立ち出でて、急ぐと云へば打出でぬ。おのづからなる道の邊、我方遠く成り行けば、其處とも知らぬ鞠子川、蹴上げて波や渡るらん。湯坂の峠を上るにも、別れし人も此道を、斯くこそ通ひ馴れしと、思ひ遣らるる梓弓、矢立の杉を見上げつつ、其人人の射ける矢も、此木の枝に有るらんと、梢の風も懐かしく、山路遙通行く程に、箱根の坊に着きにけり。やがて別當出で逢ひ給ひて、「然ても御歎きの日も數の哀れにて候」と仰せられければ、此人人も佛事の本意を申されけり。別當虎を見給ひて、「あれは何處よりの客人にや」と問ひければ、母有りのままにぞ語りたてまつる「〇一本語りける」。別當有難き心ざしとて、墨染の袖を濡らし給ふ。やや有りて別當、涙を止めて仰せられけるは、「法師が思ひとて方に劣り奉らず、盛りなる子を先に立つる親、若うして夫に後るる妻、世の常多しと申し候へ（〇一本申せ）ども、師に先立つ弟子は稀なり。それも先規無きにあらず。遠く震旦を思へば、顔回は貫首の弟子にて、才智並ぶ人無かりしかども、廿五歳にて師に先き立ち給ふ。我朝の慈覺は大師の御弟子なりしが、師の天台大師に先立ち奉る。西方院の座主院源僧正は、りやうみん大徳に後れ給ふ。斯様の事を思ひ出だせば愚僧一人が歎きにあらず。げにげに嘸劫を経ても、相見ん事有るまじき別れの道、歎き給ふも理なり。歎くべし、歎くべし」とて、御涙をはらはらと流し給ふ。「思へば誰にも劣るべきには有らねども、大磯の客人の御

心ざしこそ誠に有難くこそ候へ。相構へて深く歎き給ふべからず、これを眞の善知識として、他念無く菩提心を起し給へ。「一念の隨喜だにも莫大にて候ぞかし。斯様に思ひ切り、眞の道に入り給ひ候はば、餘念無くて行じ給ひ候へよ。佛も六年仙人に給仕行じてこそ、法華をば授かり給ひし。構へて惡念を捨て給ふべし。人人を討ちける人を怨めしと思ひ給はば、嗔恚の妄執と成りて、輪廻の業盡くべからず。あながち手を下ろして殺し、行きて盜まざれども、思へば其科を犯すにて候ぞ。構へて構へて殺生を心に除き給ふべし。然れば第一の戒にて候ぞ。女は殊に執情深きに依つて、三途の業盡きず候ぞや。相構へて相構へて」と細やかに教へられけれ「〇一本り」。

## 鬼の子捕らるる事

昔天竺に鬼子母と云ふ鬼あり。大阿修羅王が妻なり。五百人の子を持ち、これを養はんとて、物の命を斷つこと恒河沙の如し。殊に親の愛する子を好みて、捕り食ふ罪は「〇一本はナシ」盡し難し。佛これを悲み思食し、如何がして此殺生を止めんとて、智慧第一の迦葉尊者に告げ給ふ。迦葉、佛に申させ給ひけるは、「彼が五百人持ちて候子の中に、殊に寵愛の子を御隠し候ひて、御覽せられ候へ」と御申し有りければ、「然るべし」とて五百人の乙子を捕り、御鉢の下に隠し給ふ。父母の鬼これを尋ねけり。神通自在の者なりければ、上は非想非非想天、六欲天の雲の上、下は九山、八海、龍宮、捺落の底までも、曇り無く尋ねけれども無

かりけり。鬼共力を失ひ、大地に伏し轉び、泣き悲みけるぞ愚かなる。思ひの餘りに佛に參り申しけるは、「我れ五百人の子を持ちて候、其中にも乙子こそ殊に不便に候ひしを、物に捕られて失ひ候ひぬ。餘りに悲く候ひて、到らぬ所も無く尋ねて候へども、我等が神通にては尋ね出だすべしとも覺えず候。然るべくは御慈悲を以つて教へさせ給ひ候へ」とて、黄なる涙を流しけり。其時佛のたまはく、「然て子を失ひて尋ねるは悲しきものか。」「申すにや及び候はず、是れだにも出で來候はば、我等夫婦は如何に成り候とも苦しからず、餘りに可愛く候」と申しければ、「然様に子は悲しく無慙なる者ぞとよ。汝五百人の子を養はんが爲めに、物の命を殺すこと如何ほど」「〇一本ばかり」とか思ふ。其殺さるるものの中に、親も有り子も有り、兄弟親類如何ほどの歎きとか思ふ。思ひ知れりや、汝今ただ一人失ひてだにも斯様に悲むにや。まして多くの如何が」と示し給ひければ、鬼共頭をうなだれて圍繞して伺候しけり。「如何に汝等、猶しも物の命をや斷つべき。止まるならば、在所知らせん」と仰せられければ、鬼大きに悦び、今より後は更に殺生仕るまじく候「〇一本く候ナシ」、失ひし子の在所教へ給へ」と、たいはう申しけり。「然らば堅く殺生を止めよ」と約束ありければ、鬼重ねて申す様、「我等肉食を絶えしては、身命助かり難し、御慈悲の方便に預らん」と申す。佛御思案ありて、然らば一切衆生の用ひる飯の上を、少し散飯を取り汝に與ふべし、それにて命を盡き候へ」と佛勅ありければ、鬼承り、「我等は惡業煩惱にて身を圓めたり、假令佛勅の如く頂戴申すと云ふとも、肉食を止めては命あらじ」と申しければ、「然らば一口の飯に人の肉を磨り塗りて與ふべし」と、

御約束ありけり。然ればにや、今に至りて、散飯とて飯の上を少し取り、掌に當てて置く事は、此謂れにてぞ有りける。斯様に堅く誓約ありて、御鉢の下より子鬼を取り出だし給ひけり。其時鬼申しけるは、「我等神通を得たりと思へども、佛の方便には及び難し。まして後世こそ恐ろしけれ」とて、即ち御弟子と成り、佛果を得るとかや。あまつさへ法華守護神と成り、法華經を擁護せんと誓ひ給ふ。そもそも此鬼子母は形世に超えければ、帝釋これを奪ひ取り給ひぬ。阿修羅王大きに怒り、瞋恚の猛火を放ち、すでに須彌の半分以上まで攻め上り、鬪ふこと恒河沙を経るとも盡くること無し。其時帝釋、善法堂に立籠り、仁王經を請じ給ひつつ、四しゆ五わうの印を結び給ふ。時に虚空より盤石雨の如くに降り下り、修羅の大敵を骨灰に打ち砕く。然れども業因盡きざればまた蘇生り、大苦を受けたりと傳へたり。然れども、然しもは佛弟子と成りしかば、苦惱を離るるのみならず、法華の功德あり。斯様に鬼神だにも隨喜すれば、斯くの如くの佛果の縁ありとかや。

箱根にて佛事の事

斯くて別當は彼の者共の佛事執り行はんとし給ふ其隙に、虎にいよいよ教化し給ふは、「たまたま人身を受け此度淨土を欣はずは、また三途に歸るべし。祐成を善知識と思ひ、淨土を欣はんは何の疑か候べき。すでに斯様の法身と成り給へば、他の爲め未來永永有難き御事なり。法師とて御導師に成るべきにあらず、ただ

心を以つて師とする時は、如何でか往生の素懐空しからん。また五郎は寵愛馴染にて、御思ひ共に劣らねば、一入弔らひ奉るべし。誰か在る」とて、「〇一本とてナシ」僧達を請じ申せとて、「持佛堂の莊嚴せよ、客殿の塵取れ」と、模様下知し給ひけり。虎は別當の教化を聴き、身ながらも嬉しくぞ思ひける。其後數の僧達集り給ふ。御經多しと云へども、殊に勝れたる一乘妙典八卷を同音に讀誦し給ふ。五十展轉の功にだにも有難し、受持讀誦の結縁頼もしかりけり。御經やうやう過ぎしかば、別當高座に上り、彼等が追善の金打ち鳴らし、施主の心ざしを計り給へば、先づ御涙に咽びつつ、説法の御聲も出だし給はず。ややつて別當涙をおさへ、花房を捧げ、「それ生死の道は異にして、音信を何れの處にか通せん。分段境を隔つ、拜勤を何時の時にかけせん。二十餘年の夢、曉の月と空に隠れぬ。千萬端の愁、夕の嵐獨り吟じて、雲と成り雨と成り、哀憐の涙乾く事無し。朝を迎へ夕を送りて、懐舊の腸斷えなんとする「〇一本るナシ」所作未だ止まざるに、百日の忌景すでに満てり。悲みの至りて「〇一本なはアリ」悲しきは老いて子に後れ、恨みの殊に恨めしきは、盛にして夫に後る程の愁へ無し。老少不定を知ると云へども、猶前後の相違に迷ふこと、歎けども悔はず、惜めども験無し。然れば佛も愛別離苦と説き給ふ。一生は夢の如し、誰か百年の齡を保たん。萬事は皆空し、何れか常住の思を爲さん。命は水の上の泡の如し、魂は籠の中の鳥、開くを待ちて去るに同じ。消ゆるものは再び見えず、去るものは重ねて来らず。恨めしきかなや、釋迦大師の啓勸の教化を忘れ、悲しきかなや、閻魔法王の呵責の詞を聴けば、名利は身を助くと云へども、未だ北郎の屍を

養はず。恩愛の心を惱ませども、誰か黄泉の責を免れん。是れに因つて馳走す、所得幾何の利ぞや。是れが爲めに追駟す、所作多罪なり。暫く目を塞ぎて往時を思ふに、舊友皆空し。指を折りて、後進を數ふれば、親疎多く隠れぬ。時移り事去りて、今何ぞ渺茫たらんや。人留まりて我逝き、誰かまた残りや爲ん。三界無安、猶如火宅と見れば、王宮も是れ夢なり、天子と云ふも四苦の身なり。況や下劣貧賤の輩、何どか其罪輕かるべき。死に苦みを増し、業に随つて悲みを添ふべし。思ひ悟らぬぞ愚かなる。正にごんかく塵深くして、ちくかん幾何のぜんくわんぞ。たいれう雲靜にして松風ただ一聲、苑中花月相傳ふるに主を失ふ。七月半の盂蘭盆の尊靈、誰にか有らん」と、泣く泣く當座にぞ書きける。實に理極まりけり。「然れば親の子を思ふ心ざしの深き事は、父の恩を須彌に譬へ、母の恩を大海に同じと云へり。我が一切の間説くとも、父母の恩盡くる事無しと見えたり。胎内に宿り、身を苦しめ、心を盡し、月を重ね日を送り、生るる時は、桑の弓、蓬の矢を以つて天地四方を射、身體髪膚を父母に受け、敢て毀ひ傷らざるを孝の始めとす。襦袢の囊に包まれしより今に至るまで、晝夜に安きこと無し。人の親の習ひ、我身の衰へるをば知らずして、子の成人を願ひしぞかし。此恩を捨て、未だ盛りにも満ちずして母に先立ちぬ。然れば孝經に云はく、君は尊くして親しからず、母は親しくして尊からず、尊親共に是を兼ねたるは父一人なりと云へども、四の恩の中には二親なれば、母の歎きも切なれども、當るところを「〇一本の」耻、父の方に身を捨て、おのおの命を失ふ。人の親の子を思ふ闇に迷ふ道、愚なる子もいとほしく、片端なるも悲しきに、此人人は

弓馬の家に生れ、武略ともに賢し。後代に留む「る脱力」こと、遠きも近きも知らぬ人無し。同じ兄弟と云へども、仲の悪しきも有るぞかし。此殿原は幼少竹馬の昔より、馴れ睦ぶること類ひ無し。淨藏淨眼の古へにも耻ぢず、早離速離の昔にも似たり。遂に富士の裾野にして、同じ草葉の露と消え給へり。かの一條の攝政謙徳公の二人「〇一本のアリ」御子、前少將、後少將とおはしける。朝夕に亡せ給へり、斯かる例も有れば、生死無常の理初めて驚くべきにあらず。今開眼供養の御經、人人の手跡の裏なり。斯様に書き置きしを、餘所にて見るだにも悲しきに、まして御身に當て御心中然ぞ思食すらめ。それは親子の別れのこと、兄弟の契りの理無きを一言述べて候。又夫に別るる歎き、今一入色深き事なり。虚弓止まりて闇に寄せ立つ、上弦の月空に隠れぬ。三年のなじみ忽ち盡き、こしん床に上りて、盧氏が古へに有らねども、數行が涙袂を濕すらん。しやう蘭の匂、空薫とぞ成りにける。宵曉の鐘の聲、枕を並べし程には似ず。起居に見れば、馴れ來し人は餘も添はじ。山の端出づる月影を、心苦しく待ち得ても、見し面影には異らず。是れぞ慰み給ふ事あらじ。まこと夫婦の別れ忍び難けれども、昔も今も力に及ばざる道なれば、思ひ慰み給ふべし。彼の唐の玄宗の楊貴妃も、僅に詞を蓬萊宮の浪に傳ふらん。穆公の弄玉を重んぜしも、徒らに鳳凰臺の月に寄す。彼を思ひ是れを思ふに付けても、昔を今に準らへて、一佛淨土の縁を結び、願はくは九品往生の望みを遂げて、七世の父母、六親眷屬成佛」と、廻向の金打ち鳴らし、別當高座を下り給ふとして、

定め無き憂き世といとと思ひしに甲はるべき身の甲ふに付けても

と詠じ給ひければ、聴聞の貴賤哀れを催し、袖を絞らぬは無かりけり。供養もやうやう過ぎしかば、僧達も皆皆歸り給ひ、やや暫く有りて、「急ぎ下りたく候へども、たまたま上りて候へば、五郎が幼くて住み候ひし方を見候はん」と申されければ、別當のたまひけるは、「男に成りて後、其形見と思へば人をも置かず、わざと破れをも修理せず、昔に少しも違はず候。いざさせ給へ、墓所をも築きて候へば御覽せよ」とて連れて行き、立ち寄り見給へば、墓の上に草生ひけるを、別當見給ひて、「君見ずや、北郎の夕の雨、疊疊たる青塚の色を。また見ずや、東郎の秋の風、歴歴たる白楊の聲を」と云へる古き詩を思ひ出で給ふ。是れは舊の住處とのたまへば、軒の葱は紅葉して、思ひの色を顯はせり。歎きは何れも盡きせねば、繁る甲斐無き忘草、其名ばかりは由ぞ無き。長月上旬の事なれば、四方の紅葉の色は袖の涙を染むるかと思へ、世に故里は苦しきに、易くも過ぐる初時雨、羨しくぞ覺えける。壁に書きたる筆のすざみを見れば、

出でて往なば心輕しと云ひやせん身のありさまを人の知らねば

と云ふ古き歌の端を、箱玉丸とぞ書きたりける。師匠に暇をも乞はず、人に行方をも知らせず、唯だ一人出づること、思ひ寄りて語り、幼かりし面影、只今の心地して、由無き所へ來りけると、絶え焦がれければ、胸を焦す焔は、咸陽宮の夕の烟に異ならず。袂に落つる涙の、龍門原上の草葉を染むる。おもてに落つる塵の海、かこちよれいとも云ひつべし。然てしも有るべきに有らざれば、泣く泣く母は曾我に下りし

が、虎は大磯に歸らんとす。別當も五郎に別れし心地して、「御名残惜しうこそ候へ。然ても此度の御佛事有難く候、過去幽靈定めて正覺成り給ふべし。また大磯の客人の御心ざしこそ、世に勝れては候へ。構へて構へて怠らず申らひ給へ」と仰せられければ、虎も涙を押へて、「佛事を承りし事、廻心發願の儀なりければ、飽かぬ別れの道、何時かは怠り候はん」と申しければ、別當重ねて申されけるは、「數多の寶を積まんよりは、誠の心には如かず」とこそはのたまひける。

貧女が一燈の事

然る程に、虎が心ざしの深きを以つて昔を思ふに、天然に阿闍世王と云ふ大王あり。常に佛を請じ、數の寶を捧げ給ふ。或時佛の御歸り夜に入りければ、王宮より祇園精舎まで、十萬石の油を以つて、萬燈を灯し給ひけり。ここに貧なる女あり。如何にもして此燈明の數に入らばやと思ひけれども、朝夕の營みだにも堪へ難き貧女なれば、一燈の力も無し。涙を流し如何にと方便すれども協はで、東西に馳走し、自ら髪を切り、錢二文にぞ賣りたりける。是れにてもやと思ひければ、油を彼の錢にて買ひ、やうやう一燈灯して口説きけるは、我れ前業如何なりければ、百千燈をだに灯す人の有るに、一燈をだに灯しかねたる、憂き身の程の恨めしさよとて、彼の燈明の下に泣き伏しけり。此心ざしを現はさん爲めにや、折節山風荒く吹きて、數の燈明を一度に吹き消しけり。然れば貧女が一燈ばかりは消えず有りけり。目連不思議に思食し、袈裟にて扇

がせ給ひけれども消えざりけり。其時目連、佛に問ひ給ふ。「多くの燈明の消ゆる中に、如何なれば一燈消えざる」と申させ給へば、佛のたまはく、「阿闍世王の萬燈の光り、疎かには有らねども、貧女が心ざしの深き事を顯はさんが爲めに、萬燈は消えて一燈は残る」と示し給ふ。「然ればにや此貧女成佛して、須彌燈光如來と申すは此貧女の事なり。長者の萬燈より貧女の一燈と申し傳へたるは此事なり。御心ざしを勵まし候へ。返す返す」と仰せられければ、虎も母も諸共に、深く追善の心あり。諸佛憐み給ふらんと嬉しくて、おのおの暇申して歸りにけり。母、虎に申しけるは、「今より後は常に來り、わらはを見給へ、自らもまた十郎が名残に見奉りなん。暫く曾我にましまして、慰さみ給へ」などと語りて行きけるが、虎申しけるは、「嬉しくは承り候へども、此人人の御爲めに、毎日法華經六部づつ六人して、第三年まで心ざし候。わらは無くては無沙汰あるべし、委しく申し付けて參るべし」と申しければ、母は、「實の御心ざし有難くこそ候へ、相構へて絶えず訪ひ訪はれ參らすべし」とて、泣く泣く打別れにけり。げにや有爲轉變の習ひ、花は根に歸り、鳥は古巢に入り、日月天に傾ぶき、松柏の青き色も遂には五衰の時あり、芙蓉の仇なる形は松風に破るる例、歎きても餘りあり、悲みても堪へず。唯だ一筋に佛道を願ふ時は、草木國土、悉皆成佛とぞ見えける。然ても大將殿御出に由り、富士の裾野の御屋形薨を並べ、軒を續け數ありしかども、御狩過ぎしかば、一字も残らず元の野原に成りにけり。然れども残るものとは、兄弟の願志執心、或時は十郎祐成と名乗り、或時は五郎時致と呼ばはり、晝夜闘ふ言絶えず。思はず通り合はする者は、このよそほひを

聞き、忽に死ぬる者もあり。やうやう生きてたる者は、狂人と成りて兄弟の詞を移し、苦痛離れ難しと歎くのみなり。君聞食されて、不便なりとて、ようぎやう上人と云ふめでたき法師を請じ、弔はるべき由、細やかにこそ仰せけれ。

菅丞相の事

然ても彼者共が亡靈荒れければ、ようぎやう上人、頼朝に申されけるは、「昔も然る例こそ多く候へ。辱くも菅丞相の昔讒言に由つて筑紫へ流され、遂に歸京も無くして空しく成り給ひし其願志残り、雷と成り給ひて都を傾ぶけ給はんとし給ひしを、天台の座主、一字千金の力を以て、やうやう慰籍め奉り、神と齋ひ奉るに、威光あらたにまします、今の天満大自在天神これなり。其外怒を成して神と崇められ給ふ御事、承平の將門、弘仁の仲成より以來其數多し。如何様にも此兄弟の人人をも、神に御齋ひあるべきにや」とぞ申されける。

兄弟神に齋はるる事

然る程に頼朝つくづく思食しけるは、此者共の振舞世に超えし事なり。神に齋ひても益あるべしとて、照明光神宮と崇め、富士の裾野に社を立て、松風と云ふ所を長く御寄進ありけり。即ち彼のよう行上人を

山とし、寺僧を居ゑ、禰宜神主を定めて、五月廿八日には、殊に讀經、神樂、いろいろの奉幣を捧ぐることに今に絶えず。それよりして彼處の鬮絶えて、佛果を證する由、神人の夢に見えけり。尊しとも云ふばかり無し。然れば此神に詣り、敵討たせて賜べと祈りければ、必ず協ひけるとかや。今も遠國近國の輩、歩み運び仰がぬ者は無かりけり。

曾我物語 卷第十二

虎箱根にて暇乞して行き別れし事

然る程に大磯の虎は、十郎祐成討死して後、如何なる淵川にも入らばやと思ひけれども、亡き人の菩提の爲めにも成るまじければ、偏に憂き世を背き彼の人の後世を弔らはんと思ひ立ち、袈裟、衣など調へて、箱根山に上り、百か日の佛事の折節に、泣く泣く翡翠の飾りを剃り落し、五戒を持ちけり。然しも美しくしかりつる花の袂を引き變へて、墨の衣に褰れ果てけり。心ざしの程こそ類ひ少なき情なれ。母は是れを見て、「我も同じ墨の袂に成りて、彼等が菩提をも弔らふべし、今此つくも髪を付けても何にかは爲ん」とぞ歎き悲まれける。別當様様に教訓して止められけり。母御前力無く、五郎が遺跡なれば名残惜しくは思へども、此處にて日を送るべき事ならねば、別當に暇を乞ひ、歸るとて、虎御前に申されけるは、「曾我へ誘ひ十郎が形見にみ參らせ候はん」と云はれければ、虎、「尤も御供申し、互の形見に見え參らせたく候へども、大磯にての追善、又は善光寺への心ざし候。下向にこそ參り候はめ」とて行き別れけり。

井出の屋形の跡見し事

斯くて虎心に「〇一本心にナシ」思ひけるは、此序に十郎の空しく成りし富士の裾、井出の屋形の跡を心ざして、箱根を後ろに成して行く程に、其日もやうやう暮れぬれば、三嶋の拜殿に通夜申し、明くれば三嶋を出でて車がへしに立ち休らひ、千本の松原心細く歩み過ぎ、浮嶋が原にも出でぬ。南は蒼海漫漫として、田子の浦波滔滔たり。北は松山かうかうとして、裾野の嵐颯颯たり。未だ旅慣れの事なれば、彼處を何處と知らねども、心ざしを知るべにて、やうやう歩み行く程に、井出の里に近づきぬ。虎は里の翁に逢ひて問ひけるは、「過ぎにし夏の比、鎌倉殿の御狩の時、敵討つて同じく討たれし曾我の人人の跡や知らせ給ひて候はば、教へさせ給へ」と云ひければ、此翁心ある者にて、虎が顔をつくづくと見て、「若し御縁にても渡らせ給ひ候か。痛はしき御有標かな、人をも連れさせ給はず、唯だ一人これまで御尋ね候事、なほざりの御心ざしとも覺えず。若し十郎殿に御心ざし深く渡らせ給ひし大磯の虎御前にてましますか。有りのままに承り候はば、教へ參らせん」と云ひければ、虎は是れを聞き、別れの涙乾かぬに、また打添へて賤の男が情の言葉に、愁の色あらはれて、問ふにつらさの涙、忍びも敢へぬ氣色を見て、翁、然ればこそと思ひて、共に袖をぞ絞りける。「然らば誘ひ申さん」とて、北へ六七町遙かに野を分け行けば、亡き人の果てにける草葉の露かとなつかしく、洲蘆の雨、他郷の歎、岸柳の秋の風の「〇一本のナシ」、遠塞の心とかやも思ひ出でられて、何處とも無く行く程に、日も夕暮の峰の嵐、心細くぞ聞えける。翁或る方を爪指して、「あれこそ井出の屋形の跡にて候へ。あの邊こそ工藤左衛門殿の討たれさせ候所にて候へ。また彼處は十郎殿の討た

れさせ給ひ候所、此處は五郎殿の御生害の所、然て又あれに見え候松の本こそ、二人の死骸を隠し參らせたる所候よ」と、懇に教へければ、虎涙をおさへ、且つうは嬉しく、且つうは悲しくて、唯だ泣くより外の事ぞ無き。一村松の本に立ち寄り見れば、げにも埋れて覺え候土の少し高く見えければ、過ぎにし五月の末の事なれば、花薄、葎生ひ繁り、其跡だにも見えざりけれども、亡き人の縁と聞くからに、なつかしく覺えて、塚の邊に伏し轉び、我も同じ苔の下に埋れなば、今更斯かる思ひはせざらまし。黄泉如何なる住みかなれば、逝きて再び歸らざると、伏し沈みけり。哀れなりし有標、譬へん方こそ無かりけれ。まことに翁も心ある者なれば、共に涙を流しけり。諸共に斯くては協はじとや思ひけん、「御歎き候とも、其甲斐あるまじく候。夜に成れば此處には狼と申す物、道行く人を惱まし候、御留まり候ひては協ふまじく候。これより御歸り候て、今夜は賤が伏屋になりとも御泊り候ひて、一夜を明させ給ひ候へ。旅は何か苦しく候べき」と申しければ、「嬉しくものたまふものかな。此邊懇に教へ給ふに、宿まで思ひ寄り給ふ事の嬉しさよ。然様に怖ろしきものの候ひて、身を捨てても何にかは爲べき」とて、塚の邊にて念佛申し、過去幽霊、成佛得脱と廻向すれば、十郎の魂靈も如何ばかり嬉しと「〇一本く」思すらんと、思ひ遣られて哀れなり。虎涙の際より斯くぞ連ね給ひける。

露とのみ消えにし跡を來て見れば尾花が末に秋風ぞ吹く

憂き世ぞと思ひ初めにし墨ごろも今また露の何と置くらん



斯くて井出の邊を行き別れ、其夜は翁の所に留まり、明けぬれば野原の露に萎れつつ、足に任せて行く程に、富士の煙を見るからに、つらき思ひに比へつつ、其處とも知らぬ道の邊の、叢ごとの虫までも、鳴く音を添へて哀れなり。げに唯だだにも秋の思ひは悲しきに、寔れ果てぬる旅衣、いとどつらさを重ねつつ、辿り辿りも行く程に、手越の宿にぞ着きにける。

## 手越の少將に遭ひし事

然ても虎は、或る小家に立ち寄りて、主の女を語らひて、少將御前を呼び出だして、「旅人の是れにて、そと申すべき事の候と申し給へ」と云ひければ、「易き事」とて呼び出だしけり。少將は、虎が變れる姿を見て、云ひ出だすべき言葉も無くて、ただ涙をぞ流しける。やや有りて、虎泣く泣く申しけるは、「かの祐成に相馴れて、すでに三年に成り候。宿縁深き故にや、また餘の人を見んとは思はざりつるなり。此人失せ給ひぬる【〇一本のナシ】と聞きし時は、同じ谷の下に埋ればやと思ひしかども、つれなき命長らへて候ぞや。然れば世を渡る遊者の習ひは、心に任せぬ事も候べしと思ひて、百か日の佛事の序に、箱根にて髪を下ろして、唯だ一人迷ひ出で、富士の裾野の邊にて、其人の跡ばかりなりとも見て、憂かりし心をも慰み、序に此邊近くおはしければ、見参に入り物語をも申し、此姿をも見え参らせんと思ひて、これまで來りて候」と語りければ、少將も涙をおさへて、「げにげに如何ばかり御歡きと思ひ遣られてこそ候へ」とて、泣くよ

り外の事ぞ無き。重ねて少將云ひけるは、「過ぎにし夏の比、工藤左衛門に呼ばれて酒を飲みし時、十郎殿をも呼び入れ参らせしかば、初めて見参に入りしなり。工藤左衛門の【〇一本のナシ】悪口に、此殿の思ひ切り給へる色現はれて、只今事出で來ぬべしと、座敷もすさまじく候ひしに、何とか思はれけん、酒を飲み押し靜めて立たれし事、只今の心地して哀れに候ぞや。我我立ち出で、斯くとも知らせ申したく候ひしかども、御身と親しきこと人に知られんも憚り有りしかば、然てのみ過ぎしなり。其夜祐經の宿直の事、乳母の童にて妻戸のかき金はつさせし事、不思議にこそ思さめ。たとひ一夜の妻なりとも、互の情を思ふべきに、如何なる事にや、如何にもして討たせ参らせんと思ひし事、唯だ偏に御身故ぞかし」と語りければ、虎は此事を初めて聞き、十郎殿最期の時、斯かる教を如何ばかり嬉しく思ひ給ひけん。此告げ無かりせば、如何でか本意を遂げさせ給ふべきにやと、愚なる身は思はれて、いよいよ涙に咽ひけり。

## 少將 出家の事

斯くて少將は、虎が變れる姿を見て、「まことに羨しく成れるすがたかな。道理かな、理かな、然らぬだに憂き世の徒なるを思ふに、千年の松も遂には朽ち、朝顔の露の命ぞかし。ましてや女は五障三從の罪深しと申すなり。たまたま人身を受けながら、殊に我等は罪深き身なり。其故にただ一生の間、人を誑らかさんと思ふ【〇一本思ふナシ】ばかりなれば、心を往來の人に掛け、身を上下の輩に任せ、日も西

山に傾ぶけば、夢の中の假の姿を飾り、月東嶺に出でぬれば、誰とも知らぬ人を待ち、夜毎に變る移香の、身に留まりて心を惱まし、朝な朝なの手枕の、露に餘波を惜みつつ、胸をのみ焦す事、返す返すも口惜しき憂き身なり。此世は終の住所にあらず、水に宿れる月よりも、はかなしと思ふをりふし、此人の事を聞き、又御身の變れる姿を見て、いよいよ憂き世に心も留まらず。昨日は曾我の里に花やかなりし姿、今日は富士野の露と消ゆ。朝に紅顔あつて世路に誇れども、夕には白骨と成りて郊原に朽ちぬと云ふも理なり。然ればにや萬事は無二亦無三なり。御身は十郎殿「〇一本をアリ」善知識として、憂き世を背き給ふ。我は又御身の姿を善知識として、衣を墨に染めんと思ひ候」とて、やがて翡翠の髪を剃り落し、花の袂を脱ぎ替へて、濃き墨染に更めつつ、年二十七と申すに、駿河國手越の宿を立ち出でけり。世を捨つる身と云ひながら、心強くも住み慣れし、我が故郷を立ち離れにし心の中、眞に優しく哀れなりとかや。

## 虎三少將 法然に逢ひ奉りし事

然る程に、二人は打連れだち、麻の衣、紙の衾を肩に懸けて、諸國を修行し、信濃國善光寺に、一兩年のほど他念を交へずして念佛申し、過去聖靈、頓生菩提と祈り、また都に上り、法然上人に逢ひ奉り、念佛の法談を委しく聽聞し、彌増に念佛修行進みけるこそ有難けれ。

## 虎大磯に閉籠りし事

斯くて虎は、山山寺寺拜み廻りけるが、さすがに故郷や戀しかりけん、又は十郎の在りし邊やなつかしく思ひけん、大磯に歸り、高麗寺の山の奥を尋ね入り、柴の庵に閉ぢ籠り、一向專修の行を修し、九品往生の望み怠らず、二人の尼諸共に、一つ庵に床を占め、行ひ澄ましてぞおはしける。

## 母二の宮の姉大磯へ尋ね行きし事

然ても曾我の母御前は、一日片時も世に長らふべき心地は無けれども、力及ばぬ憂き世の習ひとて、思はずに年月をぞ送りける。人の子の同じ難なるを見ても、二人が面影身に添ひて悲しく、人の病にて死ぬるをも、彼等がせめて斯く有らば、取り扱ひしものをも云ふべきに、かりそめに立ち出でて、再び歸らぬ別れこそ、神ならぬ身のつらさなれ。餘りの戀しさのをりをりは、常に二の宮の姉を呼び、憂き事どもを語り合ひて、泣くより外の事は無し。然ても緊がぬ月日なれば、第三年も送り、七年に當る時に、姉を呼びて云ひけるは、「今日は此者共が七年忌に當り候へば、追善を營み弔らひ侍るなり。然ても十郎が契り深かりし大磯の虎、百か日の佛事の序に、箱根にて尼に成り、御山より行き別れしが、善光寺に一兩年籠りて、其後諸國を修行して、今程は大磯に歸り、高麗寺の山の奥に、行ひ澄まして候由聞き及びしに、いざや虎

が住所見ん」と云ひければ、「わらはも然こそと思ひ候に御供申さん」とて、二人曾我の里を立ち出で、中村を「〇一本をナシ」通り、山彦山を打越えて、高麗寺の奥に尋ね入り、夏草の繁みが末を分け行く程に、袖は涙、裾は露に萎れつつ、かの邊なる里の翁に問ひけるは、「虎御前と申せし人の尼に成りて住み給ふ所は何處にて候やらん」と問ひければ、「あれに見え候山の奥に森の候所こそ、かの人の草庵にて候へ」と教へければ、嬉しくも分け入り見れば、まことに幽かなる住ひにて、垣には鶯、朝顔這ひ掛かり、軒には葱交りの忘草露深くして、物思ふ袖に異ならず。庭には蓬生ひ繁り、鹿の臥處かとぞ見えし。瓢箪しばしば空しくして、草顔淵が巷に満ち、藜藜深く鎖して、雨原憲が樞を濕すとも見えたり。まことに心細くて、人の住所とも見えざりけり。

## 虎出で逢ひて呼び入れし事

然ても母や二の宮の姉は、やや久しく彼方此方立ち廻り見ければ、中に幽かなる聲にて、日中の禮讃の勤も果てぬと思しくて、念佛忍び忍びに心細く申しけるを聞きて愈く覚え、柴の編戸をほとほと叩き、「物申さん」と云へば、虎「誰そ」と答ふるを見れば、未だ三十にも成らざる者が、殊の外に瘠せ衰へ、いつしか老の姿に打見えて、濃き墨染の衣に同じ色の袈裟を掛け、菩提樹の數珠、花の帽子取り具して、香の煙に染み返り、賢くも行ひ入りたる其姿、竹林の七賢、商山に入りし四皓も、これには如何で勝るべきと、

羨ましくぞ覺えける。此人人をただ一目見て夢の心地して、「あら珍しく御渡り候や、然らに現とも覺えず候、先づ内へ入らせ給へ」とて、二間なる所を打拂ひ、「これへ」と請じ入れつつ、亡き人の母や姉ぞと見るよりも、流るる涙をおさへ難し「〇一本かねけり」母も姉も泣く泣く庵室の體を見まはせば、三間に造りたるを、二間をば持佛堂にこしらへ、阿彌陀の三尊を東向に懸け奉り、浄土の三部經、往生要集、八軸の一乗妙典も、机の上に置かれたり。又傍らに古今、萬葉、伊勢物語、狂言繪語の草子ども取り「〇一本取りナシ」散らされたり。佛の御前に六時に花香あざやかに供へ、二人の位牌の前にも花香同じく供へたり。二の宮の姉云ひけるは、「あら有難の御心ざしの程や、これを忘るまじき事と思ひ給ひて、二人の位牌を立て弔らひ給ふ事よ。借老の契り淺からずと申すも、今こそ思ひ知られて候へ。但し十郎殿ばかりをこそ弔らひ給ふべきに、五郎殿まで弔らひ給ふ事の有難さよ。わらはは現在の兄弟にて候へども、是程までは思ひ寄らば、何れも前世の宿執にて、善知識と成り給ひぬ」と云ひも果てず、涙を流しければ、母も少將も聲立つるばかりにぞ悲みける。やや有りて、母云ひけるは、「十郎が事忘るる間も候はねば、常にも参り見奉りたく候ひしかども、心にも任せぬ女の身なれば、人の心をも憚るなどせし程に、今まで斯かる御住處をも見参らせず候。彼者共が七年の追善曾我にて取り營み、又御有様をも見参らせたく候て、これなる女房を誘ひ來りて候ぞや。又親子恩愛の至つて切なる事、人の申し習はずをも、我身の上かと思はれ候。年月やうやう過ぐれども、忘るる事も候はず。然れば様を變へんと思ふも、幼者ども棄て難くて、思ひも切ら

す候。これと申すも、心ざしの至つて切ならざるかと、我が身ながらも憂たてく覺え候。御身も然して久しき契りにてもましますと、其上所領持ちて便ある事ならねば、思ひ出がましき事も無し。唯だ偏に前世の宿業に引かれて、互に善知識に成り給ひぬと、餘りに尊く哀れに覺えて、わらはまでも一つ蓮の縁を結ばばやと思ひ候なり。凡そ人間の八苦、天上の五衰は、今に始めの事にて候へども、前業の拙なき身なれば、無常の理にも驚かず、つれなき憂き世に長らへ候。我身ながらもあさましく候。然るに五障三従の身ながらも、幸ひに佛法流布の世に生れて、出離生死の道を求むべく候へども、女人の愚かさは其れも協はず候。面々は此程思ひ取り給ふ事なれば、後生の助かるべき事をも知らせ給ひて候らん。あはれ語らせ給へかし、協はぬまでも心に掛けて見候はん」と云ひければ、虎涙を止めて申しけるは、「まことに是れまで御入り、夢の心地して、御心ざし有り難く思ひ候。斯かる身と成り果てぬるも、然しながら、十郎殿故と思ひ奉れば、時の間も忘るる事も侍べらず。此世は不定の境、それは愛別離苦の悲を翻へして、菩提の彼岸に至る事もやと、聖教の要文どもあらあら尋ね求め、然るべき善知識にも逢ひ奉るか、諸國を修行し、都に上り、法然上人に逢ひ奉り、念佛一行を受け、一筋に淨土を欣ひ候なり。あの尼御前は、我が姉にてましまし候。自らを羨みて同じく共に様を變へ、一つ庵に閉ぢ籠り行ひ候なり。今思ひ候へば、此人は發心の便りなりけりと嬉しく覺え候。其上わらは不思議に釋尊の遺弟に列りて比丘尼の名を汚し、辱なく本願の稱名を頼み、三時に六根を淨め、一心に生死を離れん事を願ひ候。本願如何でか過まり給ふ

べきと、疑ひの心も候はず。五郎殿も同じ煙と消え給ひしかば、二人ともに成佛得脱と弔らひ奉らん爲めに、二人の位牌を安置して候なり。諸法從縁起として、何事も縁に引かれ候なれば、二人ともに順縁逆縁に、得道の縁と成らん事疑ひあるべからず。凡そ分段輪廻の里に生れて、必ず死滅の恨を得、妄想如幻の家に來ては、遂に別離の悲み有り。出づる息の入る息を待たぬ世の中に生れ、あまつさへ遇ひ難き佛教に遇ひながら、此度空しく過ぐる事、寶の山に入り手を空しくするなるべし。相構へて佛道に御心を掛け、淨土へ參らんと思食すべきなり」と申しければ、母も二の宮の姉も渴仰肝に銘じて、隨喜の涙を流して申しけるは、「世路に交る習ひ、世の中の營みに心を掛け、再び三途の故郷に歸り、如何なる苦患をか受け候はんずらんと、かねて悲しく候。然れば尊き人にも逢ひ奉り、女人の得道すべき法門聞かまほしく候へども、然るべき縁無ければ、とかく過ぎ行き候處に、今の念佛申すとて、人なみなみに稱へ申せども、何と心をも持ち、如何様なるおもむきにて往生すべく候や、かつて思ひ分けたる事も候はず。同じくは序に委しく承り候はば、如何ばかり嬉しく候ひなん」とぞ云はれける。是れ偏に彼者共の死したりける縁に由つて、佛道に心ざしけり。まことに彼者死にて親に思を掛けけるとは云へども、佛道にも入りなば、一つの孝行にも成りなんとぞ思はれける。有難くこそ覺えけれ。

少將 法門の事

斯くて母も二の宮も、「佛道のおもむきを委しく聞かまはしくこそ候へ」と申しければ、虎は「〇一本はナシ」少將の方を見遣り、少し打笑ひ、「姉御は念佛の法門ども知らせ給ひて候へ、申して聞かせ参らせ給へ」と申しければ、「わらはも委しき事は知り参らせず候、一年都にて法然上人仰せられしは、そもそも生死の根源を尋ね候へば、ただ一念の妄執に引かされて、由無く法性の都を迷ひ出でて、三界六道に生れ、衆生とは成れり。然れば地獄の八寒八熱の苦、餓鬼の饑饉の愁、畜生残害の思ひ、其他天上の五衰、人間の八苦、一つとして受けずと云ふ事無く、上は有頂天を限り、下は泥梨を際として、出づる事は無きが故に、流轉の衆生とは申すなり。然りと云へども、宿善や催しけん、今人間に生れぬ。内に本有の佛性あり、外に諸佛の悲願あり。人木石にあらず、發心せば何どか成佛得脱無からん。それに付きて修行區區なりと云へども、我等如きの衆生は、諸行の徳に協ひ難し。先づ法然房が如くは、七千餘卷の經藏に入りて、つらつら出離の要義を案ずるに、顯に付け密に付け、開悟易からず。事と云ひ理と云ひ、修行成就し難し。一實圓融の窓の前には、即是の妙觀に疲れ、三密同體の床の上には、又現世の涉入顯はし難し。然る間、世の業を計りて、淨土を欣ひ、他力を頼みて名號を稱ふ。まことに淨土の經文は、直至道場の目足なり、有智無智誰の人か歸せざらんや。すでに正像早く暮れて、戒定慧の三學は名のみ残りて、有教無人、有名無實なり。殊に女人は五障三從とて障りある身なれば、即身成佛は先づ置きぬ。聞法結縁の爲めに靈佛靈社に詣づるさへ、踏まざる靈地あり、拜せざる佛像あり。天台山は相武の御願、傳教の建立なり。一乘の峯高うし

て眞如の月朗なりと云へども、五障の闇照す事無し。高野山は曉峨天皇の御宇、弘法大師の地を占めし、八葉の嶺、八つの谷、れいれい「冷冷力」として水潔しと云へども、三從の垢を滌がず。其他金峰山の雲の上、醍醐、三井寺霞の底深し。白山、書寫の寺、斯様の所所には女人近づく事も無し。然れば或經の文には、三世の諸佛の眼は大地に落ちて朽つるとも、女人成佛する事無しと云へり。又或經の文には、女人は地獄の使なり、能く佛の種を斷つ。外の面は菩薩に似たれども、内の心は夜叉の如しと云へり。然れば内典外典に嫌はれたる處に、彌陀如來こそ、極重惡人、無他方便と誓ひて、別に又女人成佛の願を起し給ふ。斯程に懇に憐れみ給ふ事を、信ぜず行ぜずして、又三途に歸らん事、たとへば普婆が萬病を愈す藥に、もろもろの藥をなんりやう「何兩カ」合せりとは知らざれども、服すれば則ち愈ゆ。病極めて重き者の、藥ばかりにてはと疑ひて服せずは、普婆が術も扁鵲が醫方も益あるべからず。その如く煩惱惡業は極めて重し。此名號にては如何かと疑ひて、信ぜず行ぜざらんは、彌陀の本願も釋迦の説法も空しかるべし。そもそも藥を得て服せずして死せん事、崑崙山に行きて玉を取らずして歸り、梅檀の林に入りて梢を待たずして果てなば、後悔するとも由無し。其上五劫思惟、兆載永劫の萬善萬行、諸婆羅蜜の功德を三字に收め給へり。然れば阿字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八萬諸聖教と云ふ時は、八萬教法、諸佛菩薩も名號は廣大の功德と成れり。然れば天台には法報應の三身、空假中の三諦なりと釋しまし候。森羅萬象、山河大地、彌陀に洩れたる事無し。これに由つて唯だ専ら彌陀を以て法門の主とすと釋し給へり。じやうる「〇じやうど（淨土）」

カ」の行にはいとくたり大りそくせんしやうくとく「〇みとくだいり、そくぜくそく、むじやうくとく（爲得大利、則是具足、無上功德）の訛」と説き、はうゑ「〇はうど（報土）カ」の行には、一萬三千佛を高さ十丈に黄金を以て十度作り供養せんよりは、一遍の名號は勝れたりと云へり。善知識の教を深く信じて、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と稱ふれば、三祇百大劫の修行をも超え、塵沙無明の惑をも斷ぜず。致使凡夫念即生、不斷煩惱得涅槃とて、終焉の時は一さんの心を變化して、觀音勢至、無數の聖衆、化佛菩薩、踊躍歡喜して、須臾の間に無爲の報土へ參りなば、無邊の菩薩を同學とし、正覺の如來を師とし、寶地に遊び、樹下に行きて、鸚鵡、舍利、迦陵、頻伽の聲を聞き、空無常無我の四德波羅蜜の悟を聞き給ひなば、過去の恩、所生の父母、妻子眷族、有縁の衆生を導かん爲めに、洞然猛火の焰に交り給ひ、紅蓮大紅蓮の氷に入り給ふとも、解脫の袂は安樂として、濟度利生し給ふべし。但し往生の成不成は信心の有無に由るべし、ゆめゆめ疑ふこと勿れとのたまふを、我我は聽聞申して候」と申しければ、母感涙をおさへて云ひけるは、「今の法門聽聞申し候へば、信心肝に銘じて有難候。今より後は方方の御弟子にて候べし」とて、三度伏し拜まれけり。有難かりし事どもなり。

母の宮行き別れし事

然る程に、日もやうやう傾ぶきて、高麗寺の入相も聞ゆれば、餘波盡きせず思へども、おのおの立ち出でて二の宮の里へとこそ歸りけれ。虎、少將は門送して後ろの隠るる程見送り、涙と共に庵室に歸り、初夜の禮讃始めて、念佛心細くぞ申しける。其後人人の行方を聞けば、おのおの宿所に歸り、聞きつる法門の如く、造次顛沛、一心不亂に念佛す。昔は夫婦偕老の別れを慕ひ、今は兄弟の斯く成り行く事の思ひや積りけん、老病と云ひ歎きと云ひ、六十の暮方に念佛申して、遂に往生しけるとぞ聞えける。然て二人の尼御前、或夜の夢に、十郎、五郎打連れ來り、頭には玉の冠を着、身には瓔珞を飾り、光明赫奕として、おのおのを伏し拜み申しけるは、「此間念佛申し、經を讀み、懇に弔らひ給ふ故に、兜率の内院に參る。これ然しながら、夫婦偕老の契り深きに由つて、無爲眞實の解脫の因と成る。其恩德は億億萬劫にも報じ難し」とて虚空へ飛び去りぬ。虎夢覺めて、ただ現の心地して思ひけるは、五重の闇晴れ、三明の月朗かにまします大聖釋尊さへ、耶輸陀羅女の別れを思食す。況や我等、此年月戀しと思ふ處に、目前に兄弟を夢に見て、昔戀しく成りぬ。然れば夜の猿は傾ぶく月に叫び、秋の虫は枯れ行く草に悲むとかや。鳥獸までも愛別離苦を悲むと見えたり。然れば此道は、迷ひなば共に惡道の輪廻斷ち難し、悟りなば皆成等菩提の因縁成りぬべし。偕老同穴の契り誠に顯はれ、九品蓮臺の上にては、舊の契りを失はず、一つ蓮に座を並べ、解脫の袂を絞るべしとて、少將も共に涙をぞ流しける。然て彼の二人の尼、心ざし淺からずして、虎が嶺に上りて花を摘めば、少將は谷を下りて水を掬ひ、一人花を供ふれば、一人は香を焚き、俱に一佛淨土の縁を結ぶ。谷の水、峰の嵐、發心の媒と成り、花の色、鳥の聲、自ら觀念の便りと成る。つくづく思へば萬物

轉變の理、四相遷流の習ひ、三界より下界に至るまで、一つとして遁るべきやう無し。日月天に廻りて、有爲を且暮に現はし、寒暑時を違へず、無常を晝夜に盡くす。然れば漢の高祖の三尺の劍も、遂に他の寶と成り、秦の始皇の萬里の都も、自ら荆棘の野邊と成る。彼を思ひ是れを見るにも、唯だ偏に憂き世を遁れ、眞の道に入るべきものをや。斯かりし程に二人の尼、行業積り七旬の齡長け、五月の末つ方少病少惱にして、西に向ひ、肩を竝べ、膝を組み、端座台掌して、念佛百遍稱へて、一心不亂にして、音樂雲に聞え、異香薫じて聖衆來迎し給ひて、眠るが如く往生の素懷を遂げにけり。高きも卑しきも老少不定の世の習ひ、誰か無常を遁るべき。富も寶も遂には夢の中の樂みなり。殊に女人は罪深きことなれば、念佛に過ぎたる事あるべからず。斯様の物語見聞かん人人は、狂言綺語の縁に由り、荒き心を翻へし、寶の道におもむき、菩提を求むる便りと爲すべし。其心も無からん人は、斯かる事を聞きても何にかは爲ん。よくよく耳に留め心に染めて、永き世の苦みを遁れ、西方淨土に生るべきものなり。

曾我物語 終

珍書保存會 正宗敦夫主幹

希觀の資料、古寫本、古刻本、參考圖録類の原形複製、主に和紙コロタイプ印刷。會員實費標準價美濃判一枚金五錢。(定價の半額)。非豫約、自由撰擇の會員組織。細則御申越次第送呈。  
 第一刊 能澤蕃山自筆「孝經小解」……定價十圓  
 第二刊 宮内省藏「饅頭屋本節用集」……定價十二圓  
 第三刊 森根園父子書入本「本草和名」定價十五圓  
 申込所 東京府北豊島區内長崎町一六二長島方  
 振替東京二六七三四 珍書保存會

日本古典全集

各期五十册 豫約出版  
 一册五十錢 全廿五圓

顧問 上通泰先生  
 山田孝雄先生  
 新村出先生

正宗敦夫 編纂校訂

輓近我邦出版界に一期を劃せる廉價版の始祖として、類書の追躰し能はざる至難なる古典複製に精進する事四年。既に第一期五十册、第二期五十册、及第一期再版五十册の刊行を結了す。内容に就ては學界の巨匠擧つて支持し、推賞する處、既に定評あり。愛書家、研學の士が日常の實用書たるを旨とし、國民必讀の典籍として普及を期せり。現在第三期の半に達し昭和五年早春には第四期新版五十册(價格變更)の豫約を募集せんとす。【内容見本、細則御申込次第送呈】

一、本書は學界の翹望に因り「日本古典全集」中、教科用并に不斷に普及を要する諸册を採り、學徒が日常實用の書として其自由撰擇に委せり。  
 一、本書の價格は凡そ百頁毎に金二十五錢とし、\*一個を以て此單位を示す。但し特殊の用紙印刷を用ゐる實費の嵩む書には例外を設く。  
 一、送料は\*一個につき二錢の割合と均定する。  
 一、本書は絶えず新版を加へて學界の要望に添うてゆく。若し書肆の店頭に完備せぬ場合は何卒本會へ直接御照會御注文を願ひたし。

昭和四年十月二十日印刷 曾我物語  
 昭和四年十一月十日發行 \*\*\* 定價金七十五錢



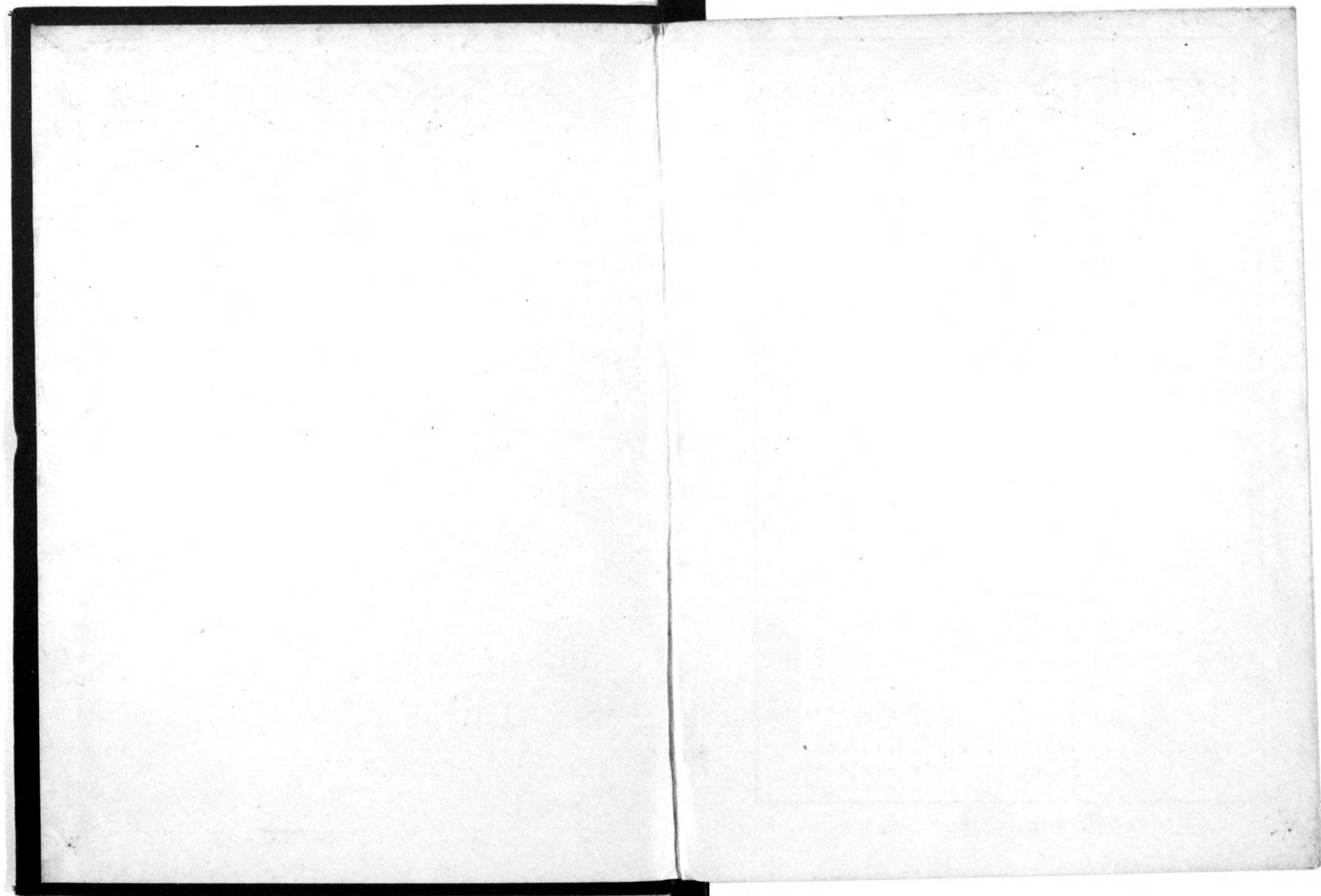
編纂者 正宗敦夫  
 東京府北豊島區長崎町一六二  
 發行者 會社 日本古典全集刊行會  
 代表社員 長島東一  
 裝幀者 廣川松五郎  
 東京府北豊島區長崎町一六二  
 印刷所 不二印刷所  
 印刷者 高瀬清吉

發行所 東京府北豊島區長崎町一六二  
 會社 日本古典全集刊行會  
 振替東京七三〇三二

古典文庫 第二回 (昭和四年秋季) 發表書目 \* 一個(百頁)ニ付定價金貳拾五錢也送料 \* 一個二錢均定

古事記	***	萬葉集品物圖繪 上	***	西鶴諸國咄(西鶴集)	*
萬葉集(卷一、卷二、卷三)【近刊】	***	萬葉集品物圖繪 下	***	一目玉鉢(西鶴集)	*
萬葉集(卷四、卷五、卷六)【近刊】	***	御堂關白記 上	***	諸艶大鑑(西鶴集)	**
萬葉集(卷七、卷八、卷九)【近刊】	***	御堂關白記 下	***	西鶴置土産(西鶴集)	*
萬葉集(卷十、十一、十二)【近刊】	***	紫式部日記	*	好色盛衰記(西鶴集)	*
萬葉集 【以下全卷嗣出】		清少納言(枕草紙)	**	古數學書集 上	**
古風土記集 上(出雲)	**	蜻蛉日記	**	古數學書集 下	**
古風土記集 中(播磨)	**	後撰和歌集(片假字本)	**	賀茂眞淵集	**
古風土記集 下	**	竹取、大和、住吉、唐物語	**	玉かつま 上	**
探輯諸國風土記	**	宇治拾遺物語	**	玉かつま 下	**
延喜式(第一)	**	保元物語。平治物語。承久記	**	本朝度量權衡攷	**
延喜式(第二)	**	義經記	**	錢幣考遺	*
延喜式(第三)	**	曾我物語	**	錢幣考遺圖錄	**
延喜式(第四)	**	吾妻鏡(第一)	**	重訂本草綱目啓蒙(第一)	**
延喜式(第五)	**	吾妻鏡(第二)	**	重訂本草綱目啓蒙(第二)	**
延喜式(第六)	**	吾妻鏡(第三)	**	重訂本草綱目啓蒙(第三)	**
延喜式(第七)	**	吾妻鏡(第四)	**	重訂本草綱目啓蒙(第四)	**
上宮聖德法王帝說	*	吾妻鏡(第五)	**	ぎや・と・へかどる 上、	**
校本日本靈異記	**	吾妻鏡(第六)	**	ぎや・と・へかどる 下	**
觀古雜帖。埋麿發香	**	吾妻鏡(第七)	**	妙貞問答。顯爲錄。破提字子	**
儼圖	**	吾妻鏡(第八)	**	萬葉集其他 嗣出	





終